

トウイ・キオウの物語

(斷腸新聲・傳翹 *Truyện Kiều*)

原作 グエン・ズー (阮攸 *Nguyễn Du*)



越英訳・脚注 レ・スアン・トウイ (*Lê Xuân Thủy*)

英和訳 佐藤清二 (*Seiji Sato*)

黒田佳子 (*Yoshiko Kuroda*)

日本の読者の皆様へ

ベトナムの大詩人グエン・ズー (阮攸 *Nguyễn Du*) の作品「トウイ・キオウの物語 (斷腸新聲・傳翹 *Truyện Kiều*)」を、佐藤清二さんが日本語に翻訳しました。私は、ここに日本語版の序文を書くことを大変嬉しく思います。

「トウイ・キオウの物語」はベトナム文学の宝物です。二百年も昔に書かれた作品ですが、現在でもベトナムの読者の魂を強く揺り動かします。

ベトナムでは、「トウイ・キオウの物語」を読み解くことは、文学を愛する人たちにとって尽きることのない魅力となっています。「トウイ・キオウの物語」を鑑賞することは、人生のこの上ない喜びです。ベトナムでは、この作品を暗唱するほど深く愛する人も少なくありません。第一行から最終行まで朗唱できる人、逆に最終行から第一行まで朗唱できる人、任意の行、段落あるいは頁から朗唱できる人までいます。ベトナムでは、密かな気持ちを打ち明けたり、挨拶をしたり、お祝いの言葉を述べる際に、あるいは相手の才能を試す際に、「トウイ・キオウの物語」の詩句を用いるという習慣があります。ベトナムでは、大抵の人が「トウイ・キオウの物語」を誦んじています。お母さんは、赤ちゃんを寝かしつけるために「トウイ・キオウの物語」を引用します。恋人たちは、強い思いを打ち明けたり誓いを立てるのにキオウの言葉を借ります。

月は空高く明るく輝いていました
二人は厳かに誓いを交わしました

「トウイ・キョウの物語」は、二十世紀に入ってから広く研究され、紹介され、また複数の外国語にも翻訳されました。佐藤さんの取り組みに先立ち、すでに何名かの日本の方がこれを日本語に翻訳しています。しかしながら「トウイ・キョウの物語」は、様々な読者がそれぞれ異なる視点から理解し何かを発見する、そういう作品なのです。このことは、大作家なら人生についての深い考えを言葉の結晶に閉じ込めようとすることを考えれば、容易に理解されるでしょう。この点からは、「トウイ・キョウの物語」の作者の人となりを知ること

も欠かせません。グエン・ズーは類い希な才能を備えた人でした。彼は文人家系の家に生まれ育ちました。彼の兄はグエン(阮)朝の首相を務めました。彼は国中の文化の真髄を授かりました。彼の父親の生まれ故郷は、ベトナム中部のハーティン省で、勉学を好む伝統を持ち、多くの逸材を輩出してきた地域です。彼の母親の生まれ故郷は、ベトナム北部のバクニン省で、民謡クアンホーを始めとする伝統文化に恵まれた地域です。彼の母親自身もその道で才能を発揮していました。戦時中のグエン・ズーは荒んだ放浪生活を送り、栄光と屈辱を共に味わいました。彼は、フエの朝廷(グエン朝)の高等官吏になってから、北京の朝廷に謁見を請う正使として二度派遣されました。(二度目の任務は、旅の途中で病に倒れたため全うすることはできず、遂に五十余年の生涯を閉じました。)

グエン・ズーは、熱い人間愛に共感し震える慈悲の心を持っていました。彼の著作「降霊～死者の魂に捧げる詞～」の中で、彼は死者たちが辿った人生に対して同情し心の痛みを感じました。それは、時期悪く生まれ親を残して死んでし

まった子供の人生から、人民のために死んでいった官吏や将校、皇帝の人生まで、また、一生あくせくと骨折って働き続けざるを得なかった悲惨な労務者の人生までもです。しかし、グエン・ズーが最も憐れみを覚えたのは、女性に対してでした。彼は次のように書いています。

何と痛ましい運命の人なのでしょう
その悲しい運命は人ごとに思えません

「トウイ・キョウの物語」は、グエン・ズーの芸術的心情と類い希な才能を余すところなく発揮した、彼の最高傑作です。

「トウイ・キョウの物語」を読めば、十五年に及ぶキョウの流浪の人生の各場面は、苦悩と涙に満ち溢れていることが分かります。キョウの苦悩は、詩人グエン・ズーの苦悩であり、あらゆる人々が被り得る苦悩でもあります。東アジアの女性たちは、封建社会の中で差別を受け、悲惨と屈辱に耐え忍ばざるを得ませんでした。「トウイ・キョウの物語」は、虐げられた女性たちや、貧困の極みの中で骨折って働く人々に対する、グエン・ズーの憐れみの心を具体的に表現しています。グエン・ズーは、人間が住み苦境の中で暮らしている地域なら、美しさの象徴である女性たちが踏みにじられている地域なら、ベトナムのみならずいかなる地域に対しても、人間としての良心の声を張り上げました。

「トウイ・キョウの物語」は、グエン・ズーやベトナムの文化を理解する上で役に立つことでしょう。ベトナムの文化の特質は、人間に対する親しみと愛情、一人一人あるいは全ての国民の生きる権利を守るために立ち上がる勇気です。それ

は、ベトナムの大詩人グエン・チャイ（世界文化人：World Celebrity of Culture）によって、すでに数百年も昔に表現されています。

善行の本質は人々に平安をもたらすこと
(対明戦勝宣言)

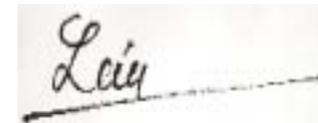
そして、グエン・ズーの時代から二百年経った今でも、ベトナムの人々は、道理に合わぬ苦難や不正義、貧困から解放するための、あるいは真の民主主義に向け前進するための闘いの中に身を置いているのです。

「トウイ・キョウの物語」とグエン・ズーは、私たちベトナム人の誇りです。1966年、グエン・ズーは世界文化人として認定を受けました。「トウイ・キョウの物語」を読み進むことは、皆様にとってベトナム文化の富士山に登頂するようなものであると、私は敢えてそのように申し上げます。高みへの道を進むのは楽ではありません。しかし、困難であればあるほど、より素晴らしい発見があるに違いありません。そして、日本の文化とベトナムの文化は、共に中国文化に關係し影響を受けた東アジア文化圏に属していることから、私たち両国民が互いを認め合い、理解し合うことは難しいことではないと信じます。それは、「トウイ・キョウの物語」の読者にとって難しく感じる理由の一つが、中国古典の引用に度々出会うためだからです。しかし、皆様が物語の意味を把握した時、感情の震えを古典の引用による簡単な描写で表現するグエン・ズー独特の手法が、大変興味深いものであることに気がつかれるでしょう。そして私は、ベトナムの読者がこれら

の古典の引用を理解するのと同じように、日本の読者の皆様も理解するであろうことを信じます。さらに、「トウイ・キョウの物語」やその作者グエン・ズーを理解する上で、「文学引論辞典」のような辞典やその他の文芸資料を参照することもできます。全てのことが明らかとなった時、私たちは同じ喜びと相互理解、友情に包まれたことを共に嬉しく思うことでしょう。十六世紀のベトナムに渡来し、私たちが愛し守っている貴重な遺産であるホイアンの街に文化の足跡を残した日本人も、きっと「トウイ・キョウの物語」とグエン・ズーを理解するであろうことを確信しています。

佐藤さんの取り組みに感謝致しますとともに、日本の読者の皆様が「トウイ・キョウの物語」とグエン・ズーへの道を成功裏に進まれますようお願い申し上げます。

ハノイ、2004年5月7日
ディエンビエンフー戦勝50周年記念の日



チュウ・ジャン・グエン・ヴァン・ルー
作家 文学出版所・所長
ハノイーベトナム



「トウイ・キョウの物語」の舞台となった地域

「トウイ・キオウの物語」の登場人物

トウイ・キオウ (翠翹) 主人公、ヴウン夫妻の長女
 キム・チョン (金重) 学生、キオウの婚約者
 トウイ・ヴァン (翠雲) ヴウン夫妻の次女

ヴウン (王) 夫妻 キオウ、ヴァン、
 ヴウン・クァンの両親
 ヴウン・クァン (王観) ヴウン夫妻の息子
 ダム・ティエン (淡仙) 遠い昔に亡くなった歌姫
 チュン (終) 氏 役所の書記
 マー・ザム・シン (馬監生) キオウの最初の夫
 トウー・バー (秀婆) 青楼の女将、
 マー・ザム・シンの相棒
 スー・カイン (楚卿) 流れ者でトウー・バーの
 共犯者
 マー・キオウ (馬嬌) キオウの惨めな時期の仲間
 トウック・キ・タム (束其心) キオウの二番目の夫
 老トウック (束) トウック・キ・タムの父親

リンチン (臨清) の役人

ホアン・トウー (宦姐) トウックの妻
 ホアン (宦) 夫人 ホアン・トウーの母親
 クエン (犬) とウンッ (鷹) ホアン家の使用人
 ホア・ノー (花奴) キオウの侍女名

ホアン家の侍女長

チャック・トウエン (濯泉)
 スァン (春) とトウー (秋)
 ザック・ズエン (覺縁)
 バック・バー (薄婆)
 バック・ハイン (薄幸)

タム・ホップ (三合)
 トウー・ハイ (徐海)

ホー・トン・ヒエン (胡宗憲)
 ドー (都) 氏

キオウの戒名
 ホアン家の侍女
 尼僧
 青楼の女将
 キオウの三番目の夫、
 バック・バーの甥
 尼僧で予言者
 キオウの四番目の夫、
 幸運な戦士
 朝廷の特使
 リンチン (臨清) の役所の
 書記

トウイ・キョウの物語（斷腸新聲・傳翹 *Truyện Kiều*）
グエン・ズー（阮攸 *Nguyễn Du*）作

(1行～6行)

百年、それは人の命の長さ。一人の人に、非常に優れた才能
と恵まれた人生が共に授けられることは滅多にありません。
五百年、それは海を桑畑に変えるほどの時の長さ¹。その間
には、数多くの痛ましい出来事が起こるもので、佳人が不運に
つきまとわれることも少なくありません²。
不幸な佳人は不思議に多いものですが、そんなに驚くよう
なことでもありません。紅の頬³を持つ少女に嫉妬が向けら
れるのは、この青空の下で起こりがちな、人の世の習わしな
のです。

第1章 ヴウン家
(7行～38行)

灯りの傍らで芳稿⁴が開かれ
古い竹簡に綴られた
愛の物語が
いま始まろうとしている

明朝は嘉靖年間⁵、四域が平定され二京の守りも堅かった
十六世紀のこと。程々の富と地位をもつ名士、ヴウン（王）家
がありました。

息子は末っ子のヴウン・クァン（王観）で、この家の跡継ぎ
でした。娘二人は姉のトウイ・キョウ（翠翹）と妹のトウイ・
ヴァン（翠雲）。二人は共に神々しいまでに美しく、梅ほど
にほっそりと、雪のように清い心を持ちながら、それぞれ異
なる魅力を持っていました。

妹のヴァンは、満月のように丸いふっくらとした顔立ち⁶
と蚕が臥したような二つの眉で、とても美しい印象を与えて
いました。雲よりも艶やかな髪と、雪よりも白い肌。花開く
ような暖かな微笑みと翡翠のように澄んだ美しい声は、人を
うっとりさせました。

姉のキョウは、妹よりもさらに優雅で、魅力的で、才能に
溢れていました。瞳は透き通った秋の水面のように輝き、眉

¹ 伝説によると、五百年毎に海の一部が消えて、桑の木が良く育つ沖積平野に変わ
ってしまふ。人、物、考え方が転変し続けることを比喩的に表現したもの。（和
訳者注：成語「滄桑之變」、「滄海桑田」。神仙伝・卷二「王遠」巻七「麻姑」より。
鳥の爪のような指を持つ女仙・麻姑は、久しぶりに再会した神仙・王遠に語った。
「お目に掛かりましてより、早くも東海が三たび桑田に変ずるのをこの目で見ま
した。先ごろ蓬萊に参りましたが、これまた水は昔の大会の時よりも、ほぼ半分
ほどに浅くなっていました。やがては陸地になってしまうことでしょう」と）
² 「ある面で優れた者は、他の面では劣っている」とも理解できる。
³ 若く美しい女性を指す。

⁴ 虫から守るために香料を施された手書きの書物のこと。「有名な、良く知られた
書物」とも理解できる。
⁵ 西暦 1522 年から 1567 年。
⁶ ここでトウイ・ヴァンは、理想的な美人としてではなく、誠実な顔をしていると
描かれている。満月のような顔の丸さというのは誇張された表現。

第2章 ダム・ティエンの墓 (39行～132行)

は春の山並みのよう。彼女の輝きに花はうらやみ、瑞々しさに柳もすねるほど。その一瞥は都市を倒し帝国を滅ぼすこともできたでしょう。比類ない美しさと才能に生まれつきの聡明さも加わったキョウは、詩や絵画だけでなく、歌謡や美しい韻文も好み、クン・トゥウン（宮商）⁷の五音階をすっかり修得し、胡琴⁸の演奏にも秀でていました。

彼女が自ら作曲し、好んで演奏した曲は「薄命」。なぜか聴く人の涙を誘わずにはいない、不思議な悲しい音色の曲でした。キョウは紅い裳裾⁹を装う良家の花のような娘として、青春時代の始まり、髪にかんざし¹⁰を挿す年頃となりました。けれど、彼女は東の壁の向こうでぶらつく蜂や蝶¹¹のような若者たちの誘惑に惑わされることもなく、目立たない窓掛けの奥でひっそり暮らしていました。

春の日は燕¹²が飛ぶように過ぎゆきます。春の晴れ渡る九十日のうち、すでに六十日が過ぎ去りました。新緑が遠く地平線まで広がって、梨の木の花には白い花が散りばめられていました。それは陰暦三月、清明節¹³の頃でした。

墓地への通りは、墓参りのため各地から集まってきた人々で、まるで鶯か燕¹⁴のように賑わっていました。

姉のトゥイ・キョウ、妹のトゥイ・ヴァン、そして彼女たちの弟も着飾って散歩に出かけました。道すがら途切れぬ馬車の流れや、色とりどりの服装の波に混じって、裕福そうな若者たちが行き交っていました。お参りされた墓の傍らでは金塊に似せた紙製の供え物がまかれ、それを燃やした灰が空高く舞い上がっていました¹⁵。けれど、辺りには無造作に盛り上がっただけの粗末な墓も散在していました。

陽は傾いて西に沈もうとしていました。彼女たちは、目の前の柔らかな風景に気を引かれながら、手をつなぎ小川に沿ってぶらぶらと戻ろうとしていました。眼下に見える曲がりくねった小川は、下流に架かる橋の狭い橋桁の方へさらさらと流れていました。萎れた緑に枯れた黄色が混ざった雑草に覆われて、荒れた土盛りの墓が見えました。

⁷ 中国古来の五音階（宮・商・角・徴・羽）のうち、初めの二音階。

⁸ ピーバ（琵琶）とも呼ばれる。漢の皇帝により和睦のために遣わされたチャオ・キウン（昭君）が胡族（匈奴）に囚われの身であった際に用いられた。（和訳者注：現代用語として用いられる「胡琴」は、弓奏弦楽器である二胡などを意味するが、本書では、「胡琴」または「琴」を、琵琶などの、胴と棹をもつ弾奏弦楽器の総称として用いることとする）

⁹ 中国では昔、良家の娘は紅い裳裾の衣装をまとっていた。

¹⁰ 昔、娘が年頃（笄年：十五歳）になると、髪にかんざしを挿した。

¹¹ 「蜂や蝶」は、女性に親切的な誘惑者を指す定型表現。

¹² 中国では機織りの梭（ひ）が燕の形をしている。

¹³ 陰暦三月のうち陽暦四月下旬まで。（和訳者注：立春から立夏までの九十日のうち六十日が過ぎた頃で、具体的には四月五日頃より十五日間）

¹⁴ 「着飾った群衆、あるいは概して身分の高い紳士」を、時には「軽薄で墮落した取り巻き連中」を指す。

¹⁵ 中国や一部のベトナムの家庭では、先祖の墓の周りで銀塊や金塊に似せた紙製の供え物を燃やして、先祖に送り届けるという習わしがある。

「まあ、清明節というのに、ここにはお線香も煙もないのね」
キョウのいぶかしげな声に、ヴウン・クエンはその由来を説明しました。

「ここに眠るダム・ティエン（淡仙）は、才能と美貌に恵まれた有名な歌姫で、かつて彼女の家の門前は、いつも鶯と燕のような若者たちで賑わっていました。ちょうどその頃、ダム・ティエンの評判に惹かれた一人の青年がいて、彼は求愛のために遠い国から彼女を訪ねてきました。しかし、紅の頬を授かった歌姫の運命は、何と儚かったことか。この香しい花枝は、春の栄華のさなか、突然折れてしまったのです。旅人は船が岸辺に着いて初めて、かんざしは折れ花瓶は砕けてしまったことを知らされたのでした。すでに彼女の部屋は、虚しく冷たい空気に占められ、馬車の轍も消えかけて、うっすらと緑の苔に覆われていました。涙とやり場の無い無念さに、旅人の落胆は鎮まりませんでした。「ああ、私たちは結ばれない運命だったのだ。天が共に生きることを望まなかったのなら、せめてこの小さな記念の品が来世では私たちを結ぶるしとなりますように」と祈って、彼は梓の木でできた棺と真珠で飾られた天蓋を用意し、彼女を丁重に埋葬しました。やがて、野草がその塚を覆っていきました。その時から幾度、銀色の月の兎が沈み¹⁶、金色の太陽の鳥が傾いたことか¹⁷。今はもう参る人もない、見捨てられた墓なのです」

キョウは何を感じたのでしょうか。その話を聞くと、真珠のような涙を流して訴えました。

「何と痛ましい運命の人なのでしょう。その悲しい運命は人ごとに思えません。それにしても、なぜそのようなことが起こるのでしょうか」

紅の少女の頬は色褪せ
青春は無為に
生ある時は憧れの的
今は何と夫無き亡霊

かつて少女に恋し優しかった鳳凰たち
紅の頬を望んでくれた恋人たちは
どこに消えたのか
今はもう悲しむ人もいない

「この偶然の出会いのしるしに、お線香を焚いて上げましょう。ダム・ティエン、ダム・ティエン。黄泉の国¹⁸に住むあなたには、きっと私の姿が見えますわね」

彼女は祈りの詞を唱え、墓前にかがんで野の草花を少し供えてから後ずさりしました。陽が傾く中、風は葦の穂先を撫でながら優しく吹いていました。

¹⁶ 漢詩では、月をしばしば銀色の兎と称する。(和訳者注：銀兎。月の中に兎がいるという伝説から)

¹⁷ 漢詩では、太陽をしばしば金色の鳥と称する。(和訳者注：金鳥。太陽の中に三本足の鳥が棲むという伝説から)

¹⁸ 死後の世界。



Rằng: "Sao trong tiết Thanh Minh,

"Mà đây hương khói vắng tanh thế mà?"

「まあ、清明節せいめいせつというのに、ここにはお線香せんこうも煙けむりもないのね」

キョウは髪に挿したかんざしを抜いて、立木の幹に三韻の
四行詩を刻みました。すると、それから深い瞑想に入っ
てしまい、意識を奪われたように身動きもしなくなりました。や
がて、彼女の神秘的な容貌には悲しみの影が深まり、つい
には泣き崩れてしまいました。

傍らに佇んでいたヴァンが姉を窘めました。

「お姉様、おかしいです。遠い昔に亡くなった人のために、
そんなに激しく涙を流すなんてとても変です」

妹の言葉にキョウは答えました。

「この人に降りかかったような災難や残酷な運命というものは、
紅の頬を授かる誰かのために、実は幾千年にも渡り、す
でに用意されていたものではなかったのか。この考えが私を
悩まし、今ここに眠る人のことが、頭から離れないのです。
私だってこの先どうなってしまうのか、誰にも分からないはず
です」

クエンが話に割り込みました。

「姉さんが言っていることは、全く意味をなしません。亡く
なった人に向けたはずの言葉を、自分に当てはめてしまっ
ているのです。聞くに堪えません。ここは墓からの空気が重
いでしょう。もう日は沈もうとしているし、家路も長い」

キョウは答えました。

「一芸に秀でた人が、才能の花を咲かせている最中に急逝し
た場合、身は朽ちても、才能を支えた魂は生き続けるのでは
ないでしょうか。そうであれば、このように感じる私の魂と、
生き続けている彼女の魂とは、触れ合いやすいのではないで
しょうか。待ちましよう。きっと彼女の魂が証してくれます」

話が終わるやいなや、強烈な突風が舞って、墓地に立てら

れた旗¹⁹を激しく打ち、木々を揺さぶり、葉を引きちぎりま
した。風には仄かな香りが感じられました。思わず互いにき
つく抱き合った三人が、風の去った方を見ると、何者かの歩
いた足跡が、くっきりと苔に残されていました。

二人の顔に浮かんだ驚愕の表情を見ながら、キョウは言
いました。

「これは、私の魂が彼女の魂と触れ合ったという証に違
いありません」

あなたの魂は私の魂と出会い
あなたと私は今や永遠の姉妹
あなたがすでに黄泉の国に住み
私はまだこの世に残るとしても

霊の世界からの答を頂いたことへの感謝を表そうと、キョ
ウは、さらにいくつか言葉を付け加え、詩のひらめきを捉え
て、木の幹に古典詩をもう一編刻み込んだのでした。

¹⁹ かつて中国の墓では祭日に旗竿が立てられていた。

第3章 キム・チョンとトウイ・キョウの出会い (133行～170行)

家に帰ろうかと三人がその場に立ち止まっていると、澄んだ鈴の音が聞こえてきました。手綱を緩めた馬に乗って、一人の青年が近づいてきます。彼の乗る健やかな美しい白馬に追いつこうと駆けてくる子供たちの姿とともに、風と月明かりを受けては膨らむ鞆²⁰を肩にかけた青年の姿が浮かび上がってきました。彼の着た鮮やかな空色の服は、辺りの草の緑に溶け合っていました。

騎手が降り挨拶しようとしてこちらに近づいた時でも、ヴウン・クァンと姉たちは彼の顔立ちをほとんど見分けることができませんでした。彼の刺繍した靴先が草の生えた地面に触れると、その辺りは宝石をちりばめた木々や翡翠の枝のように輝きました²¹。ヴウン・クァンはその人が顔見知りと気がついて、挨拶をしに近づいて行きました。後ろに控えた二人の少女は、花枝の下ではにかんで顔を隠していました。

キム・チョン（金重）という名のその青年は、留針と顎紐²²を身につける知識階級の裕福な一族としてよく知られる家の出で、隣の村に住んでいました。青年の物腰や才能、容貌は人並み以上。文学のたしなみは、親譲り代々の品性²³に加えて、彼が持って生まれた知性を意味するものでした。キム・チョンと

ヴウン・クァンは同郷で、以前からの学友でもありました。

魅力的な姉妹を称える噂は彼の元にも届いていました。二人の佳人のために建立されたという銅雀台²⁴のように、堅固な造りの繡戸²⁵が山河²⁶のように立ちほだかり、少女を守っているという噂でした。

キム・チョンは密かに噂の姉妹に情熱を抱き、人知れず想いを寄せていたので、この出会いは思いもよらぬ絶好の機会でした。木の葉遊び²⁷の偶然に似て、彼は待ち望んでいた花に出会えたのです。

薔薇色の二つの人影に不躰な視線を向けることはありませんでしたが、二姉妹の魅力には、美しい春蘭と秋菊の違いがあることにすぐ気がつきました。この瞬間、この上なく美しい少女と天与の資質をもった青年は、慎みの中にも互いに恋に落ちてしまったのです。

キョウは戸惑いました。そこに留まるのは作法に適わず、かといって立ち去るのも心痛むことでした。夕暮れが彼女の心を沈ませました。騎手が馬にまたがっても、彼女は密かに見守り続けているのでした。小川を見下ろせば、流れる水はととも透き通って見え、橋の近くでは柳の枝葉が夕暮れに次第に薄れてゆきました。

²⁰ 当時、知識階級の人たちが外出する際、小物を入れる鞆を携帯した。

²¹ 漢詩から借用された古典的な誇張表現。

²² 文人家系を指す表現。留針と顎紐は、知識階級が被る帽子を固定するのに用いられた。

²³ つまり、彼らは世襲による知識階級であった。中国とベトナムでは、遺伝は先祖の墓がもたらす風水の影響に起因すると考えられている。

²⁴ 三国志に登場する宮殿で、キョウ（喬）という名の美しい二姉妹のために建立されたとされている。（和訳者注：唐詩「赤壁」杜牧作を参照）

²⁵ 刺繍で飾られた女性専用の部屋。

²⁶ 「山河」は、誇張した比喩的な表現。

²⁷ 種々の木の葉と小枝を混ぜ、その中から花形を見つけた子供の遊び。



Hai kiều e lệ nép vào dưới hoa.

後ろうしに控ひかえた二人ふたりの少女しょうじょは、花枝はなえだの下したではにかんで顔かおを隠かくしていました。

第4章 トウイ・キョウへの予言
(171行～242行)

キョウが花柄の窓掛けの部屋に戻る頃、夕陽が山の端に沈もうとしていて、日没を告げる鐘が鳴りました。妖精ハン・ガー(姮娥)²⁸の鏡とも言われる月は、網格子を透かして水面に映り、幾筋もの金色の線を延ばしていました。月光は木の葉越しに地面を照らし、東の塀の辺りでは、椿の花が穏やかに頭を垂れ、しなだれた若枝に雫を落していました。

キョウは夜の静寂に一人、先ほどの遠い昔の霊との出会いに戸惑いながら、丸い月を眺め考えていました。

「あの歌姫は本当に悲劇の人だ。実に無念な人生。才能溢れた彼女の華々しい時も、今となっては何と虚しいこと。それにしても、あの方、彼はどなたかしら。今日の出会いかから何かが始まるのだろうか。私たちが、この世でこれからもご縁があるのかなんて、誰にも分からないこと」

とりとめのない疑問が彼女の心を乱し、その渦巻くような思いが美しい詩を詠みたいと彼女を駆り立てました。月光が簾を通して斜めに差し込む中、キョウは手すりにもたれて座りながら、やがてうとうととまどろみ始めました。

ふと気がつくと、妖しく美しい若い女性が目の前に立っていました。彼女の顔は滴のように清らかで、身は雪で造られたかのようでした。金の蓮²⁹のような彼女の足はぼんやりと

²⁸ 月の妖精。

²⁹ 女性のしなやかな歩みについて語る際に用いられた中国の喩え。この賛辞は、佳人ファン・フェイ(潘妃)に初めて送られた。彼女が黄金製の蓮の花が置かれた床を歩いた時、夫である南斉の東昏侯が「あなたの一歩一歩は金の蓮の花ですね」と言った。歩みと足は同義と解される。(和訳者注：南史・齊東昏侯紀「金蓮歩」)

して、近くにあるようにも遠くにあるようにも見えました。キョウはその幻に近づき、丁寧にお迎えしました。「まあ、桃源郷³⁰からいらした方。道に迷われたのですか」すると、幻の女性は答えました。

「我が永遠の妹よ。お忘れですか。私たちはさきほど詩を通してご一緒したではありませんか。私の冷たい住まいは、西の塀の向こう。眼下には小川が流れて橋が架かっていたあの辺り。私の不幸を悲しんで下さるあなたのお心が、地中に住む私にまで漂って伝わりました。

あなたの真珠のような涙、控えめな金のような言葉に心動いて、私は手長猿の断腸の定め³¹に縛られた悲運な少女の一覧にあなたの名が書かれているかどうか、主なる精霊³²に謹んでお伺いしました。するとああ、ありました。運命です。これからは、天が定めた運命に全て身をお任せなさい。人生は運命によって運ばれます。あなたは私と同じ船に乗り、同じ学舎にいるかのように、何一つ違わぬ運命にあります。

ここに、たった今主なる精霊より授かった十の詩題があります。これらの見事な詩題にあなたの即興の詩を頂きたいのです。その詩を書き留めるためには、あなたの毛筆の腕に頼らなくてはなりません」

ダム・ティエンの望みに従いこの即興を引き受けると、キョ

³⁰ 中国の伝説で、仙人の郷。

³¹ 雌の手長猿の話に由来する。その猿は赤ん坊を奪い取られてしまった時、余りにも嘆き悲しんだために、腸がずたずたに引きちぎれた。この表現は、とても不幸な女性たちを指す。(和訳者注：世説新語)

³² 疑いなく白い眉の精霊で、愛妾たちを司る主。第8章で登場する。

ウの美しい手は、十の即興の詩を一筆で書き終えました³³。
ダム・ティエンは、その即興詩を時に声高く、時に声低く静かに読み上げて賞賛しました。

これこそは
悲しみの言葉と
魂を編み込んだ
比類なき金欄の刺繍

これより優れたものはない
断腸の定めに縛られた
少女たちが書き残した
多くの詩の中にも

訪問者はすでに花のある露台の方へと踵を返していましたが、キョウはまだ何が起こったのか十分な自信がもてず、振り返らずにじっとしていました。一陣の風が簾を打つ音でキョウは目覚め、今まで夢の中にいたことにやっと気がつきました。辺りにはもう誰も見当たらず、微かな残り香だけがまだ漂っているようでした。

夜の静寂に一人、キョウは物思いに沈みました。夢の中で宣言された悲運を思い返し、これからの自分の将来の長い道

³³ 与えられた題に従いキョウが書いた十の即興詩は、清・青心才人編述「金雲翹伝」の中に見られる。詩題は、一「過ぎたる才への後悔」、二「廢嫡者への憐れみ」、三「別れの悲しみ」、四「懐かしき人の思い出」、五「佳人の運命」、六「過ぎ去りし青春」、七「庭園での幸福な日々」、八「不幸な境遇」、九「悲しい波乱」、十「いない人の記憶」で、主人公の悲しい運命を示唆する符号。(和訳者注：十の即興詩は巻末 p241 参照)

のりに思いを馳せると、彼女は怯えました。
「私は本当に、流れに漂う花びらか浮き草のような一生を送るのだろうか。たとえそれが何であろうと身を任せてみよう。それが私の運命であり、宿命だというのならば」
様々な考えが繰り返す波のように押し寄せては彼女を責め立て、やがて彼女の物思いはすすり泣きに変わりました。憂いを帯びたすすり泣きは、遠く離れているはずの鳳凰の間³⁴にも届き、この家の夕菅³⁵のような優しい母親を眠りから覚ましました。

「こんな夜遅くに眠りもせず、小さな桃の花のようなあなたが、雨に濡れたように泣いているのは、どうしてでしょう」
母親が尋ねると、キョウは答えました。

「あなたの娘はまだ若く愚かなのです。あなたのお陰でこの世に生を受け、ここまで育てて頂きましたのに、この二つのご恩に対してまだ何一つとしてお返しできてはいません。日中、ダム・ティエンのお墓に行ってきました。すると先ほど少しまどろんだ時、彼女が夢の中に現れて、私のことを手長猿の断腸の定めに縛られた悲運な少女と言いました。この言葉はどんな運命を意味するのですか。お母様、見て下さい。これは彼女が私に下さった詩題です。そしてこれは私が夢の中で書いた詩です。この夢は何を予言するのでしょうか。私は容易に理解できます。あなたの娘の運命は、永久に絶望的なのに違いありません」

母親は娘を諭しました。

³⁴ 主人夫妻の部屋。

³⁵ 夕菅(デイリリー)は、悲しみを忘れさせることができると考えられている植物。ここでは母親を指す表現。

「この夢は何を予言するかですって。いいですか、何も予言などしません。あなたは全く理由もなく、一人で悲しみ思い悩んでいるのよ。ただ思い込んだだけです」

キョウは、耳元で囁く母親の説得と励ましに、その場では従いましたが、母親が自室に戻るとまた、あの夢のことを考え始め、愛する人と離別した女性が悲しみに涙を流すというシアン河（湘江）³⁶の水の流れのように、胸の中では悲しみの涙を流し続けました。

窓の向こうからは、朝の鶯のさえずりが聞こえました。塀の辺りでは、柳が風にたなびいてその枝先を隣家にまで届かせ、その西側では傾いた陰が縁側に止まっているように見えました。一人っきりの思いが、少女の心を揺らしました。

第5章 キム・チョンとトウイ・キョウの秘密の約束 (243行～524行)

思いがけない偶然から、一組の男女が巡り会いました。彼らの心に突然絡まった糸を、誰が解きほぐせましょう。

書籍で溢れた部屋に戻ったキム・チョンは、トウイ・キョウの記憶が頭から離れません。考えれば考えるほど憂鬱になりました。一日は三秋のように長く感じられ、恋しい人と会えないまま無駄に過ぎていく時の長さを思うと、震えおののかずにはいられないからです。

ツィン（秦）の雲³⁷は深窓³⁸を覆い隠していますが、紅の頬を持つ少女の姿はいつも彼の夢に現れました。月は沈み、燭の油は燃え尽きようとしても、彼の瞳は夢の少女の面影を映し、彼の心は少女の心を求めて焦がれました。それにしても何と冷たいことでしょう。望み叶わぬままに費える時の速さは、書斎の空気をまるで銅のように凍えさせ、兔毛の筆先を堅め、鳳凰があしらわれた胡琴の弦を緩ませました³⁹。

絹の暖簾は風に揺れ、焚かれた香は懐かしい香りを漂わせましたが、愛する人がいなくては茶も香りを醸しません。

「会えない今、彼女の傾国の美にこれほどまで私の心が悩まされるのは、私たちの縁が三生に渡り結ばれたものだからではないだろうか」

³⁶ 湖南省の河川で洞庭湖に注ぐ。皇帝トゥアン（舜）の崩御に際し、二人の妃ガー・ホアン（娥皇）とニュー・アイン（女英）が、シアン河（湘江）のほとりて泣いて悲しんだと伝えられる。それ以来、この河の名は、女性の涙、主に愛する人と残酷にも別れざるを得なかった女性の涙を指す。（和訳者注：皇帝トゥアンは伝説時代の五帝の一人である帝舜有虞氏のこと）

³⁷ 陝西省のツィン（秦）の山嶺にかかる雲は、漢詩の中でしばしば喩えとして用いられる。

³⁸ キョウの家の奥まった窓を指す。「深窓」、「薔薇色の窓掛けで飾られた窓」、「桃色の窓」という表現は、しばしば婦人室、広義では乙女を指す。

³⁹ 胡琴の駒には雌の鳳凰がよく彫り込まれていた。「鳳凰の駒」という表現は、漢詩の言い回しとして定型表現である。

キム・チョンは、二人が出会ったその時の情景、愛する人の印象、素晴らしかった出会いの場所をとりとめもなく思い描いては、抑えきれず出会った場所へと出かけて行きました。しかし、その場所に着いてみても、露に濡れた緑の草原しか目にすることはできませんでした。夕方の柔らかな風が憂鬱な気持ちを煽り、葦は若者と戯れるように前に後ろにと揺れていました。

恋い慕う思いは、僅かな記憶を大きな愛情に育みました。キム・チョンは心を決めて、キョウという名の仙女が住むという伝説のラム（藍）橋⁴⁰へと歩を進めました。けれど、キョウが住む家は、閉ざされた門と高い塀でもって、その家をとても陰鬱で厳格なものに見せていました。

そこには、愛の詩を記した赤い木の葉を送り届けてくれるはずの小川⁴¹は流れていませんでした。美しい女神からの謁見の申し出を伝えるために青い鳥が通るはずのほんの小さ

⁴⁰ 唐の時代のこと、ある日ブイ・ハン（裴航）という名の若者がヴァン・キョウ（雲翹）という名の美しい娘に出会った。彼女から手渡された一編の詩の中に、「ラム（藍）橋がこの仙女の住まい」というくだりが読みとれた。暫くして彼はその名を冠した橋を渡った。彼が茶屋で休もうとした時、あの美しい詩人がお茶売り娘に扮しているのを見つけるとも驚いた。彼は彼女に結婚を申し込んだ。娘の父親は条件を言い渡した。その父親は翡翠の乳鉢を持っているが、乳棒がなかった。この足りない付属品を調達できた人に娘を嫁がせることとした。暫くして、ブイ・ハンは仙人の集団に出会った。仙人は求められている翡翠の乳棒を彼に与えた。そのお陰で、彼はついに仙女であったヴァン・キョウと結婚できた。伝説によると、それから彼は美しい妻とともに仙人として生き続けた。

⁴¹ 唐の時代のこと、ある日ヴァー・フー（于祐）という名の男が、宮城の堀の流れに漂う赤い木の葉を見つけた。それを拾い上げると、後宮の女性の一人が詠んだ詩が書かれているのに気がついた。彼はすぐに別の詩を詠み、同じ木の葉に書き綴って、その木の葉の流れに戻した。木の葉は漂いながら宮城の中に戻り、偶然にも詩の作者ハン・ティ（韓氏）に届いた。後にハン・ティは、他の3,000名の女性とともに後宮仕えを解かれた。彼女はヴァー・フーと巡り会い、堀を通した文通相手と気づいた彼の妻になった。

な入口⁴²さえも見つかりません。

柳は糸のような枝を暖簾のようにだらりと垂らし、梢の鶯はまるでからかうかのようにさえずっていました。扉は全て閉じて錠を下ろされ、入口の辺りには花が植え込まれていました。愛する少女はどこにいますか。

彼は物思いに沈んで長いこと佇んでいました。それから家の周りを彷徨い歩き始めると、やがてその家の裏手で別の家に行き当たりました。それはウーユエ（呉越）⁴³出身の貿易商の持ち家でしたが、家主は遠く旅に出ていて空き家にしていました。キム・チョンは自分のことを遠方から来た学生であると称して家を借り、胡琴を入れた箱と僅かな書籍だけを携えて、そこに移り住みました。彼はその家の植木と庭石が気に入りました。軒先には、「ラム・トゥイ（覽翠）」⁴⁴と金文字に塗られた扁額が飾られていました。キム・チョンは、そんな予言めいた言葉をこの場で見つけて嬉しくなりました。

「これは、私たちに三生に渡り結びつけている運命の証に違いない⁴⁵」

キム・チョンは障子窓を開け放ち、そこから正面の家を密かに垣間見て毎日を過ごしました。しかし、銅色の扉の鍵に手が掛けられることはありませんでした。家の外にも中にも、

⁴² 前漢の時代のこと、ある日ヴー（武）帝が庭園に散歩に出た時、青い鳥のつがいがすぐ前の木に止まると伝えられる。その時皇帝のそばに控えていた有名な詩人ドン・フン・ソック（東方朔）は、これらの鳥は女神タイ・ヴン・マウ（西王母）の使いであると説明した。暫くして、この伝説の美しい女神が、実は彼に謁見を求めに来たのだと知らされた。

⁴³ 浙江省北部の一带。

⁴⁴ ここでラム・トゥイ（覽翠）は「翡翠（かわせみ）の觀賞」を意味するが、「トゥイ・キョウの觀賞」、つまりキム・チョンの恋愛の良き前触れとも取れる。

⁴⁵ 仏教徒の信仰では、二つの生き物が互いに結ばれるという定め、あるいは契約による義務は、連続する三度の輪廻分だけ有効であるとされる。

彼女の薔薇色の影さえ見かけることはありませんでした。

彼がこの風変わりな屋根の下に移ってから、もう一月になろうとしていました。時は流れ、ついにその日がやってきました。麗らかな昼下がり、塀の向こうの桃の木の辺りに、長い衣装をまとって行きつ戻りつする人影が現れました。

キム・チョンは胡琴を横たえ衣装を身にまとうと、急いで表に出ました。しかし、そこにはまだ甘い香りが漂っていましたが、人気なく冷ややかで、辺りには誰も見当たりませんでした。苔むした塀沿いに歩むと、金のかんざしが桃の木の枝に掛かっているのに気がつきました。キムは腕を伸ばしてそれを取り自室に持ち帰りました。

「これは彼女のものに違いない。そう、あの人。この宝石。もし私たちが三生の運命によって結ばれていなかったら、これが私の手に入ることはなかっただろう」

キムは寢床に入るのも忘れ、手の中にしっかりと収まったかんざしを惚れぼれと眺めながら、夜通し起きていました。その宝石には淡い白檀の香りが染み込んでいました。

翌日朝靄が消えた頃、彼は、探しものをしているのか、物思わしげに壁沿いをゆっくりと行きつ戻りつする女性の影を目にしました。

若者は佳人の心を探ろうと壁越しに声を掛けました。

「私はどこかそこから辺りで、かんざしを見つけました。真珠貝が消えてしまったと聞くホポウ（合浦）⁴⁶の海へ返し

⁴⁶ ホポウ（合浦）は広東省の町。この町ではかつて真珠貝が豊富だったが、ある日、全ての真珠貝が手品のように消えてしまった。人々はこの不幸な出来事を残忍な地方長官のせいにした。朝廷は徳が高く賢明な政策で知られるマイン・クウン（孟嘗）を新たな地方長官として派遣した。すると間もなく、神様が認めたことを示すかのように真珠貝は再び豊富になった。（和訳者注：合浦珠還）

たかったのですが、そこがどこにあるのか分からず、今まで返すことができませんでした」

反対側から女性の声が上がりました。

「ご親切に落し物をお返し下さり、ありがとうございます。そのかんざしは大したものではありませんが、財に重きを置かぬお心こそ貴いものとお見受け致します」

キムは答えました。

「私たちは同じ村の住人なので何度もお会いしています。私はあなたの隣人の一人で、よそ者ではありません。あなたの仄かな香りのおかげで、今日の日が私にとって幸せな日となりました。何日もの間、あなたにお目にかかることができずに苦しんできましたが、長らく待ち望んでいたこの日がついにやってきました。ああ。ほんの暫くの間そこにいて下さい。そして、どうか私の話を聞いて下さい」

彼は急いで部屋に戻り、思いを込めた贈り物として金腕輪一組を選び、キョウが落したかんざしには絹の袱紗を添えて持ち出しました。そして、雲に届くような高い梯子⁴⁷で、そっと塀を越えました。そこにいたのは、はにかみ屋で控えめで慎ましい人、まさにあの時彼が出会った少女でした。彼がまっすぐ見つめたので、少女は困ったようにうつむきました。

キムは話しかけました。

「この前あなたと偶然に出会ってからというもの、私はそつと希望をもって密かにあなたを想ってきましたが、長らく失望が続いていたので、今ではまるで華奢な梅の木のように身体が弱ってしまいました。今日のような幸運がきっと来る

⁴⁷ これまで見てきたように、詩の中では誇張表現の使用をためらわない。

という希望を、確信できないままに日を重ねていたせいです。雲の宮殿⁴⁸に心を囚われて、呆然としたまま丸一月を過ごしてしまいました。かつて兎がぶつかった切り株で番をした男のように⁴⁹、私も人生を賭けてここに留まる決意をしたのです。そして今ここにあなたがいます。どうか、少しでもお話をさせて頂けませんか。私の鏡よ、あなたの輝きがこのつまらぬ浮き草にまで届きますように」

キョウはためらいがちに答えました。

「私の家は、氷雪のように清らかで⁵⁰、慎ましく野菜を育てて質実に暮らす家風です。たとえ赤い木の葉⁵¹に記された愛の詩がどのようなものであれ、縁結びの薔薇色の糸⁵²がどの

⁴⁸ 放心状態の。

⁴⁹ ある日、一人の農夫が、野兎が傍らの切り株に衝突し即死したのに出くわした。彼は獲物を拾い上げ、野兎狼は切り株を見張っているだけでいいと考え、実践した。即ち、彼は野兎がまたやってきて切り株に頭をぶつけるのを期待し、木の下に何日も留まったのである。(和訳者注：韓非子「守株」)

⁵⁰ 清貧を指す慣用表現。

⁵¹ 脚注 41 参照。

⁵² かつてオウイ・コウ(韋固)という名の男が、夢に出てきた理想の美しい娘を捜しに、至る所へ出かけた。ある寺に着いた夜、手に赤い糸(薔薇色の糸)の詰まった袋を握りしめ、月明かりのもと庭で読書をしている老人に出会った。老人が読んでいた本は予め定められた婚姻の記録で、赤い糸は結婚する運命にある二人を結びつけるために用いられた。高貴な生まれのオウイ・コウは、自分が結婚する女性が誰なのか知りたくなった。老人は、近くで野菜売りをしている家の娘で、ぼろをまとった六才の少女の名を告げた。彼はこれに激怒して、その少女を殺そうと決めた。幸運にも母親が娘を連れて逃げ去り娘を救った。しかしその少女は、オウイ・コウの剣先をこめかみに受けた。オウイ・コウは、無益な人捜しの旅を十年以上続けた後、もう誰も結婚するまいと心に誓い家に戻った。しかし、誓いは守るより立てる方が容易である。ある日彼の叔母は、彼女が保護し養育してきた大人しい少女を彼に紹介した。少女は彼に気に入られ、数週間後には彼の妻となった。ある日彼は、妻のこめかみに傷があるのを認めた。妻はその傷を、小さく丸い絆創膏で隠していたのだ。彼は、妻に傷の原因を説明するよう求めた。妻は幼少時に襲われたこと、母親が彼女の命を心配して国を捨て、オウイ・コウの叔母の家に彼女を連れてきたことを話した。妻は、彼と出会う日までここで保護され養育されたのである。この話は、結婚運命説が広く信じられていることを示している。月明かりのもと本を読んでいた老人は「月下老人」と呼ばれており、読んでいた本は婚姻記録、袋の中の赤い糸は縁結びの薔薇色の糸である。

ようなものであれ、それらは全て私の両親が決めることです。か弱い柳への憐れみと命短い花への慈しみに満ち溢れた、親切なお心根の方とお見受け致しますが、まだ子供の私にどのようなお答えができればいいでしょう」

キムは言いました。

「今日は風が吹き、明日になれば雨が降るかも知れません。若い時の幸せな出会いは、何度も訪れるというものではありません。もしあなたが、愛で取り乱した私の心を軽蔑するなら、私のこの恋の悲しみとは、一体何のためのものなのでしょう。どうか、私の運命を決める約束の言葉を下さい。そうしたら、私たちの婚約のために媒酌人を手配しましょう。もし天が私の誠実な愛に反対ならば、ええ、私の青春は孤独のうちに消えてゆくでしょう。あなたの優しい心は、もしあなたが私の愛に無関心のままであれば、あなたを求める私がとても苦しみ続けることになる、そう教えてはいませんか」

彼女は、彼の言葉に慰められるかのように静かに聴き入りました。薄れゆく秋の日を氣遣う春の輝きのように、彼女の目には彼を心配する気持ちが現れました。

キョウは言いました。

「この出会い全てのことが私には初めてのことです。でもあなたは、私が不安な心を抑えることができるようにと、ご配慮をして下さいました。私自身があなたの悩みの元なのですから、私はあなたの愛の言葉を受け入れ、いつまでも金と石に刻み込むことに致します」

キム・チョンはその言葉に救われたように感じ、金のかんざしと絹の袱紗を取り出して彼女に返し、贈り物として金の腕輪一組を彼女に手渡ししながら言いました。

「今日この日から、私の人生はあなたの人生と結ばれます。これらのささやかな品が、私たちが交わし合った言葉の証となりますように」

その時キョウは、手にしていた刺繍入りの絹の袱紗と向日葵が描かれた扇子を、交換に差し出しました。このようにして彼らの誓いは立てられ、二人の心は膠と漆で密着されたように固く結ばれました。

ふと、家の反対側からする人声が彼らの耳に届き、落ち葉と落花のように離れて、彼は書斎に、彼女は化粧部屋へと急いで戻りました。

それ以来、彼らの愛は純金に触れた試金石のように深まり、彼らの心はますます憂鬱になるのです。恋人が飲み合うというシアン河（湘江）⁵³の水はもう干上がりかけているのに、未だに一人は上流の岸で相手を待ち続け、もう一人は下流の岸で相手を想い続ける恋人たちのように、隔てられた二人は互いに恋い焦がれていました。見通しを遮る雪と霧のように、彼らは高い塀に隔てられ、愛の言葉を交わすことさえできませんでした。

風の夜と月明かりの夜が交互に繰り返されました。薔薇の花は散り始め、草やぶは緑濃くなってゆきました。春がもう終わりを告げようとする頃、キョウの母の実家で祖父の誕生日を祝うことになりました。キョウの妹と弟、そして両親は、うきうきとして祝いの衣装を身にまとい、祝いの品を携えて、祖父の家へと表敬に出かけました。

⁵³ 漢詩の中に、一人の娘がその恋人と離れ離れになった時の嘆きの言葉がある。「あなたはシアン河（湘江）の上流にいて私は下流にいますが、私たちは二人ともその河の水を飲むのです」

蘭の花が飾られた家にはキョウただ一人。キョウはキムと会う絶好の機会と考えました。彼女は、テーブルの上にこの季節に相応しい品々を広げて選び出すと、足早に塀のそばに向かいました。彼女が柔らかな金の声で花越しに囁くと、すでにキムは塀のそばの花枝の下に立っていました。

「あなたの冷淡さを非難せずにはられません。おお、愛しい人よ。あなたは香に火を灯したのに、どうしてすぐにそれを消すことができるのでしょうか。あなたに会えない悲しみを忘れるため、いつもあなたを夢見て過ごしました。今では私の髪の毛は、雪と露で染めたように灰色になりかけています」

キムが囁くと、キョウは答えました。

「風と雨に隔てられて、心に慕う方にとっても残酷なことをしてしまいました。どうかお許し下さい。家の者が皆外出しているので、今日は少しだけ自由が許されました。私の心はいつもここにありますが、優しいあなたのお気持ちにお礼を申し上げたくて、ここに参りました」

彼女は石庭のへりを歩き回り、塀の隅に最近になって柵を設け閉ざした通路があるのに気がつきました。妖精が棲むという理想郷ティエンタイ（天台）⁵⁴に至る通路なのかどうか確かめて不安の雲を散らそうと、キョウは袖をたくし上げ入口にある桃色の洞窟⁵⁵の鍵を開けました。

互いに見つめ合うほどに共に幸せそうな雰囲気包まれて、キョウは彼に一万回も良いことが起こるようにと願いを唱え、キムは彼女に寒暖をいかに耐え忍んだのか⁵⁶を尋ねまし

⁵⁴ ベトナムの伝説では、ティエンタイ（天台）は妖精の棲む洞窟にある理想郷を意味する。

⁵⁵ 仙人の住処。

⁵⁶ かつて中国で用いられた儀礼的な表敬・挨拶の表現。

た。二人は風と月明かりのように控えめに甘い言葉を囁き合い、彼らの厳肅な誓いの証人となるよう山河に呼びかけながら、並んで書斎に入って行きました。

机には毛筆入れと銅製の文箱が置かれ、壁には松の水彩画が架かっていました。とても見事に描かれていたので、風や霧に本当に曝されているかのように見えました。キョウは、実物と見紛うその巧みな筆使いに感心しながら部屋に入りました。「これはちょうど描き終えたばかりの素描です。どうか、これに何か言葉を書き添えてくれませんか」

キムは頼みに、キョウは華奢な手で毛筆を絵の上部に置き、降り落ちる雨に向かって突き進む風の如く筆を走らせ、四行連句を書き添えました。

キムは褒め称えました。

「素晴らしい。あなたは飛び散る翡翠と真珠の粒のような、本当にほとぼしる才能を持っていますね。有名なパン（班）や若い女流詩人ツイエ（謝）でさえ、これほど上手に書くことはできないでしょう。このような才能を授かったのは、きっと前世の善行が類い希なものであったからに違いありません。けれど、もしその善行からの報いでなかったとしたら、それに代わるに相応しいほど大きな、何か別の力が働いたのでしょうか⁵⁷」

キョウは言いました。

「凛々しいあなたのお顔を密かに見た時、あなたは宮廷で翡翠をまとう高官になる方か、そうでないのなら、少なくとも

も金門に属する学者になる方に違いないと思いました⁵⁸。けれど、蜻蛉の羽ほどに儂い私の運命に思い至ると、果たして神様が私たちの結婚を祝福して下さるのかどうかと心配になります。私がまだ子供の頃、ある人相易者に占ってもらい予言された言葉を忘れられません。「幼いあなたの内側にまだ隠されている才能と美が、いつか外に向けて光放つ年頃になると、運命は残酷にあなたを襲い、あなたの才能の輝きと美貌を千秋にわたって厳しく咎め続けるでしょう」と。それだから、あなたとお会いすると、つい自分の受けた予言のことを考えるのです。あなたは高貴な方。そして私は不吉な予言を受けた娘です。私たちが一緒に暮らすのは、本当に賢明なことなのでしょうか」

キムは言いました。

「私たちの出会いが運命によるものでないと誰に分かるでしょう。これまでに人間の堅い決意は、しばしば運命をも乗り越えてきました。私たちの間に何らかの不幸な出来事が起こった場合、私は金と石に刻み込んだ誓いを守るために、自分の一生を捧げましょう」

二人は胸の奥にある幾千もの秘密を明かし合いました。彼らの心は生き生きと軽くなったようでした。春の酒盃で二人は甘い酩酊に沈み始めました。しかし、幸せな一日も二人にとっては短過ぎました。西の空では、金色に鳥を輝かせていた太陽⁵⁹がすでに山並みの陰にその鏡を隠していました。

キョウは、家族の留守中に長く家を空けるのは良くないと

⁵⁷ 「もしあなたの才能が、あなたの前世の善行からの報いでなかったならば、偶然だけではそんなに素晴らしい才能を授かることはできなかったであろう」

⁵⁸ 「もしあなたが、宮廷で翡翠をまとうぐらいの高官となれる良い位置にある紳士でなかったならば、少なくとも著名な学者であるに違いない」

⁵⁹ 脚注 17 参照。

かんが かれ もと はな いそ いえ もど
考え、彼の元を離れて急いで家に戻りました。

かのじよ うたげ ながび きぬ まどか ひ まど おく き どうじ りょうしん
彼女が絹の窓掛けを引いた窓の奥に消えると同時に、両親
から宴が長引き帰宅が遅れるという連絡が入りました。キオ
ウは玄閑の簾を急いで下ろし、足早に表に出て夕闇に沈んだ
庭を横切りました。

にわ げつこう こえだ かすめ じめん いんえい うつ いえ なか
庭では月光が小枝をかすめて地面に陰影を映し、家の中
は燭の灯りが優しく風に揺れ、引き下ろされた蚊帳を通して
煌めいていました。蚊帳のそばでは、キムが机にもたれてう
たた寝にまどろんでいました。

きん はす はな のような かるやかな あしおとに、キムは えんじゆ こかげ み
金の蓮の花のような軽やかな足音に、キムは 槐の木陰で見
るような儂い夢⁶⁰の眠りから覚めました。月明かりに照らさ
れて、梨の白い花のような恋人が近づいてくるところでした。
朦朧とした意識は、未だキア（峽）山の尖峰、チェン（神）山
の頂をふらついていて⁶¹、今も春の夜の夢の中にいるのだろ
うかと、キムは思いました。

キオウは話しかけました。

「私は愛のために人気のない夜道を通り、愛する人がいるこ
の場所に戻らずにはいられませんでした。私たちは今ここに
いて向かい合っています。これが夢ではないのかどうか、誰が
知り得ましょう」

キムは取り急ぎ彼女を丁寧に招き入れ、蓮型の燭に油を注
ぎ足し、桃型の香炉に香をくべました。それから二人は、誓い

⁶⁰ 唐の時代に、チェン・ユ・フェン（淳于棼）という名の若者が見た夢からの喩え。
（和訳者注：唐代の伝奇「南柯太守伝」李公佐撰。南柯の夢、槐安の夢。淳于棼
が酒に酔って庭の槐の木の下で昼寝していた時、槐安国に遊んで王女と結婚し、
南柯郡の太守となって栄えた夢を見た。目が覚めてみると、槐の根元に蟻の穴が
あって、蟻の王が住んでいたという伝説に基づく）

⁶¹ これらの二つの山は、仙人の住処と考えられていた。

ことば いっしょ かみ か ふたり きん ふところがたな じぶん
の詞を一緒に紙に書きました。二人は金の懐刀で自分たち
の髪を一房ずつ切って混ぜ合わせ、さらに真っ二つに切りま
した。月は空高く明るく輝いていました。二人は同じ誓いを
いくどか かわし、たがの 胸の奥にある 言い尽くせない 気持ちの
数々を、絹糸を吐き出すように少しずつ何度も何度も繰り返
し、語り合いました。このようにして、「結婚」という言葉は
二人の生涯に渡り、骨まで刻み込まれたのでした。

ふたり こがねいろ さかすき そそ かがわ びしゅ いっしょ の飲
み 二人は、黄金色の盃に注がれた香しい美酒を一緒に飲
みました。彼らの飾り帯からは混ぜ合わさった香りが匂い立ち、
仕切幕には夢心地の二人の顔が影となって映し出されました。

キムは言いました。

「風の爽やかさ、月の清かさが、これまで満たされなかった胸
の奥にある、あらゆる願いを呼び起こすのです。仙女が住む
というラム（藍）橋の上では、まだ父親が結婚を許したしる
しの翡翠の乳棒も使われていないので⁶²、物ごとを早く進め
過ぎて、正しい振る舞いができるかどうか心配です」

キオウは答えました。

「私たちは、愛の詩を記した赤い木の葉と縁結びの薔薇色の
糸によって契りました⁶³。私たちが口にした言葉は、私たち
を永遠に結びつけておくのに十分なものです。ですから、軽は
ずみな愛の儀式などは横に置いておきましょう。そうすれば、
私たちの振る舞いで後悔することなど何もありません」

キムは言いました。

「あなたが琴の演奏に秀でていることは、私にまで聞こえて
います。弾き手が思い描く高山と流水を言い当てた聴き手

⁶² 脚注 40 参照。

⁶³ 「私たちは今婚約しました」

ヨン・ツー・キー（鍾子期）⁶⁴のように、私も長い間あなたの琴の音色を聴き分けたいと思っていました」

「まあ、私の才能なんてつまらないものです。どうして秀でているなどとおっしゃるのでしょうか。でも、それがあなたのお望みなら、それに従いましょう」

キョウは謙遜して答えてから、壁に掛けてある胴の丸い月琴に目をやりました。キムはそれを取り、恭しくキョウに差し出しました。

「私は、この至らない未熟な芸を、自分の楽しみのためだけに習いました。それなのに、そのようなものに、なぜあなたは関心をお持ちになるのですか」

そう言いながらキョウは、クン・トゥウン（宮商）⁶⁵の音階に従って長調と短調の和音を、そして四本の弦を交互に繰り返して弾きながら、「ハン（漢）とチョウ（楚）の戦場」⁶⁶の演奏に入っていました。

何という調べでしょう。聴き入る者には、鉄と金のぶつかり合う戦場の音が、すぐそこで響いているように思える曲でした。

⁶⁴ 春秋時代の有名な聴き手。彼は、バー・ニャ（伯牙）という名の有名な演奏家が演じる音楽の意味をととても良く理解していたので、彼はバー・ニャが胡琴を演奏している時、この演奏家が何を考えているかを読み取ることができた。

⁶⁵ 脚注7参照。

⁶⁶ この作品及びこの本の中で以後述べられる諸作品は、中国の古典音楽である。（和訳者注：日本に伝わる曲名は以下の通りと見られる。一曲目「十面埋伏」（紀元前202年、楚の項羽と漢の高祖・劉邦の最終決戦の様子を描いた曲。結果、項羽は自決し劉邦が勝利した）、二曲目「鳳求凰」（前漢時代の文人・司馬相如が卓文君に求婚するときに奏でたといわれる曲。富豪の令嬢だった卓文君は居酒屋の女将に身を落としてまで恋に殉じた）、三曲目「広陵散琴曲」（戦国時代、刀鍛冶だった父親を殺害された聶政が韓王を仇討ちした逸話を描いた曲。キ・カン（稽康）は三国時代の魏の人で「竹林の七賢」の一人。死罪となり刑場でこの曲を弾いた）、四曲目「昭君出塞」あるいは「昭君怨」（前漢の元帝の宮女で、和平のため異国・匈奴の呼韓邪単于に嫁ぐこととなった王昭君の悲話を描いた曲）

その次は、セ・マ（司馬）が作曲した「鳳凰の求愛」です。この演奏を聴く者は、この曲をどう感じたでしょう。憎しみと悲しみの曲と思ったに違いありません。

続いては、キ・カン（稽康）の「皇帝の陵墓の誉れ」です。旋律に乗って水は流れ、雲が動いていく、そんな情景が部屋一杯に浮かび上がってきます。

最後に、「国境門のチャオ・クワン（昭君）」の調べには、皇帝への想いと、家族との永久の別れの悲しみが溢れていて、聴く人は誰でも、思わず同情に心を誘われずには済まされませんでした。

飛び去る鶴の澄んだ鳴き声、滝壺に落ちる水の寄る辺ないざわめき、様々な音が混ざり合い響き合い、旋律は優しいそよ風のようなアンダンテから始まり、打ちつける雨音のようなアレグロに移りました。

傍らでは燭の灯りも揺らめいて、キョウの胡琴の演奏は聴く人を深い悲しみの世界へと沈めるのでした。

キムは肘掛けにもたれながらうなだれて、多くの疑問を抱えたかのように眉をひそめ、表情を曇らせていました。それでも、キムは褒め称えました。

「何という才能でしょう。本当に素晴らしい。でも、あなたの演奏を聴いて伝わってくるのは、真の苦しみと悲しみだけ。どうしてそれほど悲しみに沈み、弾く人の心を押しつぶし、聴く人の心を悩ませる、そんな曲をわざわざ選ばなくてはいけないのですか」



Tiếng khoan như gió thoảng ngoài,

旋律は優しいそよ風のようなアンダンテから始まり、...

キョウは答えました。

「私が弾くのは、いつもこういった曲です。音色が明るいか、暗いかは神様が決めることで、それを私が勝手に変えることはできないのではないのでしょうか。でも、あなたの貴重なご忠告に耳を傾け、曲の選び方に注意することに致しましょう。そうすれば恐らく、なぜか陰気になりやすい演奏の欠点も、少しずつ無くすことができるかも知れません」

香の花のような少女は、その頬の紅色を深めました。二人が見つめ合うほどに、愛は酔いを増していきました。情愛の高ぶりが少し和らいだ時、キョウは、恋人が慈しみの発露の中でやや馴れなれしい振る舞いをしかけたのに気がつき、窘めるように言いました。

「二人の願いを諦めないで。どうか私から離れて下さい。そして私の話を聞いて下さい。儂い桃の花なんて、僅かな値打ちしかありません。花をついばむ青い鳥から薔薇の園を守るため、敢えて柵を高くする人がいるのでしょうか⁶⁷。けれども、私が貞淑な妻として、麻の裾着をはき荊のかんざし⁶⁸を挿す上流階級に属することになるのなら、とりわけ純潔を守らねばなりません。恋人たちが集うポウ河（濮水）⁶⁹の河畔にある桑の木の下で男と会っているのを見られた女を、誰が求めるでしょう。私たちは仮初めの恋人として生きることを定められたのですか。たった一日のために、私は一生を犠牲にし

⁶⁷ キョウは、自分を鳥が花をついばむために自由に入出できる庭に喩えている。
⁶⁸ 中国では、最上流階級の女性は、義理の両親が亡くなった時には麻の裾着（ズボン）と荊のかんざしを挿すことを許された。
⁶⁹ 山東省の河は漢詩の中でしばしば引用される。この河畔は、若い恋人たちが会う場所として利用された。

なければならぬのですか。これまで行きずりで結ばれた男女のうち、結局は結婚に至らなかったツオイ（崔）とチャン（張）よりも仲の良かった人たちはいましたか⁷⁰。彼らの不道德な愛は、神聖な誓いを踏みにじったのです。親切が過ぎて、燕は鶯を疲れさせたのです。彼らは比翼連理の喩えのように、愛し合う鳥のつがいが、鶯のように絡み合う二本の枝のように落ち合っていた時、彼らの心は本当はもううんざりし始めていたのです。彼らは、誓いの香を寺の西側で冷まし、幸せな結婚で締めくくられるはずだった美しい恋愛物語をやましい密通話に変えてしまったのです。ああ。私は、そのようなものを見過ごすくらいなら、敢えて機織りの梭⁷¹をあなたに投げつけたいと思います。それでも間違いを起こす人がいるのでしょうか。どうしてあなたは柳の花を愛するのに、その同意もなしに急ぐのですか。生きている限りあなたのものである私を、あなたはいつか必ず愛せる時が来るのに」

この貞淑で理に適った言葉を聞いて、キムは少女に対する尊敬と思いやりの気持ちをより深く感じたのでした。

⁷⁰ 佳人ツオイ（崔）は、シー・シュアン（普救寺の別棟である西廂）で恋人のチャン（張）に身を任せた。不道德な関係から始まった恋だったため、結局娘はチャンに捨てられた。（和訳者注：唐代の伝奇「鶯鶯伝」元稹撰。崔は崔夫人の娘で幼名は鶯鶯。張は張生。鶯鶯伝を素材とした「西廂記」王実甫作もある）
⁷¹ 機織り娘に余りにも迫り過ぎて、その娘から機織りの梭（ひ）を顔に投げつけられ歯を折られたシー・クエン（謝琨）の逸話からの喩え。

第6章 キムの旅立ち (525行～568行)

銀色の月光を浴びた屋根の影が薄れ始める頃、不意に、引き戸の向こうから人の呼ぶ声が上がりました。キョウは急いで自分の部屋に戻り、キムは花の庭へと進み出ました。

キムが木戸の門を引き抜くと、若い使用人が現れて、叔父の死を告げる手紙を手渡しました。

その手紙によると、死者が納められた棺は、家路についてはあるものの、まだ遙か彼方にある山河のさらに向こうのリャオヤン（遼陽）⁷²にあるとのことでした。キムは、急いで登って葬儀に参列するよう、父親から呼び出されたのでした。

この訃報に、キムはどれほど茫然となったことでしょう。彼はこの不幸な出来事を知らせるため、恋人の部屋にそっと忍び入りました。彼は、何が起こったのか、彼の一家がどのように喪に服すのか、彼がいかに遠くに旅立たねばならないのかを彼女に手短かに話しました。

キムは嘆きました。
「思いもよらぬ出来事が起こり、互いをもっと知るための時間がなくなってしまいました。私たちは何と悲惨なのでしょう。私たちの誓いに立ち会った月はまだそこにあるのに、愛の言葉を交わす僅かな時間さえもありません。会えなくなっても、私たちの心がいつまでも結ばれていることを願うばかりです。三度の冬を越す間、幾千里の空間があなたと私を隔てることでしょう。この別れの悲しみが解きほぐれるその日が

来るまでには、いかに長い別れとなるのでしょうか。ああ、私の愛する人。この空の果てでさすらう雲のかけらのように今旅立とうとする私を安心させるため、金か翡翠のように貴いあなたは、お身体をくれぐれも大切にしてください」

その言葉にキョウは取り乱してしまいました。

おお 縁結びの絹の糸のご老人⁷³よ
どうしてこの縁に反対なさるのか
結婚の喜びで心を満たす間もなく
別れの悲しみが心に溢れていく

暫くためらった後、彼女は憂いに沈んで言いました。

「真剣な誓いを交わしたのですから、時が経って髪の色が変わろうとも、私の心が揺らぐことはありません。何ヶ月も何年も待たなければならぬとしても、私の心はあなたに、あなたの行く所ならどこへでも付いて参ります。愛するあなた。あなたが風雨に曝されようとしていることを考えただけで辛くなります。私は生涯あなたに貞節を尽くすことを誓ったのですから、別の船⁷⁴で琴を弾いたりしないことをお約束します。この世に山河ある限り、あなたの旅がいかに長かろうともいつかは戻ることに、そして今日ここで会った人を憶えていてくれることを私は信じます」

二人は別れの決心がつきかねて、手を取り合っただけでもそこに立ち尽くしてしまいました。屋根の向こうでは夜が明け

⁷² 満州の町で、ムクデン（盛京）の南に位置する。（和訳者注：ムクデン（満州語で隆盛の意）は瀋陽（奉天府）の後金・清の時代の名）

⁷³ 脚注 52 参照。

⁷⁴ この表現は、一人の女性が彼女の婚約者がいない時に、別の船で別の男を喜ばせるために胡琴を弾いたことを仄めかしている。

第7章 トウイ・キオウの犠牲
(569行～910行)

ようとしていました。別れの瞬間とは、いかに困難なことでしょう。キム・チョンは、愛する人との距離が広がっていくのをためらいながらも、少しずつ離れていきました。キオウは、最後の別れの言葉を言って泣き崩れました。

キムは馬に鞍を置かせ、あわただしく旅立ちました。使用者は、肩に担いだ天秤棒に吊り下げた荷物を揺らしながら、その後を追いました。

その時から、愛し合う二人はそれぞれの道を歩み始め、それぞれの別れの悲しみを分かち合う人生となるのです。

キムは悲しげに振り返りながら、馴染みの薄いその地域の景色を眺めました。枝先から不意に郭公の鳴き声が上がりに、行く手遙か、地平線の上を飛ぶ雁の群が微かに見えました。

遠く後方に残されることになったキオウは、これから風雨に曝されることになる恋人の姿が頭から離れず、陰鬱な気分になっていました。刻一刻と過ぎるごとに、彼女の恋人への憂いはますます深くなっていきました。

キオウは西の縁側の手すりにもたれながら、ずっと立ち尽くしてしていました。頭の中のもつれた糸を解きほぐそうとすればするほど、混迷はますます深まります。奥にある部屋の隅からは、香の煙が渦を巻きながら、窓格子を通して外へと流れていきました。眼下の水路⁷⁵には、葉を落して黄ばんで見える柳の木が影を落とし、赤い花が漂っていました。

キオウは縁側から離れ、ゆっくりと気重く足を引きずりながら、化粧部屋の辺りを歩き回っていました。

やがて、彼女の家族が誕生会から戻ってきた、その時です。彼らが言葉を交わす間もなく、突然、こん棒と短剣で武装した邪悪そうな執達吏の一団が家の周りを取り囲み、屋内では悲鳴と怒号が飛び交いました。まもなく、老人とその息子は捕らえられて首がせをはめられ、不当にも鎖でつながれてしまいました。そこらじゅうから緑蠅⁷⁶のようなざわめきが起こり、心ない者たちが機織り機をひっくり返し、糸箱を壊しながら、家捜しを始めました。上等な絹も家財も、値打ちある物はことごとく持ち去られ、彼らの貪欲な懐に収まってしまいました。

何が起こったのでしょうか。一体誰の仕業なのでしょう。誰がこの突然の計略を仕掛けたのでしょうか。

⁷⁵ 著者は水路の正確な位置を述べていないが、記述から判断するに、この水路はキオウの家の西側からそんなには離れていないところを流れていたに違いない。

⁷⁶ 危険な人物を意味するのに用いられる表現。



Một dây vô tội buộc hai tâm tình.

不当にも鎖くさりでつながれてしまいました。

やりとりを通して、この災難はある絹商人がした偽りの
告発によるものであることがわかってきました。家族全員が
この事件に大変驚き取り乱しました。これは明らかに衝撃的
な冤罪であり、大地を揺るがし空を雲で覆い尽くすような
中傷でした。

一日中懇願し慈悲にすがり続けましたが、全ては無駄に終
わりました。執達吏は、犠牲者の叫びや憐れみを求める嘆願に
一切耳を貸しませんでした。

拷問人の残忍な手は、梁から下げられた縄で逆さ吊りにさ
れた老人を、容赦なく打ち据えました。その光景を目にすれ
ば、心を持たぬ石でさえわなないたことでしょう。惨めな
老人の顔には痛みと恐怖が滲み出ていました。天に訴えるべ
きなんでしょうか。しかし天は、彼らをこの冤罪から守るに
は余りに遠過ぎました。従者たちの振る舞いは驚くに当たり
ません。彼らが金目のものを手に入れようと、そのように回復
できないほどの被害をもたらすのは常のことだったのです。

キョウは苦悩に苛まれながら呟きました。

「どうすればこの大切な人の命を救えるのだろう。こんな酷
い状況では、力に屈する以外に方法はないのではないだろう
か。力に屈しなかったとしたら一体どうなってしまうのか、
あるいは他にどんな方法があるというのか。夫となる人への
誠実を約束して立てた結婚の誓いと、九つの務め⁷⁷を果たし
てくれた親への感謝では、どちらがより重いだろう。やは
り他に選択肢はない。山河を前に交わした真剣な結婚の誓い
はさておき、まずは目の前で苦しんでいる両親に対して、

⁷⁷ 両親の喜びや楽しみとなるものを敬意を込めて親の務めと呼んでいる。九つの親
の務めとは、出産、保育、愛撫、離乳、食事、教育、監督、世話及び保護。

私のためにしてくれたことへの借りを返すべきなのだろう」

キョウは心を決め、前に進み出て叫びました。

「私をあなたの召使いにお与え下さい。父の命と引き替えに
私自身を売りたいと思います」

傍らにチュン（終）という名の年老いた書記が立っていま
した。腐敗した同僚の従者たちとは異なり、彼の良識ある心
はそのような両親への孝行に深く動かされました。彼はキョ
ウに憐れみと同情の念を覚え、この家族にとってより安全な
方法は何かと密かに考えを巡らせました。

チュン氏はひとり言を言いました。

「よかろう。三百両もあれば、当局を買収するために必要な手
はずを整えることができよう」

チュン氏は、まず彼の自宅を一時的に拘置所とする措置を
執って罪人を引き取り、それからキョウに会って、二日ない
し三日のうちに事をなすように知恵を授けました。

純真なこの娘はまだ子供なのに

何と哀れなことだろう

突風のように襲いかかる不運からは

逃げようもない

家族との生き別れは、家族の誰かが死ぬことと同じくらい
痛ましいものです。けれども彼女は、自分の人生へのこの決定
に対して、少しも悔いはありませんでした。だからと言って、
キョウにとって、キムと固く誓い合った縁が、家族の縁ほど
には大切なものではなかった、という訳ではありません。

キョウは、結婚仲介人に彼女の意図を打ち明ける時、自分

自身に言い聞かせました。

「一滴ほどの値打ちしかない身だけれど、春の三月の暖かな日差しのように愛情を注いでくれた両親に、育てて頂いた草の葉のような私が恩を返そうと犠牲になるのは、仕方がないことなのだ⁷⁸」

その顛末は霧のように広がり、うわさ話の話題を独占しました。まもなく近郊の村から、よそ者の男を伴って、結婚仲介人の老婆がやってきました。老婆は、キョウの名を尋ねたがっている人がいる⁷⁹と、そのよそ者を紹介しました。

いくつかの質問の結果、その男が近在はリンチン（臨清）⁸⁰生まれのマー・ザム・シン（馬監生）という者であると説明されました。そのよそ者は、四十歳を少し越えたくらいの容貌で、顔をつるりと剃り上げて身だしなみを整えた男でした。いかがわしげなよそ者は、騒々しく使用人を従え、結婚仲介人を先頭立て、儀式ばって彼女の家に現れると、無礼にも上席を選んで座りました。

結婚仲介人はさっさとキョウの部屋に入り込み、表に出ようキョウを促しました。少女は家族に起こった突然の悲劇と彼女自身に降りかかった不運とを背負い、表に出るやいなや、落ちた花のように涙を流しました。

キョウは風雨を怖がる弱く儂い生き物のように、ためらい、おずおずと進みながら、優雅に咲く花を目にしたり、鏡に明

⁷⁸ 漢詩から借用した喩え。草の葉とは、彼女のために別の人がした善行への報いとして捧げられた若い娘の心を指す。これは、両親を指す「春の三月の陽光」との対となっている。（和訳者注：「遊子吟」孟郊作）

⁷⁹ 中国の結婚にまつわる六つの儀式のうちの一つ。結婚仲介人により進められる事前交渉の後に、結婚の意向を申し出た少女の家族と接触を持つこと。

⁸⁰ 山東省にある町。キョウの生家がある地域からは結婚仲介人が保証したほど近い訳ではない。

るく映る自分の姿を見たりする度に、恥ずかしく思いました。結婚仲介人が髪を撫で手をさすると、彼女はますます憂鬱になり、表情は悲しみに沈んだ菊のように、身は梅の木のように、か細く見えました。

彼らはキョウの美貌と才能を褒めたたえ、彼女に胡琴を弾くように、短詩を書くように、と言いつけました。従う彼女の仕草はどれも魅力に満ちていました。

よそ者は娘の質に満足して取引を始めました。

「私は結婚を申し込むために、今ようやくラム（藍）橋にたどり着いたようだ⁸¹。さて結納金のことだが、彼女にいくら払わねばならんのかね」

結婚仲介人が口を挟みました。

「彼女は本来、千金の値打ちがあります。でも今ここの家族は不運の極みにあるので、あなた様の寛大なお心にお任せすることになります」

商品の値段交渉が暫く続きました。二両増えると一両減り、最後に彼らは、四百両より僅かに高い値段で合意しました。締めくくりの言葉が述べられ、取引は終わりました。それから、婚約者の氏名と年齢を記した札が約束の証として交換され、結納金の支払日と結婚式⁸²の日取りが決められました。

金を手にした者に、解決できぬことなどないという訳です。キョウ親子は、年老いた書記のチュン氏の支援に対し、お礼の言葉を述べました。チュン氏は当面の注意事項を申し渡し、キョウの父親を釈放しました。何と哀れな父娘でしょう。

⁸¹ 脚注 40 参照。

⁸² このことは、キョウが正式に結婚したのであって、単に商品として売られたのではないことを示している。

老人は娘を見て、心臓から血が流れ腸がしぼんでいくような、この上ない悲痛の念に襲われました。

彼は悲嘆にくれました。

「お前を育てていくために、今までいかに多くの計画を練ってきたことか。狙いの的に向かっていく玉のように、お前を立派な男性と結婚させようと願っていたのに。天よ、どうして私たちはこんなにも苦しまねばならないのか。私たち親子の太い絆を断ち切るように仕組んだのは、一体誰なのだろう。私の残り僅かな人生が、どうか拷問と残虐に曝されますように。天よ、どうして私の子供にそんな苦痛に満ちた冒険をさせようとなさるのか。そうすることで、年老いた親の私がさらに悲惨な人生につき落とされたことをご存知か。今日死のうが明日死のうが、私にとっては何も変わらない。苦しみの中で生き続けるくらいなら死んだ方がましだ」

止めどない涙が言葉に添えられ、意を決したように、ずっと立ち上がった老人は、漆喰の壁めがけて突進しました。しかし、間一髪。押し止められて、周りの者の監視の下に置かれることになりました。

キョウは父親を説得するように囁きました。

「私のことなど大した問題ではありません。この世に生を受け、ここまで育てて頂いたご恩に対して、これまで何一つお返ししてはいません。私は、父親を肉刑から救った若い娘ティ・イン（緹縈）⁸³のことを考えると恥ずかしくなります。私も、自分を売って両親の生活を助けた佳人リ・キィ（李寄）に

⁸³ 前漢の時代のこと、ティ・イン（緹縈）は、ウェン（文）帝に請願を提出し、去勢刑を宣告された父親に対する執行猶予を得た。

従うべきでしょう⁸⁴。お父様は、セドリラの木⁸⁵や鶴⁸⁶のように長生きして、数え切れぬほどの枝を張り巡らせては家族を守らねばならない、唯一の樹なのです⁸⁷。もし私の至らぬ心が、その最も大事な絆を断ち切ることをためらっていたら、家族全員が荒れ狂う嵐に見舞われた山河のように滅ぼされていたでしょう。それゆえ私は、一家を救うために自分自身を犠牲にすることを選んだのです。その樹に緑の葉を残せるものなら、花の一つが落ちることなど何でもありません。私は定められた運命を受け入れます。それで良いのです。私を、まだ子供なのに生き延びることができなかつた子と、どうかそのように考えて下さい。そんなに心を悩まさないで下さい。お父様が動揺することは、この愛する家を滅ぼし、お父様ご自身の命を危険に曝すことになるのです」

老人はこの慰めの説明に納得したように見えました。見詰め合う二人の頬を、涙が止めどなく流れ落ちました。

残酷な縁結びの月下老人⁸⁸よ

どうしてあなたはそんな風に
組み合わせるべきでない人に
組み合わせるべきでない糸を
結びつけたりなさるのか

⁸⁴ 唐の時代のこと、佳人リ・キィ（李寄）は、両親の生活費を得るために自分自身を奴婢として売った。

⁸⁵ セドリラの木は長命を意味する。

⁸⁶ 鶴も長命の象徴である。

⁸⁷ ここでキョウは、父親は老齢ではあるが家族の重荷を支えている唯一の人であるということを示唆した。

⁸⁸ 脚注 52 参照。

前の部屋に、マー・ザム・シンが再び現れました。結婚合意書に署名するやいなや、約束の金が支払われました。

十分な金を手にした今となつては、黒を白にすり替えることなどもう難しいことはありません。年老いた書記のチュン氏は、買収資金を受け取ると訴訟の取り消しを宣言してくれました。彼は不運な一家を救うために最善を尽くしてくれたのです。

家族の問題は取りあえず一段落しました。やがて三つ星が輝く時刻となり⁸⁹、花嫁の出発が告げられました。

夜更けの灯火に照らされて一人佇み、キョウは衣装を涙で濡らし、悲しく髪をいじりながら泣きました。

「これが私の運命。どんなものであろうとも、私に用意されたものならば受け入れよう。けれど、胸の奥に深くしまった人との誓いを思うととても苦しい。いつかまた会うことになれば、耐えられないだろう。今となつては、彼には何も手に入れるものはない。金の盃は誓いの美酒にまだ濡れたままなのに、私はすでに誓いを破り、愛を壊してしまったから。山河の果てにあるリャオヤン（遼陽）⁹⁰。ここからどれほど離れているのだろう。私は自らの手でもって自らの家を壊してしまい、今やあなたとの愛の誓いを、計り知れない重さの借りにと変えてしまった。私にとってこの世は終わり、望みは永久に叶えられることはない。この借りを返せない限りは、たとえば黄泉の国⁹¹に行ったとしても、愛の重荷から解かれるこ

⁸⁹ オリオン座の三つ星が東の空に現れる時刻は、結婚式を挙げるのに好ましい時刻であるとされている。

⁹⁰ キム・チョンが彼の叔父の葬儀に参列するために出かけた地方の名。

⁹¹ 死後の世界。

とはないのだ」

山河の果てに旅立った人よ

もしもこの身がこの世に戻れるならば

牛馬に生まれ変わってもあなたに尽くし

愛と信頼の重い借りを返せるものを

キョウは心に秘めた思いに悩まされていました。燭の油がなくなりかけ、袖は涙ですっかり濡れてしまいました。

ふと乙女の眠りから覚めた妹のトゥイ・ヴァンは、燭の灯りに導かれて、そっと姉の部屋に入りました。

ヴァンは心配して姉に声を掛けました。

「海が桑畑にその姿を変えるように、この短い間に数多くの痛ましい出来事が起こりました。天の気まぐれとは何と理解できないことでしょう。家族みんなのために、お姉様一人が苦しむことになってしまいました。でも、どうしてこんなに遅くまで起きていたのですか。何か、他に特別な悩みごとでもあるのですか」

キョウは悲しく言いました。

「私の心は悲しみに溢れています。私はまだ、もつれてしまった縁結びの糸の最後の結び目が解けないのです。秘密は打ち明けにくいけれど、黙っていてもあの方を裏切るようになってしまいます。ヴァン、ここに座って下さい。頼みたいことがあります。願いの前に、まずあなたに額ずきましょう⁹²。

⁹² 告白などの厳粛な行為に先立つ中国の作法。

私には愛を誓った人がいて、それを道半ばに壊すことになってしまいました。ですから、どうか残された絹の糸の両端を、鳳凰の膠⁹³で繋いで下さい。

ある時、私はキムという方に出会い、ある日、私は婚約の証として扇子を贈り、私たちは結婚の誓いの盃を交わしたのです。けれども、高波と暴風雨のような不運に見舞われた私に、両親への恩返しと誠実な愛の誓いとをどうしたら両立できるでしょう。

ヴァン、あなたには長い青春の日々が待っている。同じ血が流れる私に憐れみを下さい。私の代わりとなって山河の前に立てた誓いを果たして下さい。そうすれば、身は朽ちて骨となっても、私の魂はあなたが代わりに果たしてくれる荣誉に僅かなりとも浴することができ、誓いを守れたその幸せは、死後の世界の九泉⁹⁴までも続くことでしょう。この金の腕輪一組と私たちの誓いを記したこの紙を受け取って下さい。私の結婚の誓いを守り、その誓いがあなた方二人の財産となりますように。

ヴァン、あなたがあの方と一緒にあった時、私を憐れんで思い出して下さい。たとえ私でもうこの世にはいなくなっても、この小さな誓いの品と琴の駒、そしてかつて私たちが誓った時の香の残りを大事にしてください。この香を焚いたり、この駒に弦を掛けた時は、外の草や木の葉を見て下さい。もし、それが風に揺れたら、あなたの姉がそこにいるということです。今はまだ、私の魂は誓いの重荷を背負っています

⁹³ 鳳凰の膠は、絹の糸の両端を繋ぐ効能があるらしい。ここで絹の糸は、縁結びの薔薇色の糸を意味する。

⁹⁴ 死後の世界。

が、あの方の愛と信頼に報いるために、あなたが私の願いを聞き入れてくれたならば、ヴァンよ、私は安心して自分の儂い身を家族のために捧げましょう」

夜の宮殿⁹⁵に追放され
言葉を交わすことも
できなくなった時
妹よ
不当に死んだ私のために
どうか一杯の水を
この大地に注いで下さい⁹⁶

「かんざしは折れ鏡が粉々となった今、あの方に抱いた甘くふくよかな想いを、どのように言い表せましょう。私はあの方の前に何万回でも額ずきます。私たちの愛の糸はもっと長く延びるはずだったのに、運命はどうしてこんなに残酷なのでしょう。私の人生はたった今から、流れに漂う花のようになるのです。ああ、愛する人よ。何もかもが終わり。今日この日から私は、あの方を裏切る道へと進むのです」

言葉は喉に詰まり、キョウはめまいに襲われました。息は絶え絶えとなり、気を失って崩れ落ち、手は銅のように冷えてしまいました。

キョウが気絶したその瞬間に、彼女の両親は眠りから目を覚ましました。キョウの部屋は人で一杯になりました。煎じ茶を持ってきたり、薬を持ってきたりと、皆せわしく動き回り

⁹⁵ 死後の世界。

⁹⁶ 祈りの前の献酒の儀式。ここでキョウは、ささやかなお供えを慎ましく依頼した。

ました。発作はすぐに止まりましたが、涙は紅の頬を流れ続けました。突然の発作の訳を尋ねると、彼女は激情を新たにすすり泣き、言葉を口にすることもできませんでした。

ヴァンは金の腕輪と誓いの紙を両親に見せ、耳元で今までの話を聞かせました。

「ここに腕輪があります。そしてこの紙は」

老人は言いました。

「それでは、結婚をぶち壊したのはお前の父親なんだね。よかろう。お前の妹がお前の代わりを務めよう」

鉄が磁石に引かれるように
琥珀に引かれた黒辛子を
引き離したのは誰なんだ⁹⁷
危険な針をそのままに
落していたのは誰なんだ
雲が沈むのを任せるように
誤って落ちた青浮き草を
流れに任せたのは誰なんだ⁹⁸

「私の愛しい娘よ。お前が口にした切実な言葉は全て叶えられよう。石碑がすり減ろうとも、お前の金の心からの願いは必ずや叶えてやろう」

キョウは、腰を低くして恭しく父親に近づき、額ずきながら言いました。

「敬愛するお父様、有り難うございます。これで愛する人へ

の借りを返すことができるでしょう。この召使いの運命がいかに低かろうとも、たとえ異郷の地で骨を曝すことになろうとも、私は構いません」

この少女の悲しみをどのように描けましょう。南の見張橋から、見張りの交代を告げる太鼓の連打がこだますると、花で飾られた御輿がどこからともなく仕立てられ、家のすぐ前に止まりました。花嫁の行列の出発を促すように、管弦の音が上がりました。

嫁ぎゆく者と残される者の悲しみを、どのように描けましょう。涙は石を湿らせ、痛みは絹糸を吐ききった蚕⁹⁹のように心を砕きました。

夕暮れが来る前に、黒雲は空を覆い大地に闇を広げました。湿った木の枝の下では野の草が萎れ、風に震えていました。

花嫁の行列はとうとう一軒の宿に辿り着きました。キョウは四面を壁で囲まれた部屋に一人取り残され、自分の経験のなさを心配したり、身だしなみに気を配ったりしていましたが、真実の愛の場面を思い出せば思い出すほど、苦悩は増していくのでした。

キョウは悲しく呟きました。

「価値ある人生を送れると思っていたのに。今私は、いかがわし気な人の手に落ちてしまった」

太陽や雨に損なわれまいと
気をつけてきたのは
何と虚しいこと

⁹⁷ 結婚の象徴。黒辛子の種は、鉄が磁石に引っ付くように帯電した琥珀に付着する。

⁹⁸ 「奇跡的に巡り会えた二人を間違っ別れさせたのは誰だろう」

⁹⁹ 「腸（はらわた）が引き裂かれるような痛み」に相当する表現。

こんな風になるのなら
桃花のようなこの身を
愛しい人に捧げたかった
あの東風¹⁰⁰の心地よさを
私たちから奪ったのは誰なのか

「旅立ちとはとても辛いけれど、残ることもできない¹⁰¹。再び彼に会えたとしても、きっと我が身はもう清らかではない。このままでいられる可能性など全くない。先の見えない人生を運命づけられながら、一体どうしたら紅の頬を授かった少女として、清純な生活を続けることができるのだろう」

狼狽えたキョウの目が、机の上にある懐刀に止まりました。彼女はそれを取り上げ、袱紗にくるんで呟きました。

「もし侮辱されそうになった時、この懐刀は私の運命を決するの役に立ってくれるはず」

その夜はのろのろと過ぎて、時間だけが確実に流れ続けました。キョウはいつまでも寝台に座り、眠るのも忘れて思索に耽っていました。

ところで、マー・ザム・シンとは本当は何者なのでしょう。彼女が結婚したこの男は、実は小狡いならず者だったのです。かつて彼は、放埒な人生を過ごした果てに、始末に負えない問題を引き起こしていました。その最悪の状況から抜け出すために、彼は金持ちの情夫という古い手口に頼ったのでした。

¹⁰⁰ 極東では、東風（「こち」とも読む）は海から健康によい新鮮さを運んでくる。ここでは幸せを意味する。

¹⁰¹ 「私の旅立ちとは愛する人との別れとなるが、もしここに残ると父が再び投獄されてしまう」

かつて放蕩な生活を送り、今では年を取りすっかり魅力無くしてしまっただのトゥー・バー（秀婆）という名の老婆が、青楼¹⁰²の世界で生きていました。彼らは偶然にも行きずりで知り合いました。何という組み合わせ。糠の代わりにおが屑を売り、胡瓜の代わりに苦瓜¹⁰³を売る悪徳商人が手を組んで、おが屑と苦瓜が同じ籠に並んだようなもの。相棒となった二人は、共同で怪しげな店を開きました。そこで年中商っていた商品は、化粧させ香水をつけさせた女性だったのです。彼らは町から町へ、国から国へと旅をして、若い娘を探し回っていました。娘たちを商売の手伝いだと騙して、娼婦の暮らしへと躡けるのでした。

運が良からうが悪からうが、悲しいかな、それは神様の思召し。災難は降りかかり、キョウもまた、彼らに選ばれてしまったのです。何と哀れなこと。自分が悪漢に売られてしまったことを、花枝のように純真なこの少女にどうして察知できたでしょう。仕掛けられた罠に落ちてしまいました。約束の日、僅かばかりの結納金と交換に、キョウを悪者の元へと連れてゆく行列が続きました。

マー・ザム・シンは、手中に旗が落ちるのを見て喜びました。彼女を見れば見るほど有頂天となり、心は乱されました。

彼は独り言を言いました。

「女王のような美しさだ。微笑みはまさに千金の価値。そして今彼女はここにいる。まず為すべきは花を摘むこと。王子や貴族たちがこの少女を競うことは確実だ。彼らは大枚を払う

¹⁰² 快楽の館を指す言い回しで、館に塗られた青漆の色に由来する。

¹⁰³ 二人の悪党にまつわる逸話からの喩え。一人は糠の代わりにおが屑を売り、もう一人は胡瓜の代わりに苦瓜を売った。間もなく二人の悪党は、同じ発想をする同じ穴の貉（むじな）であることを互いに認め、相棒となった。

に違いない。賭けた金はすぐ取り戻し、後は利益となろう」
彼は今、手中に落ちた獲物にひどく気をそそられました。
しかし、もし、この授かりものに手を出したら、青樓の利益は
どうなってしまうのでしょうか。

マーは企みを練り続けました。
「仙人の桃¹⁰⁴が卑俗な者の手に届く時、その甘さを味わおう
と枝を曲げ下ろさぬことがあるものか。この低俗な世界の酔
いどれや青二才の中で、真実を本当に見分ける者は何人いる
だろう。ザクロの皮の汁を少し、雄鶏のとさかの血¹⁰⁵を数滴た
らして少し繕えば、少女はまた仙人の桃として通るだろう。
薄暗がりの中で青二才どもは騙され、幾度大金が転がり込も
うとも、失われるものは何もない。あの老婆が疑ったとして
も、よかろう、少しの間懺悔すれば済むことだ。それに、家
から離れたこの地で何もしないでいたら、キョウの一家はむ
しろその不自然さを疑うかも知れない」

可哀想な椿の花
蜂は思いのままに暴風雨
儂い翡翠は敬意を払われず
軽やかな香りは憐れみも持たれない

¹⁰⁴ 仙人が育てた一種の桃で、伝説によると大きくて、おいしくて蓄薇色をしている。いかに卑俗な者でもそれを食べたら仙人になると言われる。中国では、この桃は中国北部の高山、つまり天山山脈の仙人の住処で見つけられると考えられていた。この山には、ティエン・タイ（天台）の洞窟を通して歩いて行くことができる。伝説によると、その洞窟は二人の学者ルー（劉晨）とグエン（阮肇）が彼らの心の妖精に会うために訪れた場所である。ベトナムでも、一部のベトナム人は、タインホア省トンソン地区に仙人の洞窟が存在すると信じている。

¹⁰⁵ この外用薬は、汚された少女に再び処女らしさを与える色合いを持つとされる。

悪夢のようなその夜を、どのように描きましょう。
部屋に残された花模様の燭の灯りが、みじめに捨てられた
少女を照らしていました。マーへの憎しみと汚された思いが
心を満たし、苦い涙が止めどなく流れました。

キョウは悲嘆にくれました。
「何ということ。金よりも千倍も清らかだったこの身は、紅
の頬を授かった少女の誇りと共に汚されてしまった。今は全
てが終わり、希望は何も残っていない。人生がこれほどに転落
するのなら、もう終止符を打つ方がいい」
運命を呪い行く末を嘆いて、袱紗から懐刀を取り出し、
キョウは人生に終止符を打つ用意をしました。けれども彼女は
必死に考え直しました。

「私一人ならば。しかし両親はどうなるのか。何かが起こつ
たら、調べられて困った事態になるだろう。これは私一人の
こと。突き詰めて考えないようにしなければ。今であろうと、
後であろうと、どうせいつかは起こること」

キョウは生か死か迷い続け、どうするか決めかねているう
ちに、外からはけたたましく上がる雄鶏の鳴き声が屋根や壁
を通して聞こえてきました。見張櫓からの角笛の音がまだ
朝霧の中でこだましている時、出発を促すマー・ザム・シンの
声が上がりました。

キョウはふさぎ込んだまま、その場所を出発しました。馬車
の車輪がでこぼこ道に差しかかると、馬は足をよろめかせま
す。十里乗ってから、彼らは第二の停泊地に着きました。ヴ
ウン氏の意向で、花嫁の送別会が催されました。

主催者と祝宴客が外でざわめいている間に、ヴウン夫人は
娘に続いて部屋に入って行きました。向き合うやいなや、血

の混じる朱色の涙が二人の頬を濡らしました。

キョウはそっと母親に囁きました。

「おお、愛するお母様。儂い桃の花のようにこの世に生まれたことを悔しく思います。あなた方がこれまでに私にして下さった諸々に、恩を返すことができそうにありません。この結婚はごまかしに過ぎません。私の清らかさはすでに泥の中に投げ込まれました。これから先百年生きたとしても、年老いていく親のあなた方に親孝行ができない私は、胸刺す自責の念を抱いて生き続けることになるでしょう。ここで起こったことからみて、私は悪者の手中に落ちたようです。結婚のその日、彼は私を誰もいない家に置き去りにして、戻ってから不自然。去る時は逃げるように去って行きました。彼の食事や会話の作法は不器用で、使用人たちに軽蔑されてさえいるようでした。礼儀は品なく、風采は詐欺師そのもの。注意深く見れば必ず分かります。全ては終わりました。あなたの娘について語ることももう何にもありません。異郷の地があなたの娘の住処となり、墓となるでしょう」

話を聴いて、母親は正義を叫んで天を引きずり下ろしたいと思いました。

別れの盃が何度も酌み交わされ、無益に何度も空けられました。祝宴が終わると早々に、馬車の出発を促すマー・ザム・シンの声が上がりました。

哀れな娘を思い心を痛めながら、ヴウン氏はマーの鞍に近づいて、懇願するように言いました。

「どうか、このか弱い柳、柔らかな桃のような娘を哀れに思ってください。私の家族に災難が降りかかって、娘は今奴婢となってしまうました。これから娘がどれほど遠くに離れてい

くのか、大海原と果てしなき地平線のどの辺りに向かうのか、私にはわかりません。雨が降ろうと晴れようと、娘は見知らぬ国で心細く生きていくことになります。どうか娘をあなたの寛大な竹と松¹⁰⁶の木陰で覆い、そしてそのか弱い宿木のような身を雪や露から守ってください」

マー・ザム・シンは恭しく、天を仰いで誓いました。

「私たちの足は縁結びの赤い糸で結ばれています。もし今後、私のせいで彼女に何かが起こったとしたら、その時は、天よ、太陽と月の鏡が軽蔑すべき私の姿を映し、地獄の剣が懲罰の道具となりますように」

馬車は急いで旅路につき、耳をつんざくような音を立てながらガタガタ走って、うねり上がる雲を吹き通す突風のように、巻き上げた赤茶けた土埃の向こうへとやがて消え去って行きました。

可哀想な両親は、別れの涙を乾かそうとしながら、いつまでも別れのその場所に立ち尽くしていました。

一日、そしてまた一日と日は過ぎてゆきましたが、彼らは娘が旅立っていった遥かな地平線に目をやらぬ日はありませんでした。

¹⁰⁶ これら二つの常緑樹は、年齢では年嵩がいついっても見かけはまだ若く強い男を意味する。大抵の老人は、これらの木に喩えられると大変喜ぶ。このようにしてヴウン氏は、彼の妻ほどにはマー・ザム・シンについて話を聞かされていない中で、娘をマーに託したのだった。

第8章 流落
(911行～1056行)

キョウは、霜の降りた橋を渡り、遠く見知らぬ土地に向かって進んでいました。目の前には、巨大な黒い覆い幕のような雲が遠く地平線まで広がっていました。葦は冷たく乾いた北風に頭を垂れ、規則正しく波打っていました。秋の空は、花嫁と悲しみを分かち合い、一面に陰鬱な外套をまとっているかのように見えました。

旅の道は夜の帳につつまれ、分厚い靄の層を散らしました。見上げると、天空はどこまでも高く、地平線は遙か遠くに見えました。山河を前に交わした誓いの証人である月を見る度に、キョウは恥ずかしさを覚えずにはいられませんでした。秋の森では、木々の緑の葉の間に紅葉が点々と混ざって、両親への日々の務めが果たせなくなったことを思い出させるように、夜鳴き鳥の鳴き声が聞こえました。

旅で目にした光景は、キョウにとって何と珍しいものだったでしょう。一月の旅を終え、ついに一行が到着したのは、リンツー（臨淄）¹⁰⁷という町でした。一軒の家の前に真珠色の馬車が止まるやいなや、キョウは暖簾の陰からこちらへと近づいてくる人を見ました。

それは、一目でそれと分かるほど鈍色に沈んだ顔色の老婆でした。それにしても、何という女。何を食べて、そんなに醜く肥えたのでしょうか。老婆は馬車に近づいて新参者を馴

馴れしく迎え、その健康状態を尋ねてきました。キョウは老婆に導かれるまま、その家に足を踏み入れました。

その部屋には人が群れていました。片側には眉を小綺麗に手入れした女性が何人かいて、反対側には遊客たちが座り、中ほどでは一束の線香が焚かれ、見上げると白い眉の精霊の絵が壁に掛けられていました。これこそは何百年もの間、青楼の守護神として祀られてきた精霊だったのです。

娘たちは朝夕二回、その精霊への礼拝に花と線香を供えました。運が回らず良い客が来ない時は、娘は運を取り戻そうと精霊の前で慎みなく衣服を脱ぎ、線香を焚いて運が向くようにと祈りの詞を唱え、それから祭壇の花を各自の敷き布団の下に敷くのでした。運が戻り遊客が蜂や蝶のように群がることを期待したのです。

老婆から祭壇に額ずくよう命じられた時、キョウはまだ混乱してどうして良いのか分かりませんでした。

老婆は祈りを唱えました。

「家の商売が繁盛しますように。毎晩が三月三日の冷食祭のように、毎日が一月十五日¹⁰⁸と同じように、多くの客が鶯や燕のように群がり、竹と梅の木¹⁰⁹のように慕い夢中になりますように。雁が止めどない手紙を運んできますように。客を玄関まで見送るのは、裏口からの客を迎える時だけでありますように」

それらの古めかしい祈りの詞は、キョウの耳にどのよう響いたでしょう。彼女は、それらの意味を少なからず理解し

¹⁰⁷ 山東省の町。この物語では入り江近くに位置すると述べられているが、現在では海岸から少なくとも100km離れた場所に位置する。明の時代以降の黄河の流下土砂が、海岸線を変えてしまったのかも知れない。(和訳者注：現在の山東省淄博市臨淄区)

¹⁰⁸ 中国では、毎年三月三日に冷食祭を祝う。二番目の祭りは、一月十五日に執り行われる。これらの祭りの時は人々で賑わう。

¹⁰⁹ 竹と梅の木は、中国の絵描きが好んで一緒に描く木で、固い友情を意味する。

ましたが、そこにはなにか説明されていないことがあるように感じました。

老婆は祭壇の前にもう一度額ずいてから、自らをトゥー・バー（秀婆）と名乗り、長椅子に上がって不作法に座りながらキョウに命じました。

「私の娘よ、ここに来てお前の母に額ずきなさい。それから隣の部屋に行って、お前の叔父さんに敬意を表しなさい」

キョウは反論しました。

「思いもよらぬ災難によって家族から引き離され、私はすでに妾の身分を甘受しました。どうして鷲に燕の名前を与えるのですか¹¹⁰。私はまだ若く世間を知らず、あなたが私にどのような運命を授けるのかも分かりません。正式な結納や婚礼の全ての儀式は執り行われ、私たちは本当の夫婦となっています。それなのに、今なぜ私の役割と身分を塗り替えようとされるのか。全て明らかに説明して下さい」

トゥー・バーはこれらの言葉で何が起こったのかを理解し、怒り出しました。

「今分かった。お前は私の夫を盗んだ。あのならず者め。あいつの仕事は、国中を旅して、この館の利益のために娘を探すことだったのに。恩知らずな心なしの悪党め。おお、私は何と哀れなこと。あの悪党は誘惑に駆られて、幸運を呼ぶはずの私の商品を奪ったのだ。うわべのはげ落ちた今、払った元手はどうなるのか。無くなった、悪魔と一緒に消えてしまった。お前は私に売られたんだよ。今この館にいるのだから、これからはここの決まりに従うことだ。あの老いぼれ悪党が

お前を騙そうとした時、やつの言うことを聞く代わりに、どうして文句を言わなかったんだ。どうして抵抗しなかったんだ。そんなに若いくせに、もうあんなことがしたかったのかい。お前を私のしきたりに従わせるためにどうするか見ていなさい」

そう言うやいなや、意地悪な老婆は革の鞭を取り、か弱い少女を打ち据える準備をしました。

「おお、どこまでも深い空よ。限りなく広い大地よ。旅立ちの日以来、この小さな身を犠牲にしてきたのに、全ては終わりました。悔やむことなど何がありますか」

キョウは嘆きながら、袖に隠し持っていた懐刀を取り出しました。

少女がそんなことをするのは誰も思っていないでしたが、少女の手が死に向けて動く直前、老婆は少女の表情に気がつききました。おお、この美しく比類ない才能を持つ少女は何と哀れなことでしょう。鋭い懐刀は、彼女とこの風塵に汚れ荒んだ世界をつなぐ絆を断ち切ろうとしました。

この理不尽な事件の話は、すぐに町中に広まったので、まもなくその館には好奇心旺盛な人々が群がりました。若い娘は横たえられ、永遠の夢に沈んだかのように意識を無くしていました。そばでは恐怖に震えた老婆が、自分自身が死にかけているかのようなぞっとした目を、犠牲者に釘付けにしていました。トゥー・バーは傷ついた少女を館の西側の部屋に運び入れさせてから、看護役を指名し、医者と呼ばせました。

キョウがこの汚れた世界とまだつながっているなんて、誰が信じたでしょう。昏睡状態の中、キョウは脇に立っている若い女性の幻を見たように思いました。

¹¹⁰ 「でもどうして、私の身分と役割を混乱させるのですか」

まぼろし きさや
その幻は囁きました。

「あなたの因縁はまだ終わっていません。あなたが負っている前世の借りから、どうして容易に逃れられましょう。才能と美貌を共に授かった、紅の頬を持つ少女として生まれたからには、まだまだあなたは自分の運命の重荷を背負い続けなければなりません。たとえあなたが終わりにしたくても、天は了解なさらないでしょう。すでに定められている運命の前では、あなたの意志なぞ儂い葦か柳のような弱いものです。現実から逃げようとするこのような状態から、あなたは早く抜け出すよう努力すべきです¹¹¹。この次はチェンタン河（銭塘江）¹¹²でお会いすることになるでしょう」

まるいちにちりょう
丸一日治療したあと、キョウはゆっくりと意識を取り戻しました。蚊帳の脇では、トゥー・バーが彼女を見続けていました。みにく こ ぽ ぬめら ぐちよう もんがい かつた
醜く肥えた老婆は、甘く滑らかな口調で問題を片づけようとして言いました。

「もし私たちが何度も生まれ変わることができたら、どんなにか嬉しいだろうにねえ。お前の青春の花は咲き誇ろうとしているし、青春の日々はこの先まだまだ続くんだよ。私は、お前の金のような徳を仮初めの恋愛に仕向けようなんて、ばか 馬鹿な間違いを犯しちゃったよ。でも、間違った運命の道が

¹¹¹ 幻の若い女性は、現在の弱々しい状態を甘受し、それを乗り越えるよう、キョウを説得した。

¹¹² 浙江省を流れる河川で、杭州湾の湾奥に注ぐ。（和訳者注：銭塘江は、海嘯（かいしょう、河津波）が起きる河川として、アマゾン川と並び知られる。海嘯は、満ち潮が河川を遡る際に、前面が垂直の壁となって激しく波立ちながら進行する現象で、夏の大潮時に顕著となる）

まえ やかた みちび だれか
お前をこの館に導いてしまったんだから、そうさねえ、誰かがお前に結婚を申し込むまで自分の部屋に閉じこもって待っていないさい。お前は生きている限り、失うものは何もないのだよ。お前に打ってつけの良家の若者を探してやろう。どうして無実の者に罪をなすりつけようとしたのさ。どうして自分を傷つけて私を破滅させようとしたのさ」

キョウは、耳元で囁く老婆の言い分の中の偽りに僅かに混じる真実を見分け、それを信じようとはしました。それに、その前の夢の中で幻の女性が彼女に告げた言葉を思い起こしてみると、人間の運命には疑いなく天の意志が働いているようです。

キョウはひとり言を言いました。

「そうなのだ。もし私が前世で負った自分の借りをこの世で返し切れずに残してしまい、借りが増えて来世にまで持ち越すことなど、どうしてできよう」

かのじよ みにく こ ぽ ぬめら ぐちよう もんがい かつた
彼女は、醜く肥えた老婆が丸め込もうとする話に静かに聞き入って納得し始め、弱々しく答えました。

「誰がそうなることを望んでいるのですか。もしも本当に、たった今あなたが約束してくれたことが手に入るのなら、私は幸せです。今日言った約束を明日も繰り返して頂けますか。蜂や蝶が迫ってくるのではないかと心配なのです。そうなるなら、泥まみれになって生き続けるより、清らかに死ぬことを選びます」

老婆は大袈裟に天を仰いで誓いました。

「私の娘よ、安心おし。自分の喜びのためにお前を裏切ろうとはしないよ。もし私が誓いを破ったなら、その時は、天よ、頭上に輝く太陽がその重い罪を裁き、この身を焼き焦がしま

すように」

その明確で厳肅な言葉に、キオウは身を任せることにし、次第に落ち着きを取り戻しました。館の袖の「凝碧の間」が、彼女の青春の聖域となりました。その部屋からは、出たばかりの月の放つ光に、遠い山の端が溶けていくのが見えました。周りに広がる茫漠とした地平線。遙か遠くに見える砂山の黄色が、それを取り巻く道の赤茶けた土埃と混じり合っていました。

朝の雲を目にした時、キオウは燭の灯りに照らされていることを恥ずかしく思いました。目の前に広がる景色は、心に刻まれた過去の思い出を呼び覚まします。

少し前には愛する人がそばにいて、月明かりの中、誓いの盃で美酒を飲み交わしたのに、今、彼は遙か遠くの海の果て、見知らぬ空の下に隔てられ、孤独の中にあるでしょう。彼は、露が運ぶはずの彼女からの幸せな手紙を、無益に待ち続けていることでしょう。彼女の心に残された傷を全て洗い落せる日は来るのでしょうか。

そして彼女の両親。何と哀れなことでしょう。毎朝毎晩そうしていたように、恐らく今この時分も表玄関の敷居で娘の帰りを待ち続けていることでしょう。夏は彼らに風を扇ぎ送り、冬は彼らが暖かいようにお世話をし上げるべきは誰なのでしょう¹¹³。

¹¹³ 昔、中国とベトナムの親しい子供たちは、冬の間両親を暖かく過ごさせようと、両親が寝床にはいる前に、自分自身で両親の毛布にくるまり毛布を暖めた。

両親と暮らしたライ（萊）¹¹⁴の中庭

雨と太陽は流落のあなたを

故郷からどれほど遠ざけたのでしょうか

梓の老木は一抱えも太くなっていくほどに

キオウは、夕暮れのほの明かりに浮かぶ入り江を悲しげに見つめました。遠くを望むと、滑らかな小波に漂う帆影が微妙かに揺れていました。目の前には、漂う花のように浮かぶ泡に覆われた陰鬱な海が、水平線まで広がっていました。草の萎れた悲しげな草原も果てしなく広がり、大地と地平線は溶け合って、青みがかかった色を呈していました。

海風を受けて、キオウの胸には悲しみがこみ上げました。いつ果てるともない単調な波の音が辺りにこだまして、異郷の山水風景の中で深く孤独感を味わい、彼女は自らの流落の苦しみを即興詩で吟じるのでした。

¹¹⁴ 楚のラオ・ライ（老萊）という名の賢者は、自分が七十歳になっても両親が生きていた。彼は、両親に彼らはまだ若いのだという印象を与えるために、いつも子供のような服装をしていた。



Buồn trông cửa bể chiều hôm,

夕暮れのほの明かりに浮かぶ入り江を悲しげに見つめました。

第9章 スー・カイン
(1057行～1188行)

キョウが悲しみに包まれ真珠の涙を落している時、韻を踏んで詩を朗唱する声が、壁の向こうから聞こえてきました。彼女が隙間から覗いてみると、声の主は身だしなみを整えた青年でした。キョウは、その人はきっと文人家系の出に違いないと考えました。名前を尋ねると、その人はスー・カイン（楚卿）と呼ばれていると答えました。

見かけないその青年は、窓掛け越しに少女の姿を目にすると、すぐに彼女に恋したようでした。

彼は声高に言いました。

「ああ、女王のような美しさ。えも言われぬ香り。あなたは どうしてこのような場所に迷い込んだのでしょうか。本当に何と残念なことでしょう。このような宝石こそは天上に相応しい。ああ、可哀想な花よ。どうしてこのように身を落さなければならなかったのですか。神様の不当な扱いに怒りを覚えずにはいられません。私の心の深い思いをあなたに分からせてくれる人は誰でしょう。おお、高貴な人。純粹な人。あなたは私の勇敢さを知らないけれど、私は檻を壊して、あなたを閉じこめている鳥かごから救い出してあげましょう」

キョウは、陰気な秋の気配を感じて雨戸を閉めましたが、あの確固とした約束がまだ耳の中でこだましていました。彼女は、見かけない青年のこと、そして彼女自身のことを考えました。彼の同情の言葉は、彼女の心の奥に入り込み、一人だけの寂しさを少し軽くしたようでした。キョウは落ち着いて考えてみました。

「もし私が、一日そして次の一日をこのまま待ち続けたら、この風塵にまみれた一生に、いつ終わりが訪れるのだろうか」

キョウは心を決め、この希望のない状況から救い出す切実な手を差し延べてくれるようお願いする短い手紙を、危険を覚悟の上での青年あてに書きました。その手紙の中には、彼女に起こった事柄の全て、つまり彼女の両親の恩に報いるための決心から、この恥辱の館での悲しい体験までを綴りました。

翌朝、靄が散り夜が明けるやいなや、キョウは親切な騎士に使いを送り手紙を届けさせました。

西の地平線がまだ黄色の光線に彩られている頃、その人からの返事が届きました。手紙を開けると、桃の花柄であしらった紙に「ティック・ヴィエット（昔越¹¹⁵）」という二文字が明瞭に記されていました。キョウは暫く考え、秘密の言葉の解説に成功しました。その意味するところは、「二十一日の十九時から二十一時の間に走る」

夕暮れ時、鳥たちが一羽ずつ森に戻り始めました。遅れて現れた月は、椿の花房に半分隠れて見えませんでした。不意に、西の塀に映った枝の陰が僅かに踊りました。キョウは窓を開け、音もなくこっそりと上がってくるスー・カインを見ました。彼女はひどく当惑しましたが、勇気を振り絞り彼を迎えるため歩を進めました。

キョウは自分の手を握りしめて囁きました。

「私はつまらない青浮き草か、儂い泡に過ぎませんが、まるで鶯と燕の群に迷い込んだ鳥のようにここで暮らしていま

¹¹⁵ 昔越という漢字の要素を分解すると、「廿一日、戌の刻（19時～21時）、走る」という意味が明らかとなる。このなぞなぞは暗号で書かれたメッセージである。

す¹¹⁶。生きているうちはあなたに私の身を託し、死んだ後は私の骨を託します。私の感謝の気持ちを表すため、後々は戦いの草原で敵の足を絡ませる草むら¹¹⁷となり、また、幸運の腕輪を運ぶ鳥¹¹⁸となることをお約束します」

暫く静かに座ってキオウの誓いの言葉を聴いていたスー・カインは、重々しく頷きながら、天に誓いました。

「私はあなたのそばにいます。あなたは自分に相応しい人を見つけたのです。真剣に私を頼ってきたのですから、たとえあなたの溺れている海を埋め尽くさねばならないとしても、天よ、私はそうすることを誓います」

キオウは答えました。

「幾千もの解決策はあなたの寛大なお気持ち次第です。どうか、どんなことがあろうとも解決するという最終の決断を下して下さい」

「私には、足の速い駿馬と私の命令に忠実で頑強な使用人がいます。この機会に、こっそりとここを離れましょう。解決策として三十六の方法があるけれど、これより優れた方法があ

¹¹⁶ 「私はここで、軽薄と放蕩の世界に迷い込んだ鳥のように暮らしています」

¹¹⁷ 唐の時代のこと、晋のグイ・トゥ（魏武）という名の男は、まさに臨終を迎えようとする時、彼の若く美しい妾が彼より長生きするのを嫌った。彼の遺言として、彼の息子グイ・コア（魏顥）にその女を生きたまま自分と同じ棺に入れて埋めるよう命じた。コアは残忍過ぎるように思えた父の命令を実行しなかった。父の遺言に背いてなされたこの情け深い行いは、後に報われることになった。秦のドー・ホイ（杜回）という名の戦士との戦いの折、コアは突然敵が草原の草むらに絡まったのを見た。彼はその機会を上手くとらえて敵を殺した。父の妻の父親が後日夢枕に立ち、コアの情けに報いるため、ドー・ホイに草原の草を意識的に絡ませたことを明かした。

¹¹⁸ 後漢の時代のこと、ズウン・パオ（楊宝）という名の男が小さな黄色スズメと小型のタカの不公平な戦いを目撃した。小さなスズメは傷つき地面に落ちた。彼はそのスズメを拾い上げ、手当てしてから放してやった。小鳥への慈悲の行いは後に報われることになった。ある日、黄色の服をまとった少年が彼の前に現れて彼に金の腕輪を四個与え、その宝物が彼と彼の将来の子孫に幸福をもたらすことを保証した。実際、彼は後に大変有名になった。

りますか。風が吹こうと雨が降ろうと、何が起ころうとも、私はいつもあなたのそばにいますから、何も恐れることはありません」

そう言ったスー・カインの軽々しい言葉に、キオウは疑いの陰を感じました。この約束に少し深入りし過ぎたことに気がつきましたが、彼女の人生はこのままでどうなるのでしょうか。気まぐれな神様が彼女の運命をどれだけ遠くに導こうとするのかを探るためにも、この冒険に賭けぬ手はありません。

二人は一緒にそっと階段を降り、それぞれが馬に乗り走り去りました。

秋の夜はゆっくりと過ぎてゆきました。水滴が水時計のように規則正しく滴り落ち、見張りの時間が終わろうとしていました。

風が吹く度に黄色い葉が舞い落ち、山並みの向こうでは沈む月がその鏡を隠そうとしていました。踏みならされた道では、落ちた露で草の色が色褪せて見えませんでした。馬を走らせ続けるにつれて、キオウは望郷の思いを次第に深く呼び起こされるのでした。

突然、甲高い鳥の鳴き声が辺りにこだまし、逃げる少女の背後から騒がしい人声が上がりました。キオウの心臓は恐怖で高鳴りました。彼女の戦士スー・カインを求め振り返りましたが、彼は馬と一緒にどこかへ消えてしまいました。彼女は森の奥深く一人っきりで困り果て、よろよろ歩を進める馬の鞍に茫然自失となり座っていました。

おお 天の神よ
あなたに憐れみの心はないのですか
すでに痛みつけられた薄紫の花を
さらに踏みつけるのはなぜでしょう

彼女の恐怖に答えるかのように、男女の一団が道の両側から飛び出してきました。逃れるための大地を掘るかぎ爪か、空に飛びたつ翼などどこにも見当たりません。トゥー・バーがまっすぐ近づいてきました。彼女は息を切らし喘ぎながらも、少女を捕らえると一気に館に連れ戻しました。尋問も調査もありません。残忍な手が、か弱い柳、悲しい花を、情け容赦なく打ち据えました。薔薇色をした素晴らしい生きものに残忍な仕打ちを加える光景を前にして、皮膚と肉をもつ人間のうち、どんな人なら、どんな心なら、胸を痛めないでいられるでしょう。

自白の後には服従と哀願の言葉が続きました。哀れな少女はとうとう疲れ切って崩れ落ち、血だらけの頭を床に打ちつけました。

キョウはうめきました。

「私は不運な女に過ぎません。山河は私を家と家族から離れ離れにしてしまいました。そして私はここにいて、私の一生はあなたの手の中にあります。私の身がこんな風になるなんて、どうして予見することができたでしょう。全ては終わってしまいました。私は、今となってはほとんど価値のない人間です。この運命は私のためにすでに用意されていたものですから、私はそれに身を任せます。しかし、あなたが元手を掛けた商品の私が死んでしまったらどうしますか。どうせ

私は泥の中を這い回る鰻のようなものですから、頭を汚すことを怖がるのは止しましょう。これからは、取るに足りない純潔のためらいを捨てることを約束します」

狡い老婆は、衰弱しきったキョウのその呟きに飛び付きました。老婆は折檻を止めさせてから、誓約書を持ち出しました。この時期のキョウの仲間にマー・キョウ（馬嬌）という名の少女がいましたが、この場のキョウに深く同情して、危険を顧みずキョウの保証人を引き受けてくれました。残忍な老婆は、キョウを最も酷い条件下に置こうと、時には脅し、時にはなだめながら責め続け、結局最後には満足して優しい言葉を掛け、自分の獲物を放したのです。キョウは奥の部屋に運び込まれ、束の間の休息を許されました。

マー・キョウが彼女にこっそりと言いました。

「馬鹿なことをしましたね。もう取り返しがつきません。青楼の世界で悪名の高いスー・カインのことを知らないなんて。あなたはどこの出なのでしょう。どんなに沢山の人が、あなたのように彼に葬られたことか。今回の騙し方は、彼が女を騙す時に使ういつもの手。あの鬼婆と手を組んで報酬を受け取ったのでしょうか。そうでなくては、こんな喜劇を演じる訳がない。彼はあなたと約束をした後、すぐに反故にしたことは間違いありません。これからは口を慎むこと。もう不用心なことはしないことです」

キョウは答えました。

「でも彼は本当に厳粛な誓いをしたのです。そんなに悪い人だなんて、どうして考えられましょう」

第10章 転落
(1189行～1274行)

キョウは、檳榔樹の仏炎苞で護られたような顔¹¹⁹、そう、あの厚かましいスー・カインの顔が現れた時でも、まだ何が起こったのかを考えていました。

「何があったんだ。お前たちの中に、俺に騙されたと言いつらすあばずれがいるらしいが、その女をここに来させて、俺が誰だか分かるよう俺の顔を見させてみる」

声を張り上げたスー・カインに、キョウは答えました。

「はい、分かりました。あなたは私に何も悪いことはしていないと言われました。では、私は何もしていないと言うあなたの言葉に従います。ですから、私に何も悪いことはしていないとすることにも同意します」

息巻いて怒鳴り散らしながら、スー・カインは前に進み出て暴力を振るうかのように手を挙げました。

「おお、神様。この男は知っていたのです。鶯をそそのかしたのは誰か、燕が逃げるのを手引きしたのは誰か、私をこんな深淵に突き落したのは誰かを。今この男は、自分が確かに口にした誓いの言葉を打ち消そうとここにやってきたのです。けれど私はまだ、この男が約束に書いた昔と越の二文字が書かれた手紙を持っています。騙したのはまさにこの顔、この汚らわしい顔であって、他の誰でもありません」

キョウの言葉は、その場にいた人々の心を動かしました。不誠実な裏切り者という烙印を押され、蔑み笑われたスー・カインは、自らの恥を覆い隠すことができず、その場を逃げ出しました。

部屋に閉じ込められたキョウは、苦い涙を流しました。自分のことを考えれば考えるほど、悲しみに苛まれるのでした。銀よりも白く雪よりも清らかだった少女にとっても、何と酷い状態でしょう。今、彼女は風塵にまみれた世界にいて、これからはこの館の他の者たちに降りかかったのと同じような人生に耐えていかねばならないのです。

キョウは考え込みました。

「悲しくとも嬉しくとも、それは人生。それに、たとえ悲運を定められた紅の頬を持つ少女の不幸な人生だとしても、それがいつまでも続くとは限らない。きっと私は前世の何かを全うし損なったのだろう。全うできなかったことへの償いからは逃れようもない。花瓶は壊れてしまって、何であろうとも私には元に戻すことができないのだ。だとしたら、どうか、私の身が現世にあるうちに借りを返し終えますように」

明るい月が澄んだ鏡のように見える頃、老婆トゥー・バーがキョウを見にやってきて、彼女に甘い声で教え込みました。「人を楽しませる技は難しいもの。歓楽のこの世界では、すっかり心得て置かなければならない」

キョウは答えました。

「風雨が私の人生を打ちのめし、私はもうこの身を犠牲にしたのですから、さらに歩を進めたいとは思いません」

邪悪な老婆は言い返しました。

「男は皆同じようなもの。当てもなしにここへ来る訳がない。この仕事では面白いことが沢山あるんだ。私の娘よ、客が柳

¹¹⁹ 檳榔樹の仏炎苞を乾燥させると、大きく固い葉となる。それは食品を蠅や埃から護るために、食品を包んだり覆ったりするのに用いられる。これは、檳榔樹の仏炎苞で護られているような顔を持つ厚かましい人間を指す慣用語表現でもある。

の花¹²⁰に飽き果てるまで、客を石ころのように指図できるようになるまで、そして客が正気をなくすまで客を喜ばせるのに、七種の演技¹²¹と八種の技法¹²²があることを覚えておきなさい。時には唇で、時には目の端で、そして時には花のような微笑みで。あるいは詩を朗唱し客を魅惑する。これらは全てこの館の仕事。全て身につけたその日こそ、真に利口な女となるのだから」

老婆の教えを聞いていたキョウは、眉をひそめ、青ざめてしまいました。何と奇妙で厄介な人生が彼女のために用意されたのでしょうか。良家に生まれ、これから本当に人生が始まるうとしていた矢先に、こんな奇妙なことを教わるとは。

彼女は呟きました。

「全てを受け入れると決心しても、これほどの転落を見た人はいるのだろうか。こんな汚れた世界にまで。でも何であろうとも、今は彼らの手から自分を救い出すことはできないのだから、とにかく生き抜いてみよう」

その時から、キョウは青楼の薔薇色の窓掛けの奥で暮らしました。彼女が、自分の境遇を素直に認めて、本来自分が持つて生まれた翡翠の価値である素直さ賢さを磨こうと努力するにつれて、彼女は次第に有名になりました。懇懇で見かけ倒しの蜂や蝶のような客が、彼女目当てに館に群れ入りました。宴が次から次へと開かれて時には一月も続き、笑い声が毎日

¹²⁰ 中国では柳の花は、不道徳で淫らな楽しみを意味する。

¹²¹ 客に妓女の愛を信じ込ませるために演じる古典的な演技には次のようなものがある。嘔泣きすること、客の名を刺青にすること、結婚の話をする、自殺の話をする、客と逃げる話をする、髪の毛の束を交換すること、そして誓いの言葉を交わすこと。

¹²² 古典的な八種の技法。

朝まで聞こえました。

キョウは、風に揺れる木々の葉、そして鳥たちに提供された枝のようでした。朝はソン・ユー（宋玉）に別れの言葉を言い、晩はチャン・キン（長卿）に迎えの言葉を言いました¹²³。

けれど、酔いと夜の気配から覚める度に、現実が彼女を襲いました。自分のことを考えると、自らの運命に打ちのめされるようでした。かつては絹と金欄に囲まれていたのに、今では道の真ん中で踏みつけられる花のように萎れていく。どうしてこんな風になったのでしょうか。どうしてこの顔が風塵にまみれ、この身が蜂や蝶を呼ぶのでしょうか。キョウは雨のツォー（楚）へ、雲のツィン（秦）¹²⁴へと酔客の愛撫に差し出されましたが、愛情の甘さなど感じようもありません。

月光に照らされた雪の山並みを眺めたり、そよ風の中で花と遊ぶこともありました。けれど、景色は哀愁をもたらすばかり。人は、本当に悲しい時には、景色を見ても陽気になることはないのでしょうか。月明かりの下で絵を描いてみたり、詩を作ってみたり。花の下では胡琴を弾いてみたり、象棋を指したりして、時を過ごすこともありました。

けれど、いくら明るく振る舞っていても、キョウを理解し心を同じくする真の友は得られたのでしょうか。竹林を吹き抜ける風の詩も、梅林を濡らす雨の詩も、もはやキョウの心を動かすことはできませんでした。自分の人生に投げかけら

¹²³ 中国の物語の中で、これらの人物は数多くの恋愛と華麗さで知られる。（和訳者注：ソン・ユー（宋玉）は戦国時代末期の楚の文人で、代表作は「九弁」、「高唐の賦」、「神女賦」。チャン・キン（長卿）は前漢時代の文人・司馬相如（脚注 66 参照）の字（あざな）で、代表作は「子虚賦」、「上林賦」、「長門賦」）

¹²⁴ ツォー（楚）は現在の湖北省に、ツィン（秦）は陝西省に概ね相当する。「雨と雲」は情交を指す表現。

れたいくつもの出来事で、彼女の頭はいつも一杯だったから
です。一人の時には思い出が甦り、自分の人生の過去と現在
に深く思い悩むのでした。もう日々は単調で何事も起こりま
せんでしたが、彼女の頭の中は常に混乱していました。もう
打ち据える者は誰もいませんでしたが、彼女は深く傷つけら
れているような感じがしていました。

それにしても、険しい道の向こう、遥か山河の彼方で、こ
んなにも深く転落してしまった娘のことなど、どうしてあの
両親に想像できるでしょう。

ああ 九つの務め¹²⁵の恩恵を
与えてくれた 優しい両親
あなた方の命は日一日と
夕暮れの桑の木の影のように
次第に衰えていくのでしょうか

槐の木の庭¹²⁶に残された
若く純真な二人の弟妹
年老いて寂しい両親に
甘くて美味しいものを
優しく勧めてくれているのは
どちらでしょう

キョウは、愛する人と交わした厳粛な誓いを思いました。

¹²⁵ 脚注 77 参照。

¹²⁶ 槐の庭とは一緒に育った兄弟を指す。北宋の時代のこと、ワン・イオウ（王佑）という名の男が、庭に三本の槐が植えたことに由来する。彼の三人の息子は皆、朝廷で高官を務めた。この表現は幸せな子孫を指す。

「あんなに遠く離れた国に行ってしまった彼は、私が何を思
ってきたかを知ることがあるだろうか。彼が帰ってきた時に
は、チャンタイ（章台）の柳¹²⁷のような恋人のことを懐かし
み、若々しい枝が折られていないか、何度も持ち手を変えて
いないか確かめようと、きっと様子を尋ねてくれたのだろう。
ああ、永遠の貞節で深い愛情を取り戻せるなら、どんなにか
いいのに。今頃、私の選んだ妹は、花のように、私の愛の木
に付いてくれたかしら¹²⁸」

キョウの思いの糸は、時の流れと共にますますもつれ、故郷
の慣れ親しんだ風景が、長い夜の夢の中で彼女につきまとう
のでした。

異国の空の下、絹の窓掛けの奥にいて、キョウは本当に孤独
でした。黄金色に暮れた日は、また次の黄金色の薄明かりへ
と引き継がれ、銀色の月の兎と金色の太陽の鳥¹²⁹が交互に昇
っては沈む。

キョウは自分のこと、同じように惨めな仲間たちのことを
考えながら、悲しく呟きました。

「それにしても、天の御心とは何と理解できないものだろう。
天は自ら娘たちに美を与えておきながら、後にその些細な取
り柄を咎め、娘たちに破滅と破壊の極みを味わわせている。
そして私も、この風塵にまみれた世界に追いやられてもなお、
天の慈悲を得られるまでは、さらに恥辱の盃を飲み重ねねば
ならないとは」

¹²⁷ 唐の時代の詩に由来する。詩人ハン・ホン（韓翃）は、リュウ（柳）という名の恋人に宛てた詩の中で、かつては緑だったチャンタイ（章台）の柳が誰かの手によって枝から折られていないかどうかを尋ねた。（和訳者注：唐代の伝奇「柳氏伝」許堯佐撰）

¹²⁸ 「妹トゥイ・ヴァンは、私が頼んだ通り、キム・チョンと結婚してくれたかしら」

¹²⁹ 脚注 16 と 17 参照。

第11章 キョウとトゥック
(1275行～1384行)

そうしたある日のこと。キョウの所にトゥック・キ・タム（東其心）という名の旅商人が客として現れました。その若者は、チャンチョウ（常州）の町ウーシー（無錫）¹³⁰出身の文人の家系の出でした。

トゥックは、厳格な父親と共にリンツー（臨淄）に来て商売を始めていましたが、この町の花の女王の評判に惹かれて青楼に出かけ、芳香漂うキョウの部屋に薔薇色の名刺¹³¹を贈りました。彼は、羅紗の仕切布の奥で、桃の花のようなキョウと顔を合わせるやいなや、彼女の愛らしい仕種や容貌にすっかり夢中になってしまいました。キョウの魅力は輝きに満ちた若い椿の枝に似て、風雨に打たれながらも、この春のような恋にさらに甘い輝きを増していきました。二人の心は、花を照らす月、月光を浴びる花のように通じ合いました。そのような春の夜に、情を抑えることのできる恋人などいるでしょうか。抑えられなくて当たり前です。青楼で出会ったからといって、彼らの心の絆を本物でないなどと、誰が言えるでしょう。二人の魂に結ばれたこの絆を、誰が断ち切れるというのでしょうか。

出会ってからは、朝には桃を夕べには李を交換するように彼らは会い続けました。月光かそよ風のように軽やかに始まった二人の恋は、やがて石や金のような重みを持つ愛へと変わっていきました。

¹³⁰ 上海と南京の間に位置する江蘇省の町。

¹³¹ 招待状あるいは名刺用の正式な色。

天も、この密かな愛を応援したのでしょうか。二人にとって思いがけず幸せな機会がやってきました。トゥックの父親が仕事の関係で故郷に戻らねばならなくなったのです。その間、もう若いトゥックを押し止める者もなく、愛は十倍にも膨らみました。彼は春の日の大半を愛する気持ちの向くままに過ごしました。出窓でそよ風を楽しみ、時には軒先に座って空の明るい月を眺め、仙人の美酒を味わい、詩編の穴を埋める言い当て遊びをしたりして、二人だけの時間を存分に過ごしました。

明け方の新鮮な空気を胸に吸ったり、真昼のお茶の香りを楽しんだりしながら、二人は幾度肩を寄せ合って座ったことか。胡琴の演奏や象棋指しも、この二人だけの時間を彩りました。歓びを求めること以外に、二人を悩ますものはなく、互いを知れば知るほど、二人の気持ちはより温かなものとなりました。この少女は何という美しさ。本当に都市を滅ぼし、建物を倒壊させ、宮殿をぐらつかせることもできたでしょう。トゥックは、金を湯水のように使うようになりました。彼にとって金なぞ何の価値もないかのように、ただキョウに微笑んでもらうためだけに、何百両も何千両も使いました。

青楼の主人トゥー・バーは、価値ある寄宿人にさらなる注意を向け出しました。貪欲な老婆にとって、銭の臭いより惹かれるものなどあるのでしょうか。

月光の夜に郭公の鳴き声上がり、夏の到来が告げられると、壁際では燃えるように赤い柘榴の花が咲き始めました。

仕事の合間に部屋で香り風呂を浴びるキョウの影は、薄薔薇色の紗の暖簾を通して、完璧な彫像のように神々しく、翡翠か象牙のような白さで浮かび上がるのでした。

愛する人のことを深く知るにつれて、尊敬の気持ちを次第に強く抱くようになったトゥックは、若者らしく自分の気持ちを胸の内に留め置くことができず、キョウのためにズオン（唐）韻律¹³²の詩を即興で詠みました。

「私の若い旦那様、お気持ちはよく分かります」

キョウは言いました。

「あなたのお言葉は真珠か翡翠のよう、あなたの詩は豪華な金欄のようです。私も続く詩を詠むべきなのに、故郷の想いで心が乱れます。私の魂は、金色のちぎれ雲に乗って遙か彼方を彷徨っているのです。ですから今は、返歌¹³³をお許し下さい」

「どういうことですか。あなたはこの館の木の枝ではないのですか¹³⁴」

トゥックが尋ねると、キョウは暗く沈み込みました。現在の運命に思い至り、悲しみを隠すことができません。

キョウは答えました。

「私は枝から引きちぎられた花のようなもの。あなたは楽しみに花の周りを羽ばたく蝶のようなもの。その上、あなたには青春を共に過ごすべき奥様がいらっしゃいます。さあ、日は短いのです。どうして私とのつまらない長話で時を無駄にするのでしょうか」

トゥックは言いました。

「初めて知り合ってから真剣に永遠の愛の想いを心に抱き、結婚を考えてきました。ですから、私は愛の川の源を尋ね、

その深さを測らねばならないのです¹³⁵」

キョウは答えました。

「優しいお心、本当に有り難うございます。でも、もしあなたが私と結婚し、私があなたと共に歩み始めることになれば、二人の上に災いが降りかかってくるのではないのでしょうか。一つには、私がここピンカン（平康）¹³⁶の歓楽の場に長く暮らしている者だということです。私を愛することは、実は偽りの輝きに包まれた花を愛することなのです。この化粧が色褪せ、香水の香りが飛んでしまった後でも、あなたのお心は変わらないのでしょうか。

もう一つは、桂樹の露台と月の宮殿を司る妖精ハン・ガー（姮娥）がそこにおいでになるということです¹³⁷。あなたと奥様は結婚という絆で長く結ばれています。もし別の女が割り込めば、あなたは愛を分割しなくてはならなくなるでしょう。私は取るに足りない青浮き草。あなたは偶然通りかかった雲に過ぎません。そのようなものに過度の関心を示し、どうして夫婦の關係に波風を立てねばならないのですか。きっと問題が生じるでしょう。将来、天罰が下った時、誰がその罰を受けるのでしょうか。私の若い旦那様、あなたに十分な力があるのなら、私をほんの少しは護って下さるでしょう。もし妻が夫より横柄ならば、つる草のようにか弱い私は獅子の口元に置かれるようなもの。わたしはあなたの方の家に留まり、召使いのように這いつくばらねばならなくなるのです。もし

¹³² 漢詩の一種で七言八句からなる律詩のこと。

¹³³ 中国とベトナムにおいて、かつて知識層によって行われた遊び。この遊びは、別の人による詩の返答で、同形式同リズムの詩を即興で詠む。

¹³⁴ 「あなたはこの館の経営者の娘ではないのですか」

¹³⁵ 「だから私は、あなたの出自について尋ねなければならないのです」

¹³⁶ 陝西省西安（長安）の街で、かつて青樓の街として知られた。

¹³⁷ ここでキョウは、トゥックが既婚者であることを仄めかした。

そうだったならば、配偶者の辛辣な嫉妬は、竈の火より三倍も残酷なものとなるでしょう。

それに、あなたにはお父様がいらっしゃいます。お父様が私の運命を素直に憐れまれるのかどうか、私には分かりません。お父様は私のことをどう考えられるでしょう。道端に生えた柳、それとも壁に咲いた花でしょうか。私が青楼の妓女なので、愚かさを露呈して評判を落すよう、私を青楼に送り返すかも知れません。でも私は、あなたの評判が落ちる方が気懸かりです。ですから、私たちの愛がもとで何か問題が起こったりしないように注意して下さい。

それでもなお、あなたがあらゆる段取りを済ませて下さるといふのなら、その時は、あなたに付いて行きましょう」

トゥックは言いました。
「何と用心深い人なんだ。私たち二人は、お互いまだ信頼し合えていないのでしょうか。愛する人よ、何も恐れなくて下さい。ウー（呉）やラオ（ラオス）まで行こうというのではありません。どんな時でも私を、私だけを頼りにして下さい。差し迫ってもいない障害を心に描くには、もうすでに私たちは親しくなり過ぎました。あなたと結婚できたならば、この愛を守るために、私は必ずや暴風雨にも立ち向かうことを誓いましょう」

誓いの証人として山河を呼びながら、厳粛にして明確なこの愛の誓いを交わした若い二人は、お互いを安心させようと、様々なことを何度も何度も語り合いました。二人が、互いの胸の奥の燃え上がる気持ちを言い尽くすには、その夜は短過ぎるようでした。

西の空では、銀色の月の兎¹³⁸がその明るい鏡を山並みの背後に隠し始めました。トゥックは、竹造りの東屋で新鮮な空気を楽しみに出かける振りをしてキョウを連れ出し、安全な場所に一旦かくまいました。

それからトゥックは、愛する人をこの恥辱の館から救出す方法として、力による策と平和的な策の二つの解決策を計画し、周到に準備をして老婆トゥー・バーにこの件を知らせるよう仲介者に依頼しました。

出し抜かれた邪悪な老婆は、平和的な解決策を選びました。抵抗してどうなるというのでしょうか。請求額は滞りなく彼女に手渡されました。キョウの完済証が作成され、当局に提出されました。全ては法に則り、また当事者間の合意に基づき解決されました。

キョウは今、風塵と悲惨に満ちた世界から逃れることに成功して、本当に仙人のような自由の身となりました。

竹と梅の木¹³⁹のように仲睦まじい新しい生活が始まると、新たな絆がさらに二人を結びつけました。それは、海のように深い感謝の絆、そして川のように尽きることのない愛の絆でした。今やその愛の炎は、香が燃え立つほどに勢いを強めました。翡翠はその輝きを増し、蓮の花は絶えず仄かな香りを放ちました。

¹³⁸ 脚注 16 参照。

¹³⁹ 脚注 109 参照。

第12章 善良な役人
(1385行～1472行)

二人だけの素晴らしい愛の暮らしが始まって半年が過ぎました。中庭では、木々の枝の緑に黄色い葉が混じってきました。トゥックの父親が馬上の長旅から戻ってきた時には、秋の葉を落した垣根から、もう新春に備えた新芽が萌えようとしていました。

老人が自分の不在中に何が起こったのかを知った時の怒りを、どのように言い表せましょう。息子の行為がもたらすであろう結末を心配し、老人は恋人たちを別れさせることを企て、この解決策を直ちに若者に通告しました。老人は、化粧したその女をもとの青楼に送り返すよう、息子に命じたのです。

この断固とした命令に対し、トゥックは勇気を振り絞り、父親に嘆願しました。

「お父さん。自分が悪いことは分かっていますから、どのような罰でも受けるつもりです。すでに藍色に染まってしまった手で、馬鹿な行いをした後で、どうして私が再び賢くなれるでしょう。私たちは一緒に暮らし始めたばかりなのに、どうして残酷にも手にした琴の弦を切ることができるでしょう。寛大なお父さんでも私たちに憐れみを持たないというのなら、いいでしょう、黒か白か決めて下さい。私は自分の人生に悔いはありません」

息子の強情を目の当たりにして老人は我慢がなくなり、役所に赴き告訴しました。

地方長官はその話を聞いて激怒しました。尋問のため直ちに頭出るよう命じる赤紙を受け取った恋人たちは、護衛に

従って役所に出頭し、中庭でひれ伏しました。二人が顔を上げると、目の前には裁判官の鉄のように黒い顔¹⁴⁰がありました。

長官は権威を示す仕種をした後、命令口調でトゥックに声を掛けました。

「そこの若者。お前は全くもって素行の悪い酒飲みのようだ。そしてそこの娘。お前は性悪女か。萎れた花か、香水の残りかすでしかないのに、世間知らずの人間を騙そうと化粧している身なのに、どうして自分に、このような若者と釣り合う価値があるなどと考えることができたのか。さて、告訴人の訴状によると、お前たちの状況はかなり複雑なものとなっている。そこで、私は事案を公明正大に吟味して二つの解決策を提示するので、お前はそのどちらかを選ぶように。一つは法に定められた罰を受けること、もう一つは直ちに青楼に戻ることである」

キョウは答えました。

「私の心はもう決まっております。青楼に戻されれば、自分自身の蜘蛛の巣に、これからあと何回、捕らえられるがままになっていなければならないのでしょうか¹⁴¹。それを思えば清純であろうと、汚れていようと、肉体はやはり肉体です。若くて弱い私ですが、厳しい罰をお受けすることと致します」

「法に則り折檻を執行」

長官が命じると、役人たちはこの儂い芍薬の枝¹⁴²のようなキョウをむち打つ折檻の道具として、三本の束ねた棒を使い

¹⁴⁰ 厳格な人間を指す表現。

¹⁴¹ 「あと何人の男に自分の体を許さなければならないのか」

¹⁴² 若く美しい娘を指す。

ました。運命に身を任せたキョウは、この冤罪に抗議する言葉は一切口にしませんでした。しかし、桃のような頬は青ざめ、細い眉はゆがみ、その自然な美しさを失うのが見て取れました。土埃の立つ裁きの庭に横たえられたキョウは、曇った鏡のようにのたくり、彼女の細い身はさらに細く見えました。少し離れて控えさせられていた若いトゥックは、愛する人の苦しみに酷く怯えずにはられませんでした。

彼は悲痛に悔やみました。

「おお、何という酷い冤罪。彼女がこんな目に遭うのは、全ては私が犯した間違いなのに。彼女の言うことを聞いていたら、こんな災難は起こらなかった。でも私は余りにのぼせ上がり過ぎて、こんな結末が訪れるなんて考えもつかなかった」

綿々と呟く後悔の言葉が長官の耳に届きました。心を動かされた長官は、若者を傍らに呼び寄せ、落ち着かせようと努めました。

トゥックはすすり泣きながら、少女との関わりを最初から話して告白しました。

「彼女は自分の身に何が起こり得るのかを知っていました。初めからこうなるのを危惧していたのです。全責任は私一人にあります。今彼女の身に起こっていること全ては、私自身の思慮のなさによるものなのです」

その言葉を聞いて、長官は若い男女に心からの憐れみを感じました。長官は厳格さを緩め、トゥックにこの紛糾事案の解決策について提案しました。

「よろしい。もしお前が言ったことが本当なら、この娘はふしだらな暮らしをしてはいるが、真実と偽りを区別する術を心得ていることになる」

トゥックは言いました。

「彼女はみすぼらしい青浮き草ですが¹⁴³、彼女の筆は、それは本当に賞賛に値するものです」

長官は微笑みながら言いました。

「本当か。それでは、その才能を証明するために「首かせ」という題で彼女に何か書かせなさい」

キョウは、命じられるままに筆を取って半紙に即興詩を認め、その花のような紙を差し出しました。

「この詩はタン（唐）の時代に詠まれた詩よりも美しい」

長官は声高に褒めました。

「何という才能。何という優雅さ。この才能と優雅さがあるなら、彼女には千金の価値があり、息子さんの相手としても相応しいはず。彼女は本当に有能でしかも美しい。相性の良い者同士が結ばれる村チョウチャン（朱陳）¹⁴⁴においてさえ、この二人ほど相性の良い男女はいなかったに違いない。ご老人、こちらに來なさい。そんなに厳格にならず、怒りを静められるように。どうしてこの二人の間の調和を乱し、美しい琴の調べを妨害しようとなさるのか。あなたは彼らを法の裁きの前に引き連れてきたので、私は法に則り話をすべきなのだが、今回は人間の心情に沿った判決を適用しようと思う。息子さんも義理の娘も、今からは、あなたの家族の一員と考えるべきです。さあ、仲違いの動機を横に置いて、これで全てが解決としようではないか」

¹⁴³ 「彼女はみすぼらしい条件下にはいるが」

¹⁴⁴ チョウチャン（朱陳）という中国の村の名前。この村の住人は、同じ村のチョウ（朱）、チャン（陳）という名字の人とのみ結婚することに同意したと言われる。



Nàng vâng cất bút tay đề,

命めいじられるままに筆ふでを取とって半紙はんしに即興詩そっきょうしを認したため、...

それから長官は、若い二人のための婚礼を直ちに準備するよう命じました。まもなく花で飾られた御輿が、役所の方角から風のような勢いで現れました。かがり火が灯され、暗がりの中、まるで赤色星雲のように輝きました。御輿に先行するのは、笛と太鼓を賑やかに吹き鳴らす楽隊でした。結婚した二人が薔薇色の窓掛けの部屋に入るまで、結婚を祝福する人々が付き添いました。

キョウの徳と才能を認めた老人は、もう怒りの言葉を再び口にすることはありませんでした。今、月下香と蘭の仄かな香りが再び家中を満たしました。若い夫婦は、苦悩の数日間の後に、以前にも増して愛し合うようになったのです。

第13章 トウクの旅立ち (1473行～1526行)

朝は美酒、昼は象棋と、楽しみにすっかり没頭していたため、二人共すでに始まりつつある季節の変化に気がつきませんでした。すでに赤い桃の花は落ち、初夏の緑の蓮の葉も出始めていました。ある澄み渡った夜、夫から離れ一人で佇んでいたキョウを突然の不安が襲いました。

キョウはそっと夫に囁きました。

「私がすっかりあなたのものとなってから、いつしか燕は去り雁に道を譲りました。丸一年が過ぎたのです。このところ、あなたのご家族からの便りは次第に間遠くなっているようです。妾を愛し過ぎて、あなたは米なき日の妻¹⁴⁵を無視してきてしまいました。旦那様、思い出して下さい。全てのことには必ず結果が伴うものだというのを。無分別なことがなされた場合、誰が私たちを守ってくれるでしょう。あなたの家を守っている配偶者は、規律に忠実に従って振る舞い、道徳に厳正に従って話をする女性であるということを、私は噂で聞いています。私は並以上の魂を持つ人を恐れます。川の深さを測るよりも、海の底を測る方がずっと容易な場合もあるのです。私たちはもう一年間も一緒に暮らしているのですから、私たちのことをずっと秘密にしておくことはできません。あなたの奥様からは、今日まで何の知らせもありません。彼女はきっと何かを考えています。おお、私の若い旦那様。できるだけ早く家に帰ることを考えて下さい。あなたの奥様を喜

¹⁴⁵ 正妻を指す。正妻は夫の栄枯盛衰を共有する心の準備ができた唯一の人。(和訳者注：後漢書・宗弘伝「糟糠の妻」)

ばすためだけではなく、これから起ころうとしていることを知るためにも。どうして私たちの愛を不誠実にも奥様に隠し続けるのですか。結末がいつまでも来ないかのように、どうして必要な説明を先延ばししようとなさるのですか」

この心温まる率直な忠告を受けて、トゥックはついに決心し、故郷に帰る支度を始めました。翌朝早く、彼はその決心を父親に告げ、老人もその旅を急ぐよう促しました。

まもなく、国境と河を越えて行く彼のために、送別の晩餐会が催されました。つい最近までは春の東屋で共に盃を交わしていたのに、今二人は別れの峠カオディン（皋亭）¹⁴⁶に差ししかかっています。目の前にはツィン（秦）河¹⁴⁷が青く細い帯を広げ、河の両岸にはズウンクエン（陽関）の丘¹⁴⁸の僅かばかりのポプラと同じように、柳の木がまばらに生えています。二人は手を取って見つめ合い、悲しそうに溜め息をつきました。盃を交わした後の別れの悲しみが、二人の心にまだとても重く残っているのです。彼らの言葉は喉につかえているようでした。

キョウは言いました。

「遙か遠くの山々と深い河が私たちを引き離そうしています。私の旦那樣、奥様を満足させるようにお努め下さい。その行いによつてのみ、あなたの妻が平和に暮らせるのです。針子の目から小さな針の穴を隠すより、同じような体つきの人から目立つ深紅の肌着を隠す方が容易な場合もあります。目隠しして鳥を捕まえるような遊びに興じてはいけません。

¹⁴⁶ 浙江省にある山で、漢詩では旅人の別れの場所として引用される。

¹⁴⁷ 漢詩において別れの場所として引用される河。

¹⁴⁸ 「ポプラの丘」とも呼ばれる有名な丘。（和訳者注：ズウンクエン（陽関）は甘肅省敦煌の西南にあり、敦煌西北の玉門関とともに、西域に行く際に通過した）

私たちの愛は東の間の愛でしかありません。どうか、お家に着いたらすぐに、私たちの間に起こったことの全てを奥様に説明して下さい。それで夫婦の間に波風が立つのなら、あなたの奥様には奥様だけの特別の位を持たせて下さい。私は、彼女が私のために用意する運命に、心から身を任せることとします。そうすることは、わたしがしてきた交際、そして将来計り知れない問題を引き起こすかも知れない関係を隠し続けるよりもましでしょう。一年は長いけれど想像以上に長いものでもありません。私の若い旦那様、今日一緒に飲み干したお別れの盃のことを忘れて下さい。そして一年後の今日、あなたの無事のお帰りを祝ってまた盃を交わしましょう」

衣装から襟が引き剥がされるように¹⁴⁹、トゥックは鞍に跨り、キョウは彼から離れました。遠く秋の陽光を浴びた楓の森は、別れの悲しみに彩られているかのように見えました。馬上の人の姿は舞い上がる土埃の中に薄れ、桑畑の緑の遙かな広がりの向こうに消えていきました。

家に戻ったキョウは、これからの長い夜をまた一人で過ごすことになったのです。一方のトゥックは、長旅の途上で一人馬を進めていました。

空の高みに月は浮かび
月光の半分を一人ぼっこの枕に
残りの半分を長旅の道へと
振り分けさせたのは誰でしょう

¹⁴⁹ 夫と妻は、しばしば縫い合わされた襟と衣装に喩えられる。

第14章 意地悪な妻
(1527行～1626行)

トゥックが長旅で巡り会った危難についてここで述べたと
して、何の役に立つでしょう。それよりも彼の正妻、彼の家を
支配している女性について話をしましょう。

ホアン・トゥー（宦姐）は、内務大臣の娘として生まれま
した。テン（藤）王の楼閣に吹き寄せたような追い風¹⁵⁰を受け
て、彼女は何年も前からトゥックの髪と自分の髪を結び、縁結
びの糸¹⁵¹で結ばれていました。ホアン・トゥーの立ち居振る舞
いには後ろ指を指されることは何もなく、彼女の主張は常に
正しいものであると言わざるを得ません。

ホアン・トゥーが夫婦の間の庭に別の花が咲き始めたこと
を初めて知らされて以来、たくさんの人々がこのことを彼女
に告げに来ました。しかし、夫からは何の知らせも受け取っ
ていませんでした。

ホアン・トゥーにとって本当に不思議に感じたことは、嫉妬
の火とは抑えようとすればするほど、新たに嫉妬の炎が燃え
立つ、ということでした。

彼女は怒りに震えて呟きました。

「何という移り気、何という気まぐれ。もし彼が私に全てを
告白してくれていたら、私だって雅量を示し、女を囲った夫

¹⁵⁰ ウェン・ポウ（王勃）という詩人のはしけを、テン（藤）王が建てた藤王閣の方
に風が吹き寄せたという故事からの引用。ウェン・ポウは、藤王閣で行われた式
典の折、詩作会に参加し「藤王閣序」を詠み優勝した。詩作会の後、彼は都督か
ら大いに評価され、都督の娘を嫁にもらうことができた。

¹⁵¹ 「髪の毛を誰かと結びあうこと」あるいは「縁結びの糸で誰かと結ばれること」
とは、その者と結婚することである。脚注 52 参照。

を許すこともできたでしょうに。私は良き伝統を壊すほど
狭量ではなく、つまらぬ嫉妬で評判を落すほど愚かでもない。
でも夫は自分の悪事を隠し続けている。何と馬鹿げた幼稚さ。
きっと、こんなに遠くにいるから私の耳には何も届かないと
でも思っているのだろう。彼らは私に隠し続ける魂胆。それ
ならば、私も秘密裏に仕返し計画を立てることにしよう。
けれど、本当に実行するなんて、怖ろしいことではなかろう
か。まさか。こんなにも些細な仕返しではないか。蟻たちは
まだ器の中において、遠くまで行くことはない。あの二人が
生意気にも見つめ合うことなどできないようにしてやる。あ
の小娘を頭も上げられないような低い身分に突き落してや
る。私の許しも得ずに、板を選ぶ前に船を売ろうとしている
¹⁵²彼を懲らしめるため、私の力を思い知らせてやる」

復讐の計画は慎重に伏せられていたので、彼女の心のなか
を知る者は誰もいませんでした。彼女も、巷で聞こえる噂話に
耳を貸しているようなそぶりは見せませんでした。

ある時、褒美を期待した女が二人、巷で囁かれている噂を
耳打ちしにやってくると、ホアン・トゥーの抑えていた怒りは
とうとう爆発してしまいました。

「私の夫は他の男とは違うのに、私を煽り立てるようなで
たらめな話をする人は許せない。こんな噂を流す人は、自分が
何を言っているのかわからない人に違いない」

彼女は使用人に命じ、噂を持ち込んだ女の一人の両耳を殴
り、もう一人の歯をへし折らせてしまいました。この厳しい

¹⁵² 「板を選ぶ前に船を売るな」という諺は、「羽化する前に鶏の数を数えるな」と
いう諺と同義。ここでホアン・トゥーが言わんとしたことは、「私の同意もなしに
妾を囲おうとしている彼を懲らしめるため、二人を引き合わせてやる」

処罰の後、彼女の家の周囲では、トゥックの浮気について口にする人はもう誰もいなくなりました。

彼女は薔薇色の窓掛けの部屋の中で、何事もないように笑い、話しながら、普段通りに過ごしていました。しかし心の中は、夜も昼も怒りで煮えたぎっていたのです。

ついにトゥックが家に到着しました。彼は薔薇色の部屋が待つ家の前で馬から降りました。長い留守の後の嬉しいはずの帰宅に際して、夫とその妻の気持ちをどのように描けましょう。寒暖をいかに耐え忍んだのか¹⁵³と交わされる挨拶の言葉には、以前にも増して互いへの慈しみの心がこもり、愛は熱烈になったかのようでした。二人は帰宅を祝って、上機嫌でご馳走を頂きました。しかし本心は、ああ。本当はどうなっているのか、誰にも分かりませんでした。

妻の胸の奥を散々探ろうとした後で、ついにトゥックは事情を明かす覚悟をしました。しかし、ホアン・トゥーの方は、何度も急に笑ったり話し掛けたりして、夫に話を切り出させません。妻の言葉からは、夫の浮気に関する僅かな疑惑さえも仄めかされません。トゥックは心の中で安堵しました。

「瓶の栓はよく閉まっているようだ。尋ねられもしないのに、どうして進んで告白しなければならぬのだろう」

告白しようかすまいかを計り続け、結局蔓を引いたがために森全体を揺さぶることのないようにと、沈黙を保つことに決めました。

毎日の二人の楽しい会話や冗談の合間などで、時に妻は、それとなく真面目な言葉を織り交ぜることがありました。

「私たちは、翡翠と石、金と銅の見分け方を心得ていて、完全に信頼し合っています。けれど、蜂や蝶¹⁵⁴のような、男女に関わるでたらめな話に関心を持つ人も多いものです。私はそのような人たちと一緒に、愚かな女の浅はかな振る舞いをするつもりはありません。それとも、たとえみんなの笑い種とされても、やはり疑いを持ってみるべきでしょうか」

これらの真剣に尋ねる言葉を聞いても、若い夫の方は、冗談と取る振りをして、話がややこしくならぬよう問題をそらしては雑談に入り、話をはぐらかす時の妻と同じような調子で答えるのでした。

夫は戯けて妻に言い寄り、夜遅くまで燭のそばで影を重ねたり、満月の下で肩を並べて散歩をしたりしながら、二人は一緒に時間を過ごしました。

まもなくトゥックは、故郷ウーシー（無錫）の甘い生活が、馴染みの野菜から特産の淡水魚ブリーム¹⁵⁵に至るまで、どれもこれも気に入りはじめました。しかし、黄金色の篠懸の木がすでに葉を井戸に落とし始め、彼に湖と河の向こうの楽しい情景を思い起こさせることになりました。爽やかな風と甘い月光を楽しみながら幸せな季節を過ごした、遙かな異郷リゾート（臨淄）の情景が、彼の心に取り付き始めました。けれどもトゥックは、自分の胸の内を敢えて妻に打ち明けることができません。

若い妻の方は、夫の心の中で何が進んでいるのか、十分過ぎるほど理解していました。

彼女は何気なく仄めかしました。

¹⁵³ 脚注 56 参照。

¹⁵⁴ 脚注 11 参照。

¹⁵⁵ コイ科アブラミス亜科の淡水魚。

「あなた。遙か異郷にいらっしゃる白髪のお父様から離れて、もう一年が経ちました。お父様は日夜あなたのお世話を必要としているでしょうから、リンツー（臨淄）に帰る支度をしなければなりませんね」

この言葉を聞いて、トゥックは心にのしかかっていた重い荷物から解放されました。彼は支度を急ぎ、山河の向こう、あの異郷の地に向けて出発しました。道中、水はとても澄み、川底が天空を映して輝いていました。行く手には、青い煙がたなびくように城壁がどこまでも続き、さらに向こうの山並みの黄色い斜面には、陽光が照りつけていました。

夫が鞭を振るって立ち去ると、ホアン・トゥーは、直ちに香を焚き込めた馬車に乗り込み、両親の家に向けて出発しました。

彼女は、夫がいかに恩知らずな振る舞いをしているか、そして自分がいかに不幸か、母親に全てを打ち明けました。

「皮膚の痒みのように心を焼き尽くす嫉妬の発作に、正妻である私が身を委ねれば、夫にとっては不名誉なことで、私も誰からも褒められません。だから今まで、この問題から目を背け、無関心を装うより仕方がありませんでした。けれど、長い間考え続けて、全ての懸念が解決できる素晴らしい計略を思いつきました。リンツー（臨淄）に陸路で行くには少なくとも一月かかりますが、海路で直行すれば¹⁵⁶旅程はかなり短くなります。帆掛船を仕立て、使用人を何人か選ぶつもりです。彼らを向こうに送り込み、あの女の両足を鎖で繋ぎ私の

家に連れてきます。彼女がすっかり疲れ果てて、正気を失えばいい。彼女が苦痛を味わい、惨めな状態に落ちぶればいい。あの二人を、まず私の憎しみで満たしてやりたい、そしてみんなの笑い者にしてやりたい」

身分の高い老婦人は、そのような悪辣な計略を思いついた自分の娘を何ら諫めもせず、それどころか望む通りに行動するよう励ましたのでした。

帆掛船が、唸りを上げて吹く風が素早く流れる雲のように水面を滑るようと、念入りに帆と張り綱の支度が始まりしました。クエン（犬）とウン（鷹）という二人の使用人が、悪事を働く賊として指名され、自分たちが何をなすべきか、完璧で正確な指示を受けました。まもなく船は風を受け、軽い葉のようにツイ（齊）¹⁵⁷の水に向けて走り出しました。

¹⁵⁶ ウーシー（無錫）からリンツー（臨淄）まで「海路で」という表現は、ツィナン（齊南）までは大運河を利用し、そこから諸水路と湖沼を渡ってリンツー（臨淄）に至る経路を指しているものと考えられる。

¹⁵⁷ 春秋戦国時代の王国で、山東省の一部を含む。

第15章 誘拐
(1627行～1706行)

トゥックが正妻の住む故郷ウーシー（無錫）に旅立ってから、キョウは窓掛けを引いた部屋で影のようにひっそりと暮らしていました。その日々は、これまでの彼女の絶え間ない悲しみの人生に、新たな気掛かりが加わったものでした。彼女は悲しく呟きました。

「老いた両親は、天辺にだけしか陽の当たらない桑の木のようなもの。二人が毎日を暖かく過ごしているのか、寒々と過ごしているのかさえ、今の私には分からない。まだ人生の甘さを味わえているのか、いないのか、どうしたら分かるだろう。かつてキムのために切った髪の毛も、今ではまた肩に届くまで伸びてきた」

ああ 山河を前に
何度も交わした二人の誓い
真っ赤な鉄のように
熱烈だった二人の愛
それなのに
儂い運命の妾となって
今では地を這う草のよう

「このトゥックとの縁だって、円や四角のように、いつまでも完全であり続けるのかと気に病んでしまう。それにしても、私の人生はどうしてこうなのだろう。ああ、何と哀れなこと。これから先の人生を考えると、むしろ月の冷たい宮殿で過ご

す佳人ハン・ガー（姮娥）のように、たった一人での一生を過ごしてみたい¹⁵⁸」

爽やかな風が薔薇色の窓掛けを通して優しく吹き込み、遠く空の天頂近くにはオリオンの三つ星と並んで、半月が明るく輝いている夜のことでした。キョウは線香を焚いて、庭の真ん中にある小さな祠に供え、祈りを捧げていました。

その願いを口に終えるやいなや、不意に残忍な顔つきの男たちが花影から飛び出し、悪霊のように叫び、唸り声を上げながら、薄暗い庭で抜刀した剣を光らせました。何が起こったのか分からずに立ちすくんでいるキョウを、突然睡眠薬の臭いが包んで、悪夢に満ちた深い眠りに沈ませました。男たちは、意識のないキョウを急いで外に運び出し、馬に乗せてから、家の寝室や書斎辺りに火を放ちました。

川岸にうち捨てられた人間の亡骸を偶然にも見つけた人さらいたちは、搜索の目を騙そうと、それを襲撃した家に運び入れ、燃えさかる部屋に投げ込みました。これが幸薄い女性の亡骸でないと誰が疑うでしょう。

この騒ぎの時、家の使用人たちは驚いて理性を失い、慌てふためいて各々勝手に藪や木陰に走って逃げました。息子の家からさほど遠からぬ所に住んでいたトゥックの父親も、使用人を伴って現場に駆けつけましたが、燃えさかる炎を見て狼狽してしまいました。数人で水を掛けて火を消そうとする一方、他の者は被災者の救出に当たり、至る所で言いようもないどよめきと混乱に陥りました。風が吹いて炎がより高く燃えさかる中、使用人たちは必死に搜索を続けましたが、

¹⁵⁸ 中国の伝説によると、月にはハン・ガー（姮娥）と呼ばれる美しい妖精が一人棲む広大な宮殿がある。

無駄でした。キョウの姿は消えてしまっていたのです。

皆すっかり当惑して顔を見合わせ、もう一度深い井戸や藪の中、家の周りをくまなく探し直しました。最後にやっと、香りの部屋として使われていた場所の燃えがらの中に、灰となった骨を見つけました。それは非道なごまかしでは、などと正直な人たちがどうして思いつくでしょう。疑うべくもなく、これはキョウの骨。別人の骨だなんて、誰も思いません。

老人は、遠く離れた息子のことを思い、この有徳の女性の運命を不憫に思って涙にむせびました。老人は遺骨を恭しく集めて家に持ち帰り、それを棺に納め、仏式の葬儀を執り行いました。

ウーシー（無錫）を発ったトゥックが、陸路の長旅を経て、キョウが待つはずのリンツ（臨淄）の家に到着した時には、キョウの葬儀はもう終わっていました。

彼は、かつて書斎として使っていた場所に足を踏み入れましたが、目の前には灰と炭の塊しか残されていませんでした。その周りは、陽光と雨で腐食した壁が立っただけでした。彼は父の家に向かいました。中央の部屋の真ん中には仏壇¹⁵⁹が据えられ、その上にはキョウの名前が書かれた位牌が置かれていました。おお、可哀想な愛する人。彼は祭壇の前で、胸の内を全て、彼女のために心に抱いていた愛を全て述べました。縁を結んだ愛の糸がトゥックの腸を捻じり、悲しみの炎が肝をあぶる。

彼は床に身を投げ、涙にむせんで嘆き続けました。

「おお、あの様な女性がどうして不当にも死ななければならなかったのだろう。私たちは竹と梅の木のように、きっと再び会えるはずだったのに。最後に別れた日が永遠の別れの日になるなんて、誰が信じられただろう」

彼女の死を悲しむほどに幸せな思い出が浮かび、思い出すほどに悲しみが深まる。ああ、そうした苦しみや悲しみを抑え、軽くすることは容易ではありません。

トゥックは、隣村にいたいそう賢い降霊術師のことを教えてもらいました。その降霊術師は、願掛け用の護符を焚くことで靈魂を呼び起こし、死後の世界の様子を見ることができるとのことでした。天国の三島や地獄の九泉¹⁶⁰を始め、至る所からの正確な情報を得ることができるとの噂。トゥックは直ぐに贈答品を手配してその降霊術師を訪ね、亡くなったキョウに会って話を聞くように頼みました。

降霊術師が清めの祭壇¹⁶¹の前に額ずくと、まもなく魂が肉体から離れて行きました¹⁶²。数分間が過ぎて線香が燃え尽きると、降霊術師は正気を取り戻し、得られた啓示を明確で間違いのないものとして述べ伝えました。

「彼女には会えませんでした、彼女の運命は分かりました。この人の不幸な人生はまだ続いていて、苦しみはまだなくなりません。前世の借りという重い業を背負っているのです、簡単には死ぬことが許されないのです。占いによると、彼女は今この時も、残酷な運命の犠牲となっている最中です。その消息はちょうど一年の後に、あなたにもたらされることになって

¹⁵⁹ 中国とベトナムの仏教を信仰する家庭では、人が亡くなると、葬儀用祭壇の後ろに故人のための小さな祭壇をしつらえる。仏壇の上の香は、慣例に則り少なくとも四十九日間焚き続けなければならない。

¹⁶⁰ 死後の世界（脚注18、94参照）。

¹⁶¹ 屋外に設置された祭壇。

¹⁶² この状態は恍惚と呼ばれる。伝えられるところでは、降霊術師は意識を失い、降霊の間は死者からの伝言を伝達するなど、何か外的な力の支配下で過ごす。

第16章 奴婢の仕事
(1707行～1790行)

います。不思議なことに、再び出会えたあなた方は、互に見つめ合いたいと願うのに、敢えて見つめ合うことはない、と占われています」

これらの言葉は、トゥックにはひどく馬鹿げて聞こえました。現世で再び死者と生きて会えるとは。キョウに何が起こったのかを知っている今、どうしてこんな言葉を信じることなどできるでしょう。トゥックは改めて失った花を悼み、過ぎ去った青春の日々を嘆くのでした。

「私には、あのような妖精に再び巡り会えるほどの取り柄はない。流れに落ちて、花はきっと永久に休める静かな場所を見つけたのだろう。それにしても彼女は、地獄のようだったこの人間の世界のことを、果たして今どのように思っているのだろう」

凶悪な計略に成功した後、クエンとウンゲは意識のないキョウを船に運び込み、帆を揚げ張り綱を締めた帆掛船でウーシー（無錫）に向けて舵を取りました。

到着すると、荷物を卸して直ちに官邸に出向き、自分たちの実行の証である、誘拐した女性を運び入れました。報告を済ませると、まだ昏睡状態のキョウは官邸から運び出され、一旦侍女の部屋に置かれました。

暫くして、キョウは深い黄梁の夢¹⁶³から目を覚ましましたが、まだ意識は朦朧としていて、梅林¹⁶⁴の中を漂っているようでした。彼女は驚いて周りを見回しました。

「ここは私の家ではない。この邸宅はどこなのだろう」
彼女が当惑の中まだ茫然としてしていると、給仕に来るよう、応接の間から彼女を呼ぶ声が上がりました。直ぐに数人の侍女がやってきて、彼女に急ぐよう促しました。哀れなキョウはすっかり驚き、侍女の後に付いて行きました。

そこは、入口に「天官家宰」と表示された広間で、日中な

¹⁶³ 熟睡。役人になる夢を見たロウ・セン（盧生）という名の男の伝説に由来する。ある日ロウ・センは、邯鄲（かんたん、河北省南部の町）への街道に行く途中の宿屋で休憩していた道士ルー・シエン（呂翁）と出会った。その時、宿屋の主人は黄梁（大粒で上等のあわ）の飯を炊いていた。その道士は、眠気を催したロウ・センに枕を貸した。ロウ・センは間もなく熟睡した。その間見た夢の中で、役人になったロウ・センは、昇任、左遷、流刑、宰相就任などを経て八十過ぎに亡くなった。夢から覚めると、黄梁はまだ炊きあがっていなかった。それ以来、彼は役人になることにうんざりした。（和訳者注：唐代の伝奇「枕中記」沈既濟撰）

¹⁶⁴ 隋の時代のこと、チャオ・セ・セウ（趙師雄）という名の男が、山上で仙女から勧められた酒を飲んだ後眠りに落ち、目を覚ますとそこは山上ではなく梅の木の間根元だったという伝説に由来する。（和訳者注：この山は広東省惠州にある羅浮山で梅の名所。仙女は梅の精、羅浮仙）

のに広間の両側には蠟燭が灯されていました。広間の中央では、老婦人が七宝¹⁶⁵を嵌め込んだ寝台に座っていました。老婦人は、根ほり葉ほりキョウを問い質し始めました。キョウは自分の身の上を正直に話しました。

しかし、キョウの期待とは裏腹に、老婦人は急に怒りを爆発させて叫びました。

「何という性悪女なのか。この女は大嘘つきで、逃げ出した侍女か、不貞の妻に違いない。顔は墓場の地鶏か猫のそれ。奇妙な対応は人と折り合えないことの証。侍女としてこの家に自分を売った癖に、よくも主の私を嘲り、傲慢に答えることができたものだ。ここには規律がある。さあ、向こうに行きなさい。私の厳しさを思い知らせてあげよう。この娘を棒で三十回叩きなさい」

「はい、奥様」
使用人たちは声を合わせて答えました。

この時、たとえキョウに百の口があったとしても、一言の言い訳も口にはできなかつたでしょう。使用人は竹刀に渾身の力を込めて哀れな女性を打ち据えました。どのような肉體ならその扱いに耐えられ、どのような勇氣ならその仕打ちに向き合えたでしょう。哀れにも彼女は、今では猛り狂った嵐の後の華奢な桃の小枝か李の枝のようでした。

残酷な老婦人は、キョウの名前をホア・ノー(花奴)に変え、奴婢として働かせました。キョウは他の侍女たちと同じ青い衣をまとい、侍女として暮らしました。過酷な労働はこの美しい女性の髪を荒らし、顔色を鉛色に変えました。しかし、

容貌など今のキョウにとって何の意味もありませんでした。

このような不遇の日々を過ごしていた時、キョウは邸宅の侍女長の目に留まりました。キョウの物腰や仕種の優雅さに感銘を受け、深い憐れみを感じた侍女長は、折に触れ、お茶に呼んだり菓を与えたりして、キョウに生きることへの関心を持てるような助言をしようと努めてくれました。

「人間の幸運、不運は前もって定まっているものだと思います。だから今のあなたは、天の定めの不運の前に葦か柳のように弱くて儂いのです。将来はより良い日々を過ごせるように努力して、やがて来るその時まで自分を大事にしてください。多分今あなたが被っている苦難は、前世のどこかであなたが犯した罪の報いを受けた結果なのでしょう。なぜなら、人が経験する不運とは、ただ理由もなしに生じるといえるはずだからです。ところで、この邸宅の中のあらゆる壁には、森の中の小さな泉のように耳があります。たとえここで古い知人に会ったとしても、その人のことを知らない振りをしなさい。思いもよらぬ嵐が起こってしまったら、弱くて儂い蜂か蟻のようなあなたが、自分の潔白をどうして証明できるでしょう」

この優しい言葉を聞いて、キョウの涙は溢れ出し、真珠のようにながらりと頬を伝い、流れ落ちました。

キョウは考えました。
「私はすでに風塵にまみれた世界に追放されてしまっている。それでも今現在の災難は、以前の倍も悪いもの。運命は私にとっても残酷。けれど不思議なのは、この紅の頬はそもそも天自らが授けたものなのに、なぜこれほどまでに繰り返し虐待されるのだろうか。でも、どうしても前世の借りを返し、罪

¹⁶⁵ 七宝、つまり七種の宝物とは、珊瑚、琥珀、螺鈿(らでん)、瑪瑙(めのう)、金または銀、真珠、そして水晶からなる。

を償わなければならないと定められているのなら、私はその償いに生涯を捧げよう。今の私は壊れた翡翠か萎れた花のようだけれど、償いに身を投じる自分にとって、そんなことはどうでもいいこと」

それからの彼女は、より良い日々の訪れを期待しながら、自分の運命に身を任せることに専念しました。ある朝、トゥックの若い妻が両親の元に立ち寄りしました。母親とその娘は何やら長いこと話し合ったようでした。

老婦人はキョウを呼び出して告げました。

「若いご婦人が侍女をもう一人必要としています。お前はちらのお宅に行き侍女として勤めなさい」

キョウは下された命令に従い、地獄に行くのか天国に行くのかも知らずに、新しい女主人に付き従って行きました。

朝と夕方は、来る日も来る日も若い婦人のために浴布や櫛を用意して過ごしました。その他に何ができるというのでしょうか。彼女は侍女ですから、侍女としての義務を果たさなければなりませんでした。

穏やかで澄み渡ったある夜のこと。ホアン・トゥーは思いついて、キョウに弦楽器か竹笛かを、できるのなら弾いてみるようにと言いました。キョウは素直に胡琴を取ると、調子を合わせて演奏を始めました。

何という調べでしょう。最初はむせび泣くような悲しい調べで始まった曲なのに、やがて清水が滴り落ちては弾け散るような軽やかな旋律へと移って行きました。本当に不思議に心に染み入る音色で、どんな聴き手をも酔わさずにはおかない演奏でした。

ホアン・トゥーもその素晴らしい才能には心を動かされ、

その時以来キョウに対する厳しさを幾分弱めずにはいられなくなっていました。

前の邸宅からこの見も知らぬ家へと、撮み出された虫けらのように連れてこられてからというもの、キョウの苦しみや悲しみを分かち合ってくれるのは、昼は自分の影、夜は自分の心だけになってしまいました。共に暮らして幸せだったリンツー（臨淄）の風景と、まだ諦め切れずにいるトゥックの面影が、時々心に浮かんできました。しかし、かの地との間にある幾重にも連なった山河の障壁のことを考えると、再会が果たされるとしても、それはきっと来世のことでしょう。

連れてこられた家から見上げる空は、白い雲ですっかりと覆われていました。キョウは遙か彼方の故郷の方角に目をやり、大切な自分の家ほどの辺りなのかと思いを馳せました。

月日は過ぎゆきました。彼女の周りでは大きな変化は起こらず、ある日突然に異郷の地にさらわれてきた彼女は、リンツー（臨淄）で何が起きたのか、知る由もありませんでした。

第17章 対面
(1791行～1884行)

愛する人の死を告げられて以来、トゥックはリンツー（臨淄）の誰もいない部屋に閉じこもり、連れ合いに捨てられた鴨のように悲しみに沈んで月日を過ごしました。遙か上方の三日月に愛する人の美しい眉を思い起こし、形見の化粧の品を目にしたり、部屋に漂う彼女の残り香に気づいたりすると、彼の悲しみは十倍にも膨れ上がるのでした。蓮の花は萎れ、菊の花が咲きました。彼にとって、憂鬱はどれほど長く、一日はどれほどに短く感じられことか。まして今や、冬はいつしかその席を春に譲り渡そうとしています。

降霊術師のお告げのように、トゥックは喪われた真実の愛を、本当にどこかで見つけ出すことなどあるのでしょうか。

「これは宿命なのだ」

トゥックは呟きました。胸を刺す想い出と後悔の念を鎮めようと努めていると、やがて生まれ故郷ウーシー（無錫）の懐かしい情景が彼の心に戻り始めました。望郷の思いにかられたトゥックは、故郷に帰ることにしました。

トゥックが故郷の家に到着すると、すでに妻は歓迎の感情も露わに、玄関先に立って待っていました。まず寒暖をいかに耐え忍んだのか¹⁶⁶と儀礼の挨拶を交わしました。続く長い別れの間の互いの思いをまだ交わし終わらぬうちに、妻は香りの部屋の珠簾を巻き上げ、帰郷したご主人様に挨拶するようと、新参の侍女に命じました。

キョウは戸惑いながら少しずつ前に進み出ると、突然、物も言えぬほど驚いて立ち止まりました。

そう、彼女は見分けたのです。

「まさか。太陽か燭の光で目が眩んだのかしら。そこに座っているのはトゥック。ああ、今全て理解できた。もう終わり。間違いなく罠にかかってしまったのだ。何という異常な計略、何という女。こんな悪魔みたいな人がいるのか。全ては明らかになった。私を夫人の下女として縛り、彼を女主人の夫に仕立てることで、私たちを引き裂くことに成功したのだ。先ほどまで陽気に話したり笑ったりしていたのも全ては演技。そして、この狡い女は短剣に頼らずして私を殺そうとしたのだ。けれど、私の身分はこれほどに低く、彼女の身分は大地に対する天のようにあれほどにも高い今となっては、私に何が言えて何ができよう」

トゥックを見つめれば見つめるほど、キョウは腸の捻れた蚕¹⁶⁷のような深い悲しみを感じ、頭の中がもつれた絹糸のかせのように感じて狼狽えるのでした。しかし、厳しい女主人の前で命令に背くことなど、どうしてできるでしょう。彼女は頭を垂れ、梅の木が植えられた庭の地面にひれ伏しました。

トゥックの方も狼狽えました。

「おお、私に慈悲を。そこにいるのは私の愛するキョウではないか。どうしてそんなに身分低く落されてしまったのだろう。ああ、この罠が誰に仕掛けられたのか今分かった」

彼はキョウと認める言葉を一言も口に出しませんでした。しかし、涙が真珠のように頬を伝い落ちるのを、どうしても

¹⁶⁶ 脚注 56 参照。

¹⁶⁷ 深い悲しみを指す表現。

抑えることができません。

ホアン・トゥーはトゥックをまっすぐ見つめ、彼の悲しみを氣遣う振りをしました。

「あら、愛するあなた。どうなさったのですか。無事帰宅したばかりなのに、なぜそんなに取り乱しているのですか」

「先日亡くなった母を悼んでのことです。今はキア(峽)山¹⁶⁸に住む亡き母のことを思うと、深く悲しまずにはいられません。その悲しみは、私の心から永久に消え去ることはないでしょう¹⁶⁹」

トゥックの答えを聞いて、ホアン・トゥーは賞賛しました。「とても信心深い息子になられたのですね。でも今は、旅の埃を払い落しましょう。そして、この酒盃が秋の夜の悲しみを溶かし去ってくれますように」

妻と夫は共に盃を上げました。キョウは夫妻の傍らに立たされて酒を注ぐように、さらにトゥックのすぐ前に跪いて彼に酒盃を手渡すように、女主人から命じられました。

トゥックはますます困惑を深め、どうしたら良いか分からなくなりました。酒盃を受ける度に涙が溢れ、彼は目をそらして言葉を挟んでみたり、笑おうと努めてみたりしました。最後は酔った振りをして、もうこれ以上飲めないと、そっと言いました。

若い夫人は怒った振りをして声を荒げました。

「ホア・ノー(花奴)。お前のせいでご主人様が盃を空けられないのなら、鞭で打ちますよ」

トゥックはこの言葉に困り果て、勧められた苦い酒を一気に飲み干しました。若い夫人は酔ったように笑い、喋り続け、そしていつ果てるともない酒宴の終わりを待つことなく、新たな余興を提案しました。

「ホア・ノーは才能に溢れています」

若い夫人は哀れな奴婢の方を振り向いて言いました。

「ホア、ご主人様に楽しんでもらえるよう、何か曲を奏でなさい」

キョウは驚きましたが、命じられるまま衝立の前に座り、胡琴を調音して演奏に入りました。

何という調べでしょう。奏でるキョウの指の下からは、震える四本の弦が静かにすすり泣き、むせび泣き、悲しい旋律を辺り一杯に溢れさせ、ホアン・トゥーが楽しくもてなすつもりだった人の心を、すっかり悲痛な思いに沈ませてしまいました。

その曲はと云えば、他の人に演奏された時には、たとえ芝居で役者が泣く場面でも、その調べが流れるだけで聴衆を微笑ませてしまうような、そんな曲のはずだったのですが。

ホアン・トゥーは激怒してまた叫びました。

「私たちが楽しくくつろごうとしている時に、どうしてそんな沈んだ曲を演奏するのですか。そんな配慮のないことをどうしてできるのでしょうか。もしご主人様がお前の音楽で気分を悪くしたら、それはお前のせいですからね」

頬を流れる涙を見られまいと頭を垂れたトゥックはさらに切なくなり、もめ事を避けようと慌てて陽気な雰囲気を取り繕おうとしました。

¹⁶⁸ 仙人の住処。

¹⁶⁹ これらの言葉を通して、トゥックはキョウに対して、自分のせいで彼女が突き落とされた惨めな状態を忘れはしない旨、間接的に仄めかしたのであろう。



Sinh càng như đại, như ngậy,

トウツクはますますこんわく困惑ひかを深め、...

龍頭をあしらった水時計は、滴り落ちる水音ですすでに第三当直の終了時刻¹⁷⁰となったことを知らせました。夫人の顔色からは、自分の計略の成功にすっかり満足していることが読み取れました。ホアン・トゥーは喜びで満ち溢れていました。「何と幸せだこと。人知れず苦しんできたことが全て埋め合わされるのに十分だわ」

彼女は自分自身に言いました。

トゥックの方は、肝が萎み腸が腫れ上がったかのように感じました。愛する人のことを考えれば考えるほど、ますます苦しきで一杯になるのです。

やがて、夫妻は寝室に下がりました。

一人取り残されたキョウはその場を離れ、寝室の燭の灯りの中で物思いに沈みました。全てのことは今、水面に浮かぶ泡のようにくっきりと明らかになりました。

彼女は用心深く呟きました。

「何という嫉妬深い女だこと。この世の中で最も嫉妬深い性格の持ち主だ。翡翠や鴨¹⁷¹のつがいを離れ離れにするような、何とも手の込んだ計略。愛し合う二人を異なる身分に置き、互いに見つめ合うこともできないようにするなんて。天空と深淵のように、私の身分はこんなに低く、彼の身分はあんなに高い今となつては、甘くて真剣な気持ちや親密な言葉を彼と交わすことなど、どうして期待できよう。きっとこれからも、屈辱の苦しきで悩ます彼女の言葉を聞き続けなければならないに違いない。けれど、もしこの状況から抜け出すこと

に成功したとしても、次には一体どんな運命がまた、私を待っているのだろう。そもそも将来を読めない若い娘に、この深く凶暴な海から安全を求めて避難することなど、どうして望めよう」

キョウは一人で夜遅くまで悩み続けました。燭の油はもう僅かとなり、最後の当直が巡回する時刻となつても、彼女の涙は流れ続けました。

¹⁷⁰ 午前一時頃。ベトナムと中国の田舎では巡回警備が組織され、当直という勤務班が五つに分かれている。当直の単位は二時間。第一当直は午後七時開始、最終当直は翌午前五時終了。

¹⁷¹ これらの鳥は始終つがいで暮らすことが知られている。

第18章 キョウの出家 (1885行～2028行)

キョウは、その邸宅でそのまま侍女として働き続けていました。ある日、若い夫人は、キョウの哀れな様子を見かけた時、彼女の表情をまじまじと見つめてきました。それから、この先もこのように生きていく意味をどう考えているのかと尋ねてきました。キョウは質問の狙いを押し量りながらも、自分の境遇を深く思い悩んでいると短く答えました。

ホアン・トゥーは静かに夫に話しかけました。
「この件はお任せします。ホア・ノーが本当に願っていることを、どうか聞き出して下さい」

トゥックの腸は錐で刺し貫かれたように痛みました。キョウに直接話しかけることは適切とは思えず、顔を合わす勇氣もない。しかし、自分の不自然な態度が愛するキョウに別の災いをもたらしてはと恐れたトゥックは、勇氣を振り絞り言葉を選びながら、彼女にいくつかの質問をしました。

キョウは頭を垂れて花の植え込まれた庭の地面に額ずき、一筆認めた書状を恭しく彼に差し出しました。トゥックはそれを直ちに妻に手渡しました。

ホアン・トゥーはその書状を読んで、文章と筆跡の立派さに大変驚き、何か心を動かされてしまいました。

彼女はその書状を夫に返して言いました。
「ホア・ノーの才能の立派さは尊敬すべきもので、その運命は十分憐れむに値します。もしこの娘が裕福な良家に生まれていたのなら、この才能ある徳によって自ら金の城を建てて暮らすこともできたでしょう。それなのに、ホア・ノーはこの埃

にまみれた世界で、これまで数え切れぬほどの栄枯盛衰を目の当たりにしてこなければならなかった。比類ない才能が備わっているのに、何と哀れなことでしょう」

「あなたの言う通りです。優れた才能を持つ佳人で残酷な運命の犠牲になった人は、何も彼女だけではありません。何千年もの間、なぜか常にそういうことは起こり続けてきたのです。どうか、もっと慈悲深く親切に扱ってあげて下さい。彼女はこの書状の中で、自らの不遇な運命を受け入れ、できればこれからの人生を御仏の庇護の下で暮らさせて欲しいと望んでいます」

トゥックの話を聞いて、若い夫人は答えました。
「はい、そうしましょう。私はホア・ノーにその恩恵を与え、早々にこの境遇から抜け出す用意をさせることにしましょう。この庭には、百尺を越える高木、一年中花を絶やさぬ植物、樹齢百年の老木、石組の池、そしてクァン・イン（観音）¹⁷²をまつた伽藍があります。寺を守り祈りを捧げるため、ホア・ノーを伽藍のある庭の方に行かせることにしましょう」

翌朝、穏やかに晴れ渡った空に明るい日光が差し始めると、伽藍では慣例に則った儀式のための五種類の供え物¹⁷³が用意されました。

御仏の庇護の下での暮らしを許されたキョウは、本尊の前に案内され、そこで三帰依¹⁷⁴と五戒¹⁷⁵の儀式を済ませました。こうして、それ以後キョウは尼僧となったのです。彼女は侍女用の青い衣を脱いで暗褐色の法衣に着替え、名をチャツ

¹⁷² 慈悲深く、災難から人間を守ってくれる仏（観世音菩薩）。

¹⁷³ 五種類の供え物とは、香、蠟燭、花、茶、果物。

¹⁷⁴ 三帰依とは、仏教に改宗すること、仏法に従うこと、僧団に従うこと。

¹⁷⁵ 五戒とは、殺生の禁止、窃盗の禁止、快楽生活の禁止、妄語の禁止、飲酒の禁止。

ク・トゥエン（濯泉）と改めました。彼女には日夜礼拝するために必要な燭の油が絶えることのないようにと、そのための十分な資金も提供されました。スアン（春）とトゥー（秋）という名の二人の侍女が、香を焚いたり茶を供えたりするキオウの手伝役として指名されました。

キオウは、花の絶えることのないこの庭に隠遁して以来、クエン・イン（観音）の住まわれる紫の竹林¹⁷⁶に徐々に近づいていくように、そして埃にまみれたこの世界からは遠く離れていくように感じるようになりました。そもそも、正妻の住むこの邸宅の中で、彼女はトゥックに対してどのような愛を期待できたというのでしょうか。彼の愛に何かを期待するということなど、もう完全に諦めねばならないことでした。キオウは、自分の美貌に起因した、この屈辱的な事態から解放してくれたこの場所の存在に、少しずつ心が満たされるように感じ始めていました。

御仏の庇護のもとで日中は写経を、夜は祈りの香を絶やさぬよう番をして過ごすことで、キオウは苦しみを忘れ悲しみを覆い隠すように努めました。クエン・イン（観音）にポプラの枝で振りまかれた聖水とは、何と不思議な力を持っているのでしょうか¹⁷⁷。僅かな滴でキオウの傷ついた激情は癒され、埃にまみれた世界との絆も徐々に断ち切られていきました。

彼女が暗褐色の法衣をまとい尼僧として暮らし始めてから、空高く上った月は幾度となく秋の庭に明るく輝く光を投げかけました。けれども、相変わらず目の細かい網に囚われて

いて、周りには彼女をしっかりと見張る当直の目があり、固く門の降ろされた門扉がありました。

キオウは人前では努めて明るく話していましたが、それでもやはり一人になると、すぐに涙が流れ落ちるのです。なぜなら、愛するトゥックはすぐそばで暮らして、彼女の祈りの部屋から彼の書齋まではほんの少しの距離なのに、その間には国境の門や高山を乗り越えるより数倍も難しい障壁が存在していたからです。

一方トゥックは、悲しみを隠し不満に耐えようと努めていました。

ある朝、妻が両親を訪ねに出かけた機会をとらえ、トゥックは愛する人に会おうと庭の方に忍び出しました。可哀想に、トゥックはすすり泣きながら、自分が経験してきた不幸な出来事を全て説明しました。涙は溢れる真珠のように青い衣装に流れ落ち、彼は悲しく悔いました。

「ああ、あなたに対して言いようのない不当な仕打ちをしてしまいました。春の女王はただ花だけを懲らしめたかっただけです。けれど、私たちの過失はと言えば、あのよう悪辣な彼女の計略に対し十分対抗できるほどに賢明ではなかったということだったのです。あなたを見つめると、いつも深い悲しみを感じ、言葉は喉に詰まりました。あなたが今こんなに不幸なのは全て私のせいです。私は清純な翡翠を泥で汚し、あなたの青春の日々を台無しにしてしまったのです。数え切れぬ危険と困難に直面しなければならなかったとしても、あの時、山河の前で厳粛に誓った言葉の通り、私は私たちの愛のために生き、そして死ぬことを決意すべきだったのです。しかし、

¹⁷⁶ 仏典によると、クエン・イン（観音）は紫の竹林の中に住んでいた。

¹⁷⁷ クエン・イン（観音）が、死んだ子供にポプラの枝で聖なる水を振りまくと、その子供は生き返った。

私にはまだ、先祖のために果たすべき義務があります¹⁷⁸。ですから、私は今はもう悲しみを抑えて、私たちの愛の絆を断ち切らねばなりません。おお、私は誓いの石を砕き、誓いの金を曇らせたことを、何と恥ずかしく思っていることか。あなたが予知し恐れていた災難が、あなたの身に降りかかったことを目の当たりにした今となつては、たとえ私の一生を百度捧げようとも、守れなかった誓いの償いなどどうしてできるでしょう」

キョウは答えました。

「私の人生は、荒れ狂う大波に揺られ突き上げられる糸杉の帆掛船のようなものです。これからも運任せで浮いたり沈んだりするのでしょう。残された人生で、再びあなたに会えるこんな幸せが来るなんて、自分の些細な生活をこの沼地から何とか救い出そうともがいている最中に、どうして信じられたでしょう。自分の人生などは、振り落ちる雨の中のたった一滴でしかないと考えています。その一滴の生き方が、この世に生きていく人々への何らかの教訓として捉えられるように願いながらも、私はその一滴をあなたとの束の間の愛のために犠牲にしまいました。二人を結ぶ愛の弦の震えを思うと¹⁷⁹、私は非常に悩みました。百年か、たったの一日か。それが続く長さに拘わらず、愛は私たちを互いに強く結びつけたからです。どうか、ここから私を逃す方法を見つけて下さい。それこそは、私が生涯忘れることのできないあなたの愛の、大きな証となるでしょう」

トゥックは言いました。

¹⁷⁸ この義務とは、家族の子孫を残すために正妻と夫婦生活を営むことである。

¹⁷⁹ 二つの生き物の間の魂の交わり。愛の共有。

「何度も考えました。しかし、妻の心は底知れぬ暗闇です。何を企むのか、どうして想像できるでしょう。もし彼女が残忍さを剥き出しにしたなら、あなたにとっては危険な事態となり、私にとってはさらなる人生の苦しみとなるでしょう。ですから、私の助けなしに自分自身の力で遠くへ逃げて下さい。こうなつては、私たちの愛をこれ以上続けることはできません。今、私たちは別々の道を進むよう強いられて、再び山河を前に誓いを交わせる時が来るのかも分かりません。それでも、河が干上がり石がすり減ろうとも、蚕が繭から離れて死ぬことがないように¹⁸⁰、あなたへの愛が消えることはありません」

二人は今までのことやこれからのことについて話し合いました。心の奥を伝えきれずに、同じ言葉が何度も繰り返されました。手を取って見つめ合う二人には、別れの言葉を口にすることができませんでした。

不意に現れた侍女に、人が近づいてくると注意されて、驚いた二人が抱擁を知られまいと互いに後ずさりした時、ホアン・トゥーが花薮の奥から歩み出てきました。

夫人は上機嫌に声を上げました。

「今日は。何をしていたのですか、私の若い旦那様。お散歩ですか」

「花を摘みに。ついでに彼女が書いた詩を見ようと、この場所に足を伸ばしました」

トゥックは用心深く答えました。

「何と素晴らしい筆使いでしょう」

¹⁸⁰ 「愛した人を忘れることはない」

ホアン・トゥーは、仏塔に書かれたその詩を見て、思わず感心して賛美の声を上げました。

「ランティン（蘭亭）の書¹⁸¹と比べても、少しも見劣りするところはあります。このような人が流落と波乱の人生を送らねばならないとは本当に残念なこと。この才能こそ、まさに千金の価値なのに」

夫妻は、修道僧がお茶の代わりに飲む赤梅葉の煎じ茶¹⁸²を一服してから、一人ずつ書斎の方へゆっくりと戻って行きました。

キョウは困惑と危惧を強く感じ、侍女を呼んで何が起こったのかを尋ねました。

すると侍女は答えました。

「ええ、奥様は長い間ここにいました。そっと音もなく来て、隠れて立っていました。あなた方の会話を漏らさず聞いていました。災難、愛、旦那様の悲しみ、そしてあなたの不満、あなた方に関すること全てをです。私に隅で控えているよう命じ、あなた方の会話を全て聞いた上で、奥様はこの別館に上がったのです」

これを聞いたキョウの恐怖をどのように描けるでしょう。

彼女は呟きました。

「何という人。彼女のような人は他にいるだろうか。何という厚かましき、狡賢さ。考えれば考えるほど恐ろしさに震えてくる。それなのにトゥックは別れを告げただけで何も助けはくれず、ただ腕を組んで見ているだけ。それにしても、

¹⁸¹ ランティン（蘭亭）は、高名な書家ウァン・ヒ・チェー（王羲之）の作品。石に彫られた彼の銘文は後に書道の手本となった。

¹⁸² 日本で栽培される低木の一種。

普通の嫉妬深い女性なら、夫のあのような場面を見つければ、眉をひそめ歯ぎしりするはずなのに。でも、この人は違う。静かに立ったまま、声を荒げることもなく、夫に陽気に挨拶し、甘い言葉も掛けようとした。恨みを隠しながら。本当にただ愉しんでいるように見えたけれど、この人だって他人に心を押し量らせないことが得意なだけのこと。さあ、そうならば、我が身を守れるかどうかは私次第」

この庭のどこかで

私を待って横たわる

虎の口 蛇の毒

急いで逃げなければ

花は摘まれてしまう

いつか木をも登る力で

「もう一度水に落ちることになろうとも、青浮き草の私にとって一体それがどうしたというのか。ここで漂おうとよそで漂おうと、私にとって何の違いがあるだろう。でも、これから見知らぬ土地でたった一人、無一文で避難所と食べものを探すのは容易ではないはず」

彼女は解決策を求めて考えを巡らせました。寺には金銀の仏具が種々ありました。キョウは、これからの生計を考え、それらを盗ませてもらうことにして、様子を伺って時を待ちました。第三当直を知らせる太鼓が打ち鳴らされると、キョウは飛び出して塀を乗り越え、月の沈む方角へと暗闇に紛れて歩き出しました。



Cát mình qua ngọn tường hoa,
キョウは飛び出して塀を乗り越え、...

第19章 ザック・ズエン
(2029行から 2060行)

小さな丘に僅かばかりの木立がある他は、見渡す限り荒涼とした大地が広がっていました。見張り櫓の向こうから時を告げる鶏の声がこだましました。キョウは、露の降りた路面にくっきりと足跡を残して橋を渡りました。夜明けは間近となりました。彼女は、旅の危険と疲れ、この先の天候不順に思いを馳せ、自らを哀れに思いながら、長い道のりを辿り続けました。

東を振り返れば、見渡す限りの桑畑に朝日が差そうとしています。キョウは避難所を求めて当てもなく歩き続けました。すると遠方に「招隠庵」という大きな寺標を掲げた寺が現れました。彼女はまっすぐにすすみ、表門を叩きました。尼僧が応じ、門を開けて彼女を迎え入れました。

暗褐色の法衣をまとい疲れ切った様子の子のキョウを一目見て、慈悲深い尼僧院長のザック・ズエン（覚縁）は、訳がありそうなその女性に対して、心からの憐れみを感じずにはいられませんでした。彼女はその女性に出身やここに至った事情を尋ねました。

キョウはすっかり戸惑い、話を作ろうとしました。

「私は身分の低い尼僧でペキン（北京）から参りました。あの時から仏教に帰依し仏法に従うようになりました。私の院長も後ほどここに参りますが、彼女から尊師様へと貴重な仏具をいくつか託されました。彼女の命に従い、これらの贈り物をお届けすることができて大変光栄に存じます」

そして、本当にその命に従っているかのように、キョウは

が外套から小さな金の鐘と銀の銅鑼を出し、尼僧院長の前に並べました。

贈り物を見て尼僧院長は言いました。

「これは確かに高德の友ハン・トゥイ（恒水）の尼僧院からのもの。あなたが一人で帰路につくのは心配です。少しの間ここに留まって、あなたの院長をお待ちなさい」

ご飯と青菜だけを日々の食事として、キョウはこの静かで落ちついた避難所で平和な日々を過ごしました。読経から香と燭の世話まで、何もかも彼女には慣れ親しんだものでした。断食と戒律の遵守も彼女の習慣となっていました。經典と五色幡の世話や月の光に応じた燭の芯の調整、時を告げる鐘を打って朝夕を過ごしました。

彼女の秀でた知識と聡明さの前に、院内の尼僧たちは敬意と思いやりをもって接してくれたので、キョウの方も、さらに安心して時を過ごすようになりました。

第20章 新たな不運
(2061行～2164行)

それは春も過ぎゆこうとしている頃でした。聖なる場所の
辺りでは、春咲きの花が至る所に咲き乱れ、天空には天の川
が広がっていました。ほんの僅かな風や雲の兆しさえも見ら
れない、本当に澄み渡る夜のことでした。

ある敬虔な寄進者がその尼僧院に立ち寄りました。寄進者
はキョウが託した小さな鐘と銅鑼を調べながら、驚いて声高
く言いました。

「何と不思議なことでしょう、本当に。これらの仏具はホア
ン夫人の家の庭にある伽藍のものと瓜二つです」

尼僧院長ザック・ズエンは、すっかり困惑してしまいました。
その晩、夜も更けてから、彼女はキョウを呼び、ここに来た
経緯について再び尋ねました。キョウは真実を隠し通すのは
むずかしいと考え、経緯を正直に打ち明けました。

「そして今、盗みのことも明らかとなったのですから、私の
運命がどうなっていくのか、尊師様、それはあなた次第です」

キョウは話を結びました。

尼僧院長はその話を聞いて、ますます狼狽えてしまいました。
憐れみと恐れの間で揺れながら、彼女はどうか決心すれば
いいのか分かりませんでした。

信心深い女性は、ついにキョウに囁きました。

「ここ御仏の家では、私の娘よ、私たちに寛大な心がないと
いうことはありません。でも私は、思いもよらぬ災難があな
たの身に起こることを恐れます。そしてその時、あなたがそ
の災難に曝されるのを見ることは、私にとって苦痛となるこ

とでしょう。すぐに荷物をまとめて、ここから遠くにお逃げ
なさい。洪水が押し寄せるのを待ちながらここに留まっている
のは、きっと軽率なことに違いありません」

尼僧院からそう遠くない所に、バック・バー（薄婆）とい
う名の老婆の家がありました。老婆はこの平和な場所に度々
訪れる常連の参拝者として良く知られていて、燭の油や香を
寄進するためしばしばこの寺にやってきました。尼僧
院長は老婆を呼びにやり、キョウのためのありとあらゆる
助言をその老婆に授けた上で、哀れな女性を少しの間かくま
ってくれるよう老婆に頼みました。

キョウは、次の避難所となる新しい家に住めることになっ
て喜びました。けれど、慌ただしさの余り、その新しい家で
何が起こるかまでは思い至りませんでした。

避難所となるはずのその家が、実は青楼を経営する老婆が
張った網であることなど、彼女にどうして察知できたでし
ょう。ああ、悔しいかな。バック・バーはトゥー・バー（秀婆）
と同じ学校で共に過ごした仲間でした。化粧や口紅を塗った
時よりも明るい顔色のこの佳人を一目見て、老婆は大儲けの
口が偶然転がり込んできたことにほくそ笑みしました。

キョウがこの老婆の家に移り住むようになってからという
もの、平和な生活への避難所だったはずが、どれほど大きな
心配事ばかりの日々へと発展していったことでしょう。生ま
れつき臆病なキョウは、落胆ですっかり打ちのめされたよう
に感じました。意地の悪い老婆は、何かとキョウを追い出す
と脅しては結婚を迫り脅迫するのです。

老婆は哀れな女性に冷酷に言い渡しました。

「お前は今やたった一人。お前の家から一万里は離れている。

世間でのお前の評判は知らないが、私の知っている限りでは、お前は常に縁起の悪いものに追い回されているようだ。お前のような疫病神の犠牲となって家に入れてしまった私は何と不運なんだろう。ここから追い出されたお前を、自分の家にかくまおうなんて一体誰が思ってくれるだろう。急いで身を守ってくれる男を探さう。さもないと、お前はこの窮地から抜け出せないだろう。この近所でお前の縁談を探そうか。いいや、都合が悪かろう。遠方でお前の縁談を探してもらおうか。おお、誰が見つかるものか。よくお聞き。私はお前のためについに男を探してやった。甥のバック・ハイン（薄幸）さ。彼はタイチョウ（台州）¹⁸³に店を持っているんだ。甥はおよそ正直者で、おお、正直では誰も彼にはかなわないよ。本当だよ。私の言葉にはほんの僅かな裏切りさえもない

バック・バーは天を見上げてきっぱりと誓いました。「もしあったならば、天よ、その時はどんな罰でもお与え下さい。娘よ、何であろうと私の言うことを聞かなくてはならないよ。結婚した後は身の回りのものを携えて、タイチョウ（台州）に引っ越すのさ。一旦そこに行けば、お前を知る者など誰もいないし、大海原か大河のように自由な暮らしがお前を待っている。但し、お前が私の言うことを聞きたくなかったり、私の命令に従わない時は、娘よ、直ちに災難がお前に降りかかることになるからね」

この脅しに対し、キョウはますます憂鬱になり眉をひそめずにはいられませんでした。老婆の話を聞けば聞くほど、誰かに斧の背で打ち据えられそうな怯えに襲われてきます。た

¹⁸³ 浙江省沿岸の港町。

だ一時の避難所を必要としていただけなのに、どうしてこんな窮地に落ち込んでしまったのでしょうか。この窮地から抜け出すために、彼女に今何ができるでしょう。

キョウは悲しげに溜息をつきながら答えました。

「あなたが保護している者は、迷った燕のようなものです。かつて弓から放たれた矢に傷ついたため、今では曲がった枝の影がちらりと見えただけでも怯えてしまいます。この結婚を受けなければならないとしても、一度も会ったことのない人の心をどうして知ることができるでしょう。虎と熊の取り引き¹⁸⁴に当たり、私を安心させてくれるのは何でしょう。もしその人が私との結婚を願うのなら、ここに来て私と誠実な誓いを交わし、その結婚が確かに天地の立ち会いの下で執り行われるようにお計らい下さい。そうすれば、この先河を渡ることになるだろうが、海に船出することになるだろうが、それは私にとって大したことはありません」

この同意の言葉を聞いて、老婆は若いバックに吉報を知らせ、直ちに結婚の支度をするよう彼をせき立てました。

まもなく、その家に人が集められてきました。彼らにはわか仕立ての結婚式の準備にせわしく動き回りました。庭を掃き、祭壇を設置し、花瓶をきれいにし。

香が焚かれると、甥のバックは慌てて庭の祭壇の前に跪きました。それから村人たちの前で、声高く大地の精霊に呼びかけ、狼狽ながらも天に向かって神聖な言葉で誓いました。その後、二人は縁結びの赤い糸の最後の儀式を執り行うため、

¹⁸⁴ 見知らぬ人と結婚することは、野生動物の取り引きと同じである。この取り引きで買い手を探すのは容易でない。ここでキョウは、この結婚で老婆が言ったような幸せを本当に掴めるのか確信が持てないことを仄めかしたのであろう。

窓掛けが引かれた二人の部屋に入って行きました。

にわか仕立ての結婚式はこのように首尾よく済まされたと考えられて、参列者は皆、新婚の二人に付き添って船着場まで行進しました。まもなく、花婿バックが店を開いているというタイチョウ（台州）を目指して、帆掛船は軽い葉のように風を受けて滑り出しました。

船が埠頭に着くと、花婿のバックは花嫁を残して一人下船する段取りをし、馴染みの場所に出かけました。

そこは人間を密売する店、つまり奴婢取引専門店でした。商人たちは売りに出された女性を見にきました。人売り商人のバックは、自分の支払った金額の十倍を超える利益を確認して、その商品を渡すことにしました。彼は、キョウを買い手に届けるための御輿と二人の担ぎ屋を借り上げに行き、それから、自分の名前の意味と同じくらい不誠実な¹⁸⁵バック・ハイン（薄幸）は、その場からさっと消えてしまいました。

キョウを乗せた華やかな御輿が、花で飾られた露台の前に下ろされようとした時、新来者を歓迎しようと老婆が家から飛び出してきました。

老婆はキョウを家の中に案内し、祭壇に額づくように言いました。どうしてまた、この祭壇も白い眉の精霊なのでしょう。そうです、この家は紛れもなく青楼に違いありません。キョウは一目見て状況を理解しました。しかし、理解したからといって彼女に何ができるでしょう。どうしたらこの鳥籠から飛び去ることができるのでしょうか。

キョウは自らを罵るように呟きました。

「悪魔は桃花星¹⁸⁶のしるしの下に生まれた女性を最後まで弄ぶのか。ついこの前、この生活から自由の身となれたばかりなのに、運命に連れ戻されるように、今またこの生活に繋がれてしまった。幸せに見放された自分の人生の意味を考えると、生きることに疲れてしまう。天と地の嫉妬を掻き立てるような美貌や多くの才能を与えられたということは、その人にとって一体どんな意味があるのだろうか。明礬で浄化された水のような私の人生。何と嘆かわしいこと。数多くの痛みの後でなお、底に沈んだはずの泥は、また表面へと浮かび上がる。天よ、あなたは紅い裳裾¹⁸⁷を装う良家に生まれ誠実に育った娘に、どうしてそんなに残酷なのですか。

それにしても、天の御心とは何と理解できないものだろう。もう十分に酷い扱いをしてきた私に、どうしてさらに不運を重ねようとなさるのだろうか。予期せぬ事件で家族から引き離されて以来、私はすでに定められた運命を受け入れてきたのに。紅の頬を授けられた女性としての半生を犠牲にした後、さらに今新たに苦しめられなければならないとは、前の世で私が犯した罪とは、一体どんなものだったのだろうか。

天よ、運命から逃れられないことは、本当にはっきりと分かってきました。今度こそ、残された青春と美貌の全てが犠牲となるでしょう。」

¹⁸⁵ これは駄洒落。この酷い夫の名前バックの同音異義に、不誠実、恩知らず、不貞を意味するバック（薄）がある。

¹⁸⁶ 星あるいは星座の名前で、その影響は女性に不運をもたらすと考えられている。中国の占星術によると、この星は浮気で軽薄な人生を意味する。

¹⁸⁷ 脚注9参照。

第21章 キョウとトゥー・ハイ
(2165行～2288行)

キョウがその館に入ってから、爽やかな風と月光の中で何度も何度も宴が繰り広げられました。そんなある日、国境地帯からやってきた一人の若者が客として立ち寄りました。何と堂々とした男でしょう。虎の髭、強い顎、蚕が臥したような二つの眉、広い肩幅、そして長身。剣術と拳闘の比類なき使い手で、戦略に長け危険を恐れぬ英雄として良く知られている男でした。

その若者の名はトゥー・ハイ（徐海）。クワントウン（広東）生まれで、大地も河も全て自分の領土と考え、剣と肩から下げた胡琴だけを携えて、いつも一人山河を旅してきた冒険家でした。

この街に来てすぐキョウの評判を聞きつけたトゥー・ハイは、薔薇色の窓掛けの部屋に自分の名刺を届けさせました。このような英雄がそんなに突然、一人の女性を愛し始めるなどと誰が想像できたでしょう。けれど、二人は互いに視線を合わせるやいなや、その一瞬に心が溶けて一つになったかのようでした。

トゥー・ハイは言いました。
「私たちは今こうして、心と魂を通して知り合えた。私は遊びのためではなく、長い間あなたの評判を聞かされて、心惹かれてここに来たのだ。あなたの瞳がこれまで誰に対しても青くなったことがない¹⁸⁸というのは本当だろうか。真の心と

¹⁸⁸ 東晋のユアン（元）帝の逸話に由来する。この皇帝の瞳は、心通う客を迎えた時にいつも青色になったと言われる。

心の出会いとは、一生のうちでそう何度もないものだ。多くの男は水槽の魚か、鳥籠の鳥のようなもの¹⁸⁹。そういう男たちと付き合っている、あなたは楽しいはずがないだろう」

キョウは謙虚に答えました。

「あなたのお言葉はお世辞が過ぎます。この惨めな境遇の女性が、どうして他の方を粗末に扱うことなどできましよう。たとえ私の未熟な心が、自分の価値を試す試金石を望み、自分を認めてくれる人を選びたいと密かに願ったとしても、あなたが私の魂を全て委ねられる信頼できる人なのか、どうして分かるでしょう。表玄関からここに入り裏口から出ていく人たちについて、金か銅を選ぶように一人を選ぶ権利など私にはありません」

トゥー・ハイは感心して言いました。

「何と深みのある言葉だろう。その言葉で、ピン・ユアン・キウン（平原君）¹⁹⁰の話の思い出した。愛しい人よ、もっと近くに来て、私を間近に見て下さい。いくらかは信頼してもらえただろうか」

キョウは答えました。

「何と気持ちの大きな方でしょう。私はいつかきっと、シンヤン（晋陽）で龍雲を見るように¹⁹¹、即位したあなたの姿を見る機会に恵まれることでしょう。その時には、どうか野に咲くこの草花に憐れみを感じて下さい。青浮き草か泡のよう

¹⁸⁹ 自由よりも安楽を好む普通の金持ちを指す表現。

¹⁹⁰ 戦国時代の趙の公子。彼は数千人の食客を迎えていたが、「心を開いても良い人は誰なのか分からない」と話していた。（和訳者注：平原君は戦国四君の一人）

¹⁹¹ 「私はきっと、即位したあなたに会う機会に恵まれることでしょう」（和訳者注：晋陽は現在の山西省太原。唐の初代皇帝・高祖となる李淵が挙兵した地。韓非子「飛龍乗雲」）

な私ですから、いつの日か非礼にもあなたの援助におすがり
することがあるでしょう」

その言葉にトゥー・ハイは頷き、微笑みながら言いました。
「本当に私の胸の内を理解できる人がいるものだ。あなたの
洞察力は本当に素晴らしい。まだ埃にまみれてみすばらしい
様相をしている私を見ただけで、すでに英雄と見分けること
ができるとは、何という聡明な人だろう。あなたが私を理解
してくれたことは、その一言で分かる。これからは、たとえ私
が米一万斗¹⁹²と戦車千両を持つ身になろうとも、いつまでも
共に生きることにしよう」

二人はこの短い会話を通してすぐに打ち解けました。相思
相愛ならば改めて求愛の必要はありません。トゥー・ハイは
媒酌人に、彼らの結婚の段取りと支度をするよう依頼しまし
た。青楼の主人には、以前この女性を買う際に支払われた
数百両が払い戻されました。

それから媒酌人は、この夫婦のために閑静な地区で家を探
し、七宝¹⁹³を嵌め込んだ寝台や八仙人¹⁹⁴の絵柄の刺繍で飾ら
れた窓掛けなどの準備を進めました。こうして勇敢な男性と
優雅な女性は結ばれました。二人はまさに、愛の龍に乗った
仲の良い鳳凰のつがいのようでした¹⁹⁵。

けれど、燃えるような愛の中で半年が過ぎると、いつか英雄
の心の中に、かつての冒険の日々が甦ったようでした。彼は

辺境の空やどこまでも続く海を回顧し、それから剣を帯び馬
を駆る自分を思い描きました。

若者の心の中で進みつつある変化を感じ取ったキョウは、
夫に言いました。

「妻には、夫の行く所ならどこへでも付き従っていく義務が
あります。もしあなたが発つのなら、旦那様、あなたに仕え
る者も共に行くことをどうかお許し下さい」

トゥー・ハイは答えました。

「私たちの心は今、同じ気持ちで結ばれているのに、唯の
女性が持つような聞き分けのない感情を、あなたは どうして
克服できないのか。銅鑼の音で大地は揺るぎ、軍旗の影で街道
が暗くなる中、私が十万の兵を従えて帰還する時、そして
自分の傑出した価値をついに皆の者に示すことができた時、
その時こそあなたを私の妻に迎えよう。しかし四面を海に囲
まれているような今は、私には自分の家として住むべき粗末
な場所さえもない。もしあなたが私に付いてくるなら、私は
数多くの困難に直面することになる。大体どこへあなたを連
れて行けるといえるのか。愛する人よ、ここに留まりしばし私
を待っていなさい。遅くとも一年以内にあなたの元へ帰って
こよう。共に暮らし続けるのにどうしてそんなに急ぐ必要が
あると思うのか」

決意したトゥー・ハイは、好ましい風が吹く時に長旅に発つ
驚のように、新たな冒険へと旅立ちました。

キョウは帳の下りた部屋の中、梅の木が描かれた巻き上げ
簾の陰で、一人だけの長い夜を幾度となく過ごすことになり
ました。

¹⁹² 米一万斗とは広大な領地を持つ君主の収入を表す。この文の意味は、「いつか、
たとえ私が富と力を手に入れようとも、いつまでも一緒に生きることにしよう」

¹⁹³ 脚注 165 参照。

¹⁹⁴ 中国の神様たちで、しばしば絵画や刺繍に登場する。

¹⁹⁵ 漢詩から借用された神聖な表現。鳳凰のつがいは幸せな結婚を意味する。「愛の
龍に乗る」も夫婦の大いなる幸せを指す表現。



Đành lòng chờ đón ít lâu,

愛する人よ、ここに留まりしばし私を待っていなさい。

苔むした庭では、トゥー・ハイの足跡はもう見えなくなり
ました。辺りに生い茂った草の背丈は一尺を越え、僅かに細
くなった柳の葉に、キョウは故郷にあった木ささげと榆の木々
を悲しく思い起こしました。それらは今、彼女から何と遠く
にあるのでしょうか。望郷の思いが彼女の魂をツィン（秦）の
雲¹⁹⁶の方へと運び、年老いた両親のことを思い出して辛くな
りました。時の経過は、娘の旅立ちに泣いた両親の悲しみを
和らげてくれたでしょうか。何もかも遠い昔のことのよう
です。あの時からもう十年になろうとしていました。もし両親が
まだ生きているなら、肌には皺が刻まれ、髪は霜のように白く
なっていることでしょう。

そしてあの中断された淡い愛のことは、未だに忘れられま
せん。蓮の花が茎から引きちぎられるように、二人の愛の夢は
壊されてしまったけれど、キョウにはまだ彼を愛する気持ち
が残っていました。

「もし私の妹が縁結びの赤い糸を結びつけていれば¹⁹⁷、もう
きっと彼女には子供たちがいるはず」

キョウは感慨深く呟きました。

郷愁、流落、冒険。様々な感情や不遇な思い出が錯綜して、
キョウの思考は何度も纏れてしまうのでした。それに夫トゥ
ー・ハイへの思いも、恐らく今この時も、彼は巨鳥が空高く飛
ぶように冒険を続けていることでしょう。旅立ち以来、地平線
の向こうにいる彼からの知らせは何もありませんでした。

キョウは深い憂いの中で日夜暮らし続けました。そうした
ある日、突然その地域で戦争の火蓋が切られ、殺戮の臭気が

悪夢のように空に立ち昇りました。河沿いには沢山の海賊が
現れ、全ての街道は甲冑で身を固めた兵士で埋め尽くされま
した。知人や近所の人たちがキョウの所に来て、当分の間は
安全な場所に身を寄せるよう、彼女に強く勧めました。

けれど、彼女は受け入れませんでした。

「私はここで彼を待つ約束をしました。ですから、どんなに
危険であろうとも、彼を見捨てるようなことは致しません」

何をすべきか分からぬ、確信の持てない戸惑いの中で、彼女
は立ちすくんでいました。すると、不意に昇り旗の影が表に
現れ、拡声器から何か叫び声が響き、甲冑に身を固めた兵士
の一隊がキョウの家の周りを取り巻きました。

兵士たちは声を合わせて尋ねました。

「奥様はどちらですか」

それから十名の将校が中に入りました。彼らは庭で二列に
並び、剣と甲冑を取ってひれ伏しました。次に女官と侍女が
現れて同じようにひれ伏し、キョウに言いました。

「王の命により、お妃様を謹んでお招き致します」

側面には雄の鳳凰の紋様が彫られ、雌の鳳凰の豪華な刺繍
で飾られた美しい窓掛けが添えられた王の馬車が、すでに寄
せてありました。前席に座っている御者は、鳥の羽で飾った
帽子を被り、明るい薔薇色の衣装をまといっていました。

太鼓が打ち鳴らされ、キョウを乗せた一行は昇り旗に続い
てその場を発ちました。楽団が先導し、最後尾には金の馬車が
続きました。遙か前方を行くのは、炎色の銘板¹⁹⁸を携えた
使者でした。

¹⁹⁶ 脚注 124 参照。(和訳者注:「左遷至藍関示姪孫湘」韓愈作)

¹⁹⁷ 「もし私の妹が約束通りキムと結婚しているなら、」

¹⁹⁸ 重要な任務を帯びた特使が携える目印で、通常その者には優先通行権と必要な援助が提供される。

南朝¹⁹⁹の本拠地から太鼓の音が聞こえました。その後すぐに、城壁の上に昇り旗が掲げられ、要塞からは大砲の音が轟きました。正門から馬に乗って現れたトゥー・ハイは、妃を出迎えるためまっすぐキョウの方に近づいてきました。

この度はゆったりと帽子を被り儀式用の帯も締めていましたが、トゥー・ハイの風貌は以前と何一つ変わらず、強靱な顎と蚕が臥したような二つの眉もそのままでした。

トゥー・ハイは微笑みながら言いました。

「魚と水のように、私たちは共に生きるべく定められている。かつてあなたに言った言葉を覚えているだろうか。一つの偉大な魂ともう一つの偉大な魂との本当の巡り会い。愛する人よ、今ここに来て満足しているかどうかを聞かせてくれないか」

キョウは答えました。

「私はまだ若く十分な経験ありません。か弱い蔓草のような私が、強い木から庇護を受けることができるのは何と幸運なのでしょう。私は今日まで凱旋するあなたの姿を眺めたいと待っていましたが、初めて出会ったその時から、すでに今日のことは確信しておりました」

見つめ合った二人は満足に笑みを浮かべ、手を取り合って天幕の中に入ると、しばらくの間、互いの胸の奥の尽きぬ思いを語り続けていました。それから、将校の功績を報い兵隊をねぎらうため、盛大な宴会が催されました。軽快な楽団の音楽に合わせ、辺りから軍太鼓の音が上がりました。ああ、

これまでの惨め極まりない長い年月を耐え切ったキョウだからこそ、今日のこの名誉が十分に値するのだと言えるのではないのでしょうか。

日を重ねる毎に、新たな日が二人の愛の炎にさらなる新鮮さをもたらすようでした。

¹⁹⁹ トゥー・ハイは、北京の朝廷に対して反乱を起こし、南中国の皇帝に即位する旨を宣言した。(和訳者注：トゥー・ハイは「嘉靖大倭寇」中で最大の賊首として実在する人物である)

第22章 キョウの審判
(2289行～2438行)

兵舎で暮らしながらもくつろぎの時などには、キョウは彼に出会う前に経験したことについて、少しずつ夫に話していききました。ある時はウーシー（無錫）で、別の時にはリンツ一（臨淄）で。彼女がどのように騙されたのかを、そして誰が彼女を憐れみ慰めてくれたのかを。

「今こうして、私のつまらない魂はやっと平安を見い出すことができました。しかし、それでもまだ心残りなことが二つあります。それはこれまでの人生では果たせなかった感謝と報復です」

トゥー・ハイは、キョウが経験してきた不幸な出来事を聞いて激怒せずにはられませんでした。彼は兵を集め、将校たちを指名すると、直ちに旗を掲げて出陣するよう命じました。まもなく遠征隊は赤い昇り旗を先頭に出発。遠征隊の兵士たちは、かつて極悪非道の行いをした悪者どもを突き止め引っ捕らえるために、ウーシー（無錫）向けとリンツ一（臨淄）向けの二手に分かれました。その一方でトゥー・ハイは、それらの地方政府にトゥック夫妻を確保するようとの命令を伝達する使者を送り出しました。

また別の伝令は、ホアン家の侍女長と尼僧ザック・ズエンを本営に招くよう派遣されました。我らの英雄に事の顛末を説明された兵士たちも皆怒りに煮えたぎり、懲罰の時が待ち切れないようでした。

報復という天の法は何と恐ろしいものでしょう。けれど、のさばっていた悪人どもがことごとく捕らえられ、一網打尽

にされるのを見られるということは、本当に素晴らしいことでした。駐屯の兵隊は全員集合して長剣や槍で武装し、中央には護衛隊が整然と配列され、歩兵連隊はその両側で二つの円陣を組みました。

全軍が威風堂々と起立し、青銅の大砲は至る所に据えられました。軍旗と昇り旗が作る影で、庭が暗くなったほどでした。虎の皮で飾られた天幕が本営の中央を占め、そこには君主トゥー・ハイとその妃が並んで座っていました。

太鼓の連打がまだ鳴り響いているうちに、罪人が到着し門外で命令を待っているとの報告が届きました。

「これより感謝と報復の審判を下す。罪人に対して公平な審判を下す権限を、妃よ、あなたに授けよう」

トゥー・ハイが宣言すると、キョウは答えました。

「陛下の威信に基づくお許しを得て、まず、私の恩人に対する感謝の気持ちを示させて頂きたいと思えます。その後、報復の件について検討致します」

「本件の審判についての全権はあなたにある」

トゥー・ハイが言いました。

キョウは、帯剣した護衛隊長にトゥック・キ・タム（東其心）の招聘を命じました。藍のように蒼白な顔をしたトゥックは、驚いた鳴のように震えおののきながら入廷しました。

キョウはトゥックに話しかけました。

「あなたが私のためにして下さったことは、千の山より重い、返しきれないご恩となっています。かつてリンツ一（臨淄）でああなたが愛してくれた少女のことを覚えていますか。明けの星と宵の星のようにすれ違う運命の前で、私たちは山河に固く誓ったはずの縁を、どうしても全うすることができませ

んでした。けれど、あの愛の悲しい結末が他の誰かのせいなどではなく、あのような愛の形を選んでしまった自分たちに責任があったのだということを、あなたはきっと覚ったのでしょう。でもあの時私の方は、古い友達のお心を「何も助けてくれない」と誤解してしまったのです。あなたが私のために精一杯して下さったことに対する心からの感謝のしるしに、どうかこれら錦百巻と銀千斤をお納め下さい。人をとでも傷つけ悪魔のようだったあなたの奥様については、老婦人から物を盗んだ盗人が老婦人と対面させられた時のように、被害者が加害者にどのような審判を下そうとしているか²⁰⁰を知ることでしょう。器の縁を走り回る蟻は遠くに行くことはできません。後で、彼女の残忍な計略に対する公平な懲罰を下すことと致します」

トゥックの顔を見たならば、冷や汗が滝のように流れ落ちているのが分かったでしょう。トゥックは喜びと懸念、つまりキョウに再会できたことの密かな喜びと、自分の妻に対して下されるかも知れない恐ろしい懲罰への懸念を抑えることができませんでした。

次に、侍女長と尼僧院長が連れてこられました。キョウは来賓席に掛けるよう二人を招きました。そして彼女は二人の手を取り、顔を覆っていた面紗²⁰¹をめくって言いました。

「ホア・ノー（花奴）あるいはチャック・トウエン（濯泉）でございます。私は転落と不運の日々を忘れることができません。あなた方が私に抱いて下さった憐れみに報いるには、金

の山脈をもってしても十分ではありませんが、感謝のしるしに、どうか金千両をお受け取り下さい。あなた方お二人ともシオウ（漂）母さん²⁰²のような方であって、金があなた方の尊いお心と釣り合うことはありません」

ものも言えぬほど驚いた二人の女性は、驚きながらも嬉しそうに若い妃を見つめました。

「どうか、もう暫く座っていて下さい。そして私がどのように報復するのかを見ていて下さい」

キョウはそう言うと、次の人を入廷させて直ちに罪状を調べ上げるよう将校に命じました。旗の下、執行役が剣を抜きました。

「ホアン・トゥー（宦姐）」

罪人が呼び出されました。

その罪人が入廷すると、キョウの方から挨拶をしました。

「奥様、あなたが今日ここに来ることになったのはどうしてでしょう。女性の中で、あなたのような無慈悲な人は極めて稀だと思えます。かつてあなたのように人の心を傷つけた人は多くはおらず、現在でもあなたのように思いやりの心を持たない人は僅かでしょう。でも紅の頬を授かった女性とは、本来は人に親切であることを旨とするものなのです。ですから、あなたのように美しい外見や条件に恵まれているのに、心が邪悪であるならば、それが邪悪であればあるほど、その人の天への借りは重いのです」

ホアン・トゥーは驚きで気絶しそうに見えました。彼女は

²⁰⁰ ホアン・トゥーは、老婦人から物を盗んだ後捕らえられ、懲罰を待っていた盗人に諭えられた。

²⁰¹ この記載は、キョウの顔が審判中は面紗で覆われていたことを示す。

²⁰² 前漢の時代のこと、ハン・ティン（韓信。高祖劉邦の三傑の一人）がまだ貧しかった頃、シオウ（漂）という名の洗濯女の家身に身を寄せていた。彼が宰相となった時、彼女のもとに使いを送り千金を贈った。

天幕の前にひれ伏して哀願しました。

「私のような心は女性なら誰にでもあるものです。そして嫉妬というものは誰しものが心に抱くものです。おお、どうか私の立場もご考慮下さい。あなたの出家の望みを許した時のこと、あなたが仏塔に神聖な詩を書いた時のこと、あなたが私の家から逃げ出したのに、盗人としてあなたを追おうとはしなかった時のこと。それらは私があなたを評価し密かに尊敬する気持ちを抱いていたからなのです。でも、二人の女性が同じ夫を持つ時、夫を相手の女性に譲ろうとする妻がいるでしょうか。心から申し訳ないことをしたと思います。お妃様、棘のような苦しみにあなたを巻き込んでしまったことをどうかお許し頂くよう、心よりお願い申し上げます」

キョウは感心しました。

「人々はあなたのことを知性的で理論的な女性と評していますが、まさにその通りですね。私があるあなたを許せば、それはあなたの生涯でも実に幸運な場面となるでしょう。もし私があなたを罰すれば、人々は私のことを狭量な卑しい人間と見なすことでしょう。あなたはご自分の悪行を心から認めたのですから、もうそのことを咎めるのは止しましょう」

キョウは、天幕の前の罪人を直ちに釈放するよう護衛兵に命じました。ホアン・トゥーは大喜びで曇天の庭²⁰³にひれ伏しました。

続いて、鎖で繋がれた罪人の一団が、本営の外から一列になって入廷しました。

キョウは言いました。

²⁰³ 軍旗と昇り旗が作る影で、庭は雲に覆われたかのようなだった。

「天は何と高く無限なのでしょう。他の者を傷つけた者たちが、今ここで天の審判の日を迎えることになったのは、何も私のせいではありません」

前列に跪いているのは、バック・ハイン（薄幸）とバック・バー（薄婆）でした。その左側はウン^フ（鷹）とクエン（犬）、右側はスー・カイン（楚卿）、トゥー・バー（秀婆）、マー・ザム・シン（馬監生）の三人組でした。

悪人たちに用意された懲罰は、その者たちの罪状にまさに相応しいものであったため、改めて陳述することは何もありません。なぜならば、用意された懲罰は、かつて罪人たちが人を騙した時に軽々しくも自らが立ててみせた誓いの言葉に従ったものだったからです。立ち会った人たちは皆ぞっとしたようでした。目の前で罪人の血が流れ、その痛められた身体は肉の塊のように崩れ落ちました。悪人たちも今ではもう、全てのことは天がお見通しであったことを、はっきりと理解したことでしょう。他の者を騙す者は、いつか自分たちも騙されるということを往々にして忘れがちなものです。

悪辣で墮落した者たちよ

お前たちは風に種を蒔いたから

いま旋風の報いを受けた

誰がお前たちを憐れむだろう

兵士たちは皆処刑の場に参列し、白日の下に下された罪人の審判と懲罰の一部始終を目撃しました。

キョウが感謝と報復の審判を済ませるまで待って、尼僧院長ザック・ズエンは急いで暇乞いをしました。

キオウは嘆きました。

「古い友人と再会し別れを惜しむような絶好の機会は、千年のうちにそう何度もあるものではありません。青浮き草のような私たちは、ほんの一時の再会の後、千切れ飛ぶ雲のようにそれぞれの道を歩んで行かなければなりません。そうしたら、この広い大地のどこで同じ鶴を、あるいは高山のどこで同じ雲を再び見つけることができるのでしょうか」

尼僧は答えました。

「そんなに長く待つ必要はありません。五年後に再びお会いすることになるでしょう。かつて私が遠く異郷の地を行脚していた時、タム・ホップ(三合)という名の尼僧の予言者に出会ったことがあります。タム・ホップは私たちの再会を予言していたことを思い出しました。それは、初めの再会が今年実現し、二回目の再会はその五年後に訪れるというものでした。今、彼女の予言に間違いはないことを知りました。初めの予言が今実現したのですから、二回目の予言も信じなければなりません。私たちは溢れる愛情を互いに抱き合っていて、運命によって決められた私たちの縁はまだ終わっていないのです。それなのに、どうしてそんなに嘆くのですか」

キオウは思いを馳せながら呟きました。

「予言と予言者。私もその尼僧タム・ホップの言葉に間違いはないと信じます。もしいつか、あなたが再びタム・ホップと会う機会がありましたら、どうかお願いします。私の残りの人生について何かお言葉を頂くよう彼女に頼んで下さい」

尼僧院長ザック・ズェンはこの依頼を書き留め、それから若い妃に別れを告げて、旅立って行きました。

公正に恩に報い報復をした後で、キオウはようやく、かつ

て被った不正義へのわだかまりから解放されたようでした。彼女は感謝してトゥー・ハイの前に額ずきました。

「おお、陛下。葦のようにか弱く柳のように頼りない私ですから、このような日が来るなんてどうして夢見ることができたでしょう。あなたの力強い庇護のお陰で、私は心の重荷を下ろすことができました。あなたのご親切は全て、いつまでも私の骨に刻まれ、私の心に銘記されるでしょう。空や雲よりも気高いあなたのお心に、この感謝の借りをお返しするのには、たとえ私が残りの人生を全て犠牲にしたとしても、それは十分ではありません」

トゥー・ハイは言いました。

「これまで、どんなに偉大な男でも、自分を理解してくれる真の友を一目で見つけられた者は滅多にいない。それに、支配の位にある者としては、自分の周りで行われた不正義を知らながら、どうして目を閉じることができようか。これは私自身が当然に解決すべき治世の問題でもあったのだから、私がしたことになんか深く感謝するには及ばない。それより妃よ、あなたのご両親のことを考えると、あなた方が哀れでならない。あなた方は、ユエ(越)とツイン(秦)²⁰⁴の間のような果てしない空間によって、長いこと離れ離れにされている。この障害を乗り越えるために力になろう。再びご両親にお会いできる時こそ、私自身も本当に満足できるのだ」

それから彼は、宴会の支度を命じました。愛する妃の身に起こった不正義や不運を全て浄めるため、数千の兵士と将校が集まり互いに盃で持て成しました。

²⁰⁴ ユエ(越)は現在の広東省に、ツイン(秦)は概ね陝西省に相当する。

第23章 トゥー・ハイの死 (2439行～2564行)

トゥー・ハイは竹を割るように²⁰⁵、あるいは瓦を割るように、度重なる戦をいとも容易に勝ち続けました。多くの戦闘を経て、彼の軍隊の覇権はその地方に留まらず、周辺域の隅々にまで及んでいきました。暫くして、彼はこの空の下を自分の領土であると認めて自ら皇帝に即位することを宣言し、政府を組織して国民と軍隊の力を結集し、明の国土の半分にも及ぶ広大な地域を支配するようになりました²⁰⁶。

強風が雨を吹き飛ばすように、彼は五度遠征に発ち、南部の五県を足下に納めました。みすばらしい人形か米俵のように愚鈍な敵兵たちに、諸国遍歴の風塵で磨き上げられた剣を持つ彼と対等に渡り合うことなどできる訳がありません。トゥー・ハイはついにこの辺境地域の完全なる支配者となりました。この地域には君主や諸侯、王子もいましたが、彼の昇り旗を前にして、誰が彼の力に敢えて挑もうとするでしょう。

五年が過ぎ去りましたが、その間トゥー・ハイは、ホー・トン・ヒエン（胡宗憲）という名の総督が派遣されてくるまでに沿岸各省をことごとく占領していました。

政治家としてのあらゆる才能を授けられたこの朝廷の重臣は、皇帝自らが馬車を押し出す²⁰⁷ほどの特命を帯びていました。遠征隊の司令官として、彼は敵に対処するための全権を付与されていました。彼は、トゥー・ハイが勇猛果敢な戦士で

あること、また、キョウが軍議に参与していることも知っていました。

ホー・トン・ヒエンは軍隊を野営させ、和平を望む振りをしました。彼は特使を指名して、トゥー・ハイに翡翠や金、絹などの高価な贈り物を届けさせ、朝廷に降るよう説得しようとしてしました。さらに彼は、侍女二名、金と翡翠千斤からなる特別な贈り物をキョウに贈りました。

親書はまもなく本営に届きましたが、トゥー・ハイは心の中で、全く疑わしいものだと考えていました。

彼は用心深くひとり言を言いました。

「私はたった一人でこの国を築き上げたのだ。私は長らくツォー（楚）の海とウー（呉）の河²⁰⁸をことごとく治めてきた。もし私が服従し狼狽える逆賊として朝廷の軍門に降るなら、私の運命はどうなってしまふのだろう。向こうでは、皆が一様に決められた衣装で繋ぎ止められている。這うように入り、頭を下げて出る。ああ、諸侯の地位に安住するなど、やり甲斐のあるものではない。そのような暮らしは、私のこの辺境の領土に相当するほどの価値はあるまい。私の力に対して彼らは何をなし得よう。ここでは、私は天地を思うがままに動かすことができる。私は自分の領土内ならどこにいても自由だし、誰も私を越える者はいない」

けれど、生まれつき誠実なキョウは、いつも他人を信じやすく、朝廷の特使からの高価な贈り物と好感を抱かせる親書によって、相手の誠実さをいとも簡単に納得させられてしまいました。

²⁰⁵ 一度竹を割ることに成功すると、次の段階はさらに容易になる。

²⁰⁶ トゥー・ハイは、北京の皇帝から独立した国土を設定した。

²⁰⁷ 皇帝が委ねた任務の重要度を明らかにするため、皇帝自らが使節の馬車を押し出す儀式。

²⁰⁸ ツォー（楚）は現在の湖北省に、ウー（呉）は江蘇省の西に位置した。

キオウは考えました。

「結局、私は今だって水面を漂う青浮き草に過ぎない。今まで、私の人生は波乱と不運そのものだった。一方、もし朝廷の家臣となることを今受け入れるということは、それは遠征のために軍隊と共に青空の下を移動する激しく不安定な生活から私自身が解放されることであるとともに、何と言ってもまず、領土の民が安定した平和な生活に入れることを意味するのだろう。それは公私の利益を両立させることになる。そうならば、いつの日か私は故郷に帰ることができるかも知れない。重臣の妻として公式に認められるその日が来れば、私にとって、そして私の両親にとって何と名誉なことだろう。何れにしても、私はまず第一に自国の利益の役に立ち、それから家族の役に立ちたい。そうすることで、両親への孝行と皇帝への忠誠という二つの務め²⁰⁹を果たすことができるに違いない。朝廷の家臣となることが、強い流れのただ中に浮かぶ舟のように突風に怯え、僅かな波にも驚く今のこの危険な人生よりも価値がないと言えるだろうか」

軍門に降ることがどのような結果をもたらすかを討議する中で、キオウは自分の考えを表明しました。

「皇帝の御心は雨が降るように至る所に広がり、人々の心に深く染み渡ってきています。皇帝は長らく国の平定と再編に取り組んできました。国民は皆、彼に恩義を感じているようです。考えてみて下さい。戦乱が始まってから、名もなき戦死者の骨がうず高く積み上がりました。このような悪夢をどうして後生の人々に残すのですか。この千年の間に、誰が

ホアン・チャオ(黄巢)²¹⁰を褒め称えましたか。重要な職務と十分な俸禄よりも価値のあるものはないはずです。そして誉れ。目の前から延びる道を誰が進みたくないというのですか」彼女の説得を聞き入れ、トゥー・ハイは好戦的な気持ちを捨てて降参することを決意しました。彼は、朝廷の特使を迎えるための儀式を用意するよう急がせました。彼らは武装解除の日取りを決め、軍隊の解散のために必要な手続きを進めました。

城下で交わされた盟約を信じ、兵たちは守備を怠り始め、もう昇り旗の扱ひも疎かになりました。見張りの太鼓の音はいつもより間延びして聞こえました。軍の規律や監督はもうなくなってしまったようでした。一方、朝廷の軍隊はその状況をつぶさに把握していました。

計略に訴えるつもりでいたホー・総督は、この状況を利用してようと急ぎました。贈り物を届けるのに合わせて、彼は軍隊を潜伏させ、合図を待って敵陣を攻撃するよう命じました。前線では停戦の旗が翻り、儀式用の贈り物が彼らの前に陳列されました。しかしその背後には、青銅の大砲が多数隠されていたのです。

油断していたトゥー・ハイは何も疑わず、降参するために礼服をまとって本営を出ました。

ホー・トン・ヒエンは直ちに攻撃の暗号を送りました。三方から大砲の音が轟き、辺り一面に昇り旗が上がりました。

不意打ちという罠にはまれば、恐るべき虎でさえ無害となります。しかしトゥー・ハイは、司令官としての勇気を示そう

²⁰⁹ 儒教の道徳による二大義務。

²¹⁰ 唐の時代の伝説の山賊。

と大胆にも敵と正面から向き合い、戦場のただ中で勇敢に戦いました。この偉大な魂がすでに神の住処に召された時でも、彼は戦場のただ中で、足は大地から生えているように、石のような無表情で、銅像のようにしっかりと直立したままでした。揺すっても押しても無駄、彼は直立不動のままでした。

官軍の将校と兵士たちは、殺戮の勢いに乗り敵の全滅に向け追撃の手を緩めませんでした。死臭が空に立ち昇りました。堀の中や城外までも、至る所で破壊の限りが尽くされました。

僅かに残った兵士たちに導かれて矢と石の雨をくぐり抜け、キオウはその場所に現れました。彼女はそこで、無表情で天を仰ぎ直立したままのトゥー・ハイを見つけました。キオウは涙に濡れました。

「おお、智勇兼ね備えたあなたは、取るに足らない召使いの提案を尊重したばかりに、ここに来ることになってしまった。そんな私が、どうしてあなたを正視できるでしょう。ああ、旦那さま。私は今日この日に命を捧げ、あなたと一緒に死ぬべきなのに」

涙は流れ続け、悲しみは増していきました。キオウが嘆きを止め、その身をトゥー・ハイの傍らに倒れ込ませると、何と不思議でしょう。騙し討ちでさえ二人を引き裂くことはないというように、横たわるキオウの傍らにトゥー・ハイの身体が崩れ落ちました。

周りにいた将校や兵士たちの中には、彼女を憐れむ者がいました。彼らは近づいて彼女をその場から離し、そして本営の中に連れて行きました。

ホー公は彼女を迎えると、憂慮の念を込めて言いました。「哀れでか弱い紅の頬を授かった女性は、この戦の犠牲と

なってしまった。あなたが経験した数々の不運は実に憐れむに値するものだ。朝廷の決定による計画は成功裏に成し遂げられたが、それはあなたの仲介によるところが大であったと認める。懸案が成功裏に解決したのだから、あなたには今後の自分の運命を決める全権を与えよう」

キオウの涙は真珠の雨のように新たに流れ落ちました。少しためらった後、彼女は胸の奥の考えを述べました。

「トゥー・ハイは勇敢な人でした。大空の下、彼の自由な領土は限りない海のようなでした。彼は私を信頼し過ぎていたため、私の提案に耳を傾けました。彼は百戦の勝者として皇帝の家臣になることを望み、そうすることによって自分自身の高貴さと妻の名誉を得ることができると考えたのでしょう。彼が瞬時のうちに残忍にも殺害されることなど、誰が信じられたでしょう。五年の間、彼は戦場で命を懸けながら、大空の下と海の上で独立して生きてきました。ああ、あなたは私の浅はかな介入を功績と見なすことで、私を慰めようとなさいました。でも、あなたがそのことを話せば話すほど、私は苦しむのです。私は自分自身を称賛に値する者ではなく、もっと罪深い者と考えています。どうしてまだ生きているのでしょうか。私の一生を犠牲にする方が正しくはないですか。私が生死に拘わらず愛し続ける彼を埋葬するため、どうか私に浅いお墓と手押し車をお与え下さい」

この言葉を聞いて、ホー公は哀れな女性に心からの憐れみを感じました。彼はトゥー・ハイの遺体を河のそばに埋葬させました。



Nhơn nhơn còn đứng chôn chân giữa vòng.

戦場のただ中なかで、足あしは大地だいちから生はえているように、...

第24章 自殺
(2565行～2648行)

駐屯地では勝利の祝宴が盛大に催されました。音楽が奏でられ、将校や兵士たちは祝杯を挙げて歓談しました。総督は自分の天幕でキョウに接遇させ、酔った振りをして彼女の良く知っている曲を弾くよう命じました。

キョウは命じられるままに胡琴を取って調音すると、そのまま演奏に入りました。

何という調べでしょう。風雨の中で何者かが嘆き悲しむような沈んだ調べから始まりました。つま弾くキョウの五指の下で、四本の弦は血が流れるような悲痛な調べを奏でました。蟬の飛ぶ寂しい羽音、手長猿の悲しい悲鳴でさえ、その音ほどには人の胸を刺し締めつけることはなかったでしょう。

総督は深く感動して、眉をひそめ、目を潤ませながら尋ねました。

「この曲の名は何というのかね。これを聴いていると、音色の奥から何千もの嘆きや悲しみが響いてくるように思えるのだが」

キョウは答えました。

「この曲は薄命と名付けられています。まだ少女の時に私を作った曲です。けれど、何年も前から私が好んで弾き続けてきたこの寂しい旋律こそ、今まさに私が経験している薄命な人生を予言するものだったのです」

彼は耳を傾けるほどに魅了され、ますます魅惑され、そして遂には美しい女性に恋心を抱くようになりました。それは何と不思議なことでしょう。あの鉄面皮のような男が恋に

狼狽えてしまうなどと、誰が信じられるでしょう。

最後に彼は言いました。

「これは、私が三生に渡り受け継いだものに違いない。切れてしまったあなたの琴の弦を、私のために鳳凰の膠²¹¹で繋いでみよう」

キョウは答えました。

「私は、社会的な身分を失った卑しい女に過ぎません。一人の偉大な男性が不当にも死んでしまったのは私のせいです。この萎れた花にまだ何が残っているというのでしょうか。私の心の絹糸は、ツァオ・リエン（小憐）²¹²の琴の弦のように既に切れてしまいました。あなた様の寛大な計らいのお陰で、私はまだ紅い裳裾を装う女性²¹³として生きていられます。ですから、死ぬ前に故郷を一目見ることができるのは、今の私にとっては幸運なことなのでしょう」

総督は宴で少し飲み過ぎたため、夜明けを迎えて初めて昨夜のことを思い出し、物思いに沈みました。

「重臣として、私は朝廷から注視されているだけでなく、私の振る舞いを通して人民からも称賛を受けている。さらに、私は仮初めの恋愛を好む男ではない。さて、この件をどう処理しようか」

公館では朝の執務時刻を迎えました。ホー・トン・ヒエンはこの問題の解決策を見い出しました。

「高等官吏の命に誰が抗うだろう」

そうした自分の思い込みだけで、キョウの気持ちを何ら

²¹¹ 脚注 93 参照。

²¹² 再婚した未亡人の名前で、彼女は前夫への懺悔の念を二編の詩に表した。その詩の中で、彼女の失意と弦の切れた胡琴を比べた。

²¹³ 脚注 9 参照。

尊重することもなく、彼女を地元の官吏に下賜する命令を出しました。

愛を結びつける絹糸の老人よ²¹⁴
あなたは何と気まぐれなのでしょう
そんな風に結婚相手を
手当たり次第に結びつけるとは

花で飾られた御輿はキョウを乗せ、小窓の窓掛けを下ろしたまま、かがり火に照らされて帆掛船に向かいました。一人になったキョウは、陰気な柳か萎れた桃の花のようにますます憂鬱に見えました。その状況では、彼女に僅かでも希望を持たせてくれるものは何も見つかりませんでした。

彼女は悲しく呟きました。

「こうして私は身をもう一度砂に埋め、波に沈めることになるのだ。そして、両親が私のためにしてくれた全てを無駄にし、才能を生かして得られるはずだった幸せも捨てることになる。私が死んだら、骨は地平線の果てか深い海の底か、どこに埋めてもらえるのだろうか」

ああ 縁結びの老人よ
再び残酷に
運命を耐えさせようと
愛する夫との赤い糸を
断ち切らせたのは誰なのだろう

「運命はなぜいつも私に厳しいのか。もう一日生き長らえても、それはもう余分な一日。それにしても、生きることはもう喜びではないのに、人はなぜ傷つこうとする身を気遣わずにはられないのだろう。今まで一人で人生のあらゆる苦難を耐え忍んできた私だけけど、この金の身を散らすのは今。さあ、今がその時」

月は西の山の端に隠れようとしていました。船室に一人、キョウは段々落ち着きを失い、ただ立ったり座ったりを繰り返している時、不意に海嘯のどよめきを耳にしました。ここはどこかと聞くキョウの問いかけに、船はちょうどチエンタン河(銭塘江)に入ったという答えがありました。その河の名は、昔見た夢の中で幻の女性ダム・ティエン(淡仙)から言われた言葉を彼女に思い出させました。

ここは悲しみに溢れた人生が
終わりを迎える場所
ダム・ティエン ダム・ティエン
私の声が聞こえますか
ここは遙か昔にあなたが
待ち合わせに選んだ場所
河水の底でどうか今
私を迎えて下さい

燭の灯りの傍ら、キョウのために用意されたかのように花柄の便箋が置かれていました。彼女はその便箋に遺書となる最後の詩を書き、船室の入口に架かっていた珠簾を引きました。外は漆黒の天空と大河が限りない空間の彼方まで溶け

²¹⁴ 脚注 52 参照。

第25章 救出
(2649行～2738行)

合っていました。

キオウは悲しく呟きました。

「トゥー公が私にして下さったご親切は、いかに大きかったことか。それなのに私は、人民の安泰と引き替えて彼自身の安全の判断を誤らせてしまった。私は夫を殺し、今また別の人と結ばれようとしている。恥を忍んでこの世を生き長らえるなんて、どうしてできよう。結局、今が死に時なのだ。おお、哀れな心。今はこの暗い空と河に全てを任せよう」

キオウはどこまでも続く川面を見つめ、そして大河の流れに身を躍らせました。地元の官吏はすぐに救出しようとしたが、香りある翡翠の身は水中に消えてしまいました。

それにしても何という運命でしょう。天の御心をどう理解したら良いのでしょうか。謂われなく、不幸で波乱の人生を送らせると決めた人のために、なぜわざわざ無駄になるだけの多くの才能と、類い希なる美貌を与えたのでしょうか。もしキオウの不幸な命が自然に尽きる最後の時まで生き続けていたとしたら、彼女に与えられていた若さと美貌は、どのような意味を持つことになっていたでしょう。キオウは、苦しかった十五年の間、紅い裳裾²¹⁵を装う躰ある誇りに満ちた良家の女性として、見習うべき多くの教訓に満ちた生き方を示しました。残酷な運命でした。しかも彼女の場合は、不幸の後に訪れるはずの幸せや心の平安というものも知りませんでした²¹⁶。いつの世でも信心深く礼儀正しい人というのは、長い犠牲の後の最後には、天の憐れみを受けるのが常なのですが。

尼僧ザック・ズエン（覚縁）は、キオウと別れてから天秤棒を肩に担いで水入れの瓢箪と小さな袋を吊り下げ、長い巡礼の旅を続けていました。そんなある日、捜していた尼僧タム・ホップ（三合）に再び出会うことができました。ザック・ズエンは二人の休息の一時を利用し、彼女の友人キオウの不幸について話した上で、頼まれていたようにキオウの残りの人生についての予言を請いました。

「あんなに信心深く礼儀正しい女性が、なぜ数多くの不運に見舞われなければならないのでしょうか」

尼僧タム・ホップは答えました。

「人の幸、不幸は、前世からの因縁とともに、天の法に予め記されているものなのです。しかし、それでもその源は、実はやはり現世の私たち自身の生き様に由来しています。考えてご覧下さい。自制の心は幸せをもたらし、激情はただ苦痛をもたらします。

トゥイ・キオウは才能に恵まれた賢い女性なのですが、なぜか不幸な佳人となってしまいました。彼女は感情に溺れやすく、人生の大事な局面で常に情の繋がりに激しくこだわり続けたからです。そのため、トゥックの正妻からクァン・イン（観音）の伽藍で暮らすことを許された時のように、たとえ落ち着いた人生の避難所を差し出された時でも、彼女はそこで平穩に感謝し、そのまま虚心に楽しみ落ち着くことができなかつたのです。彼女を不幸へと導く道筋には、いつも情を

²¹⁵ 脚注9参照。

²¹⁶ この諺は、「如何なる雲も銀色に輝く裏地を持つ」と同義である。

深く求め過ぎるといったような、何らかの邪念が存在しているのです。

不運が尽き果ててもさらに別の不運に見舞われてきた彼女は、すでに侍女の青い衣をまとう身分も体験しましたが、これからまた武装した兵士たちに取り囲まれて、再び使用人の身に落とされることになるでしょう²¹⁷。その挙げ句には、龍の口元に身を投げる魚のように、激流と波のうねりに身を投じることになるはず²¹⁸。キョウの未来は、その真摯な生き方から見れば確かに不運で気の毒ですが、これもまた、実は彼女自身の情が引き起こす運命でもあるのです。しかし、やがては彼女も、自分の身になぜ色々と不幸が起こるのか、それは誰のせいなのか、その訳を理解していくことになるでしょう。これから彼女の艱難は続き、最後は零落の身で死を迎える。苦しみからの解放は、一度現世を終えた後です」

尼僧ザック・ズエンはタム・ホップの予言に衝撃を受けました。彼女は憂いに狼狽えて叫びました。

「現世が終わってから。ああ、現世を生き終えた後には何が残されているのでしょうか」

尼僧タム・ホップは言いました。

「しかし、彼女はその入水では死にません。人の生き方における罪と徳は、天によって何度も秤に掛けられます。私たちのトウイ・キョウが行った罪と徳を見てみましょう。彼女は

²¹⁷ 尼僧タム・ホップは、総督ホー・トン・キエン主催の祝宴で兵隊と捕虜の中に身を置くキョウの運命を予言した。

²¹⁸ 尼僧タム・ホップは、キョウがチェンタン河（銭塘江）に身を投じることの予言した。

恋愛の罠に捕らわれましたが、自我に強欲ではなく、目の前で苦しむ恩ある人のために、恋愛を犠牲にする方を選びました。父親を救うために自らを売らずにはいられない激情に駆られた時、その献身的な行いは、やはり天に憐れみの念を抱かせたに違いありません。

報復と感謝の審判の折りに見せた見事な判断力。時には人を厳しく罰し、時には人を寛大に赦す。大事と小事、善と悪の見分け方。それらは彼女はこれまでの人生から身に付けた覚りです。この覚りこそ比類ない徳であり、徳を身に付けたことによって彼女の過去の罪は赦され、チェンタン河（銭塘江）の河水に流されることになるのです。天は、過去の借りを償い今後は心を入れ替えることが期待できる人間を赦そうとします。

ザック・ズエン、あなたがあの女性への友情を覚えているのなら、チェンタン河（銭塘江）に行って葦船を出し、溺れている彼女を水の中からすくい上げて下さい。どうか私の言う通りして下さい。これは数ある運命の中でも、天からあなたに与えられた幸せな使命の一つではありませんか」

その言葉を聞いて喜んだ尼僧ザック・ズエンは、予言者の元を立ち去り、チェンタン河（銭塘江）の岸辺で風雨をしのぐ場所を探しに出かけました。

集めた茅で祈りのための小さな庵を造り、青い水と金色に輝く雲とともに、流れ着くはずのキョウを待ち続けました。両岸に小舟を繋ぎ止め河を横断する網を張るために、彼女は二人の漁師を一年の間雇いました。勇敢で信心深い女性は、固い決意で辛抱強く待ち続けました。予言の通り本当にキョ

ウとの再会が叶うのなら、それこそ奇跡的な出来事に違いありません。

銀色の波の中に飛び込んだキョウは、チエンタン河（銭塘江）の流れに運ばれ、ザック・ズエンが待っている下流の岸まで漂っていきました。雇われていた漁師たちは網を引き、溺死寸前の彼女を水中から引き上げました。

尼僧タム・ホップの予言に間違いはありませんでした。キョウは、引きずるような絹の衣装をまとったまま、左舷に横たえられました。すっかり水に浸っていたのに、顔色はまだ明るさを保っていて、ザック・ズエンも一目で大丈夫だと分かりました。

引き上げられたキョウは美しい黄梁の夢²¹⁹にまだ深く静かに浸っていました。その夢の中に、幻の女性ダム・ティエン（淡仙）が再び現れました。かつて故郷の家の窓辺での、うたた寝の中で出会った時と全く同じ様子でした。

幻の女性は言いました。

「あなたを待って、私はこの水の中で十年以上もの長い時を費やしました。おお、私の妹。徳高くあるのに、どれほど辛かったことでしょう。あなたの前世がどのようなものであれ、これまで見てきたあなたのお心は、本当に二つとはない素晴らしいものでした。あなたの誠意の香りは天までも届いていました。親のために自らを売ったのは子の献身。人の務めるべき恩返し。人を救い、赦すのは利他の行い。国と人民のために良かれと考へ、尽くそうとしたのは公人としての誠意。

これらの人知れぬ徳を合わせ天の秤に掛ければ、あなたの運命よりも僅かに重くなったので、あなたの名前は手長猿の断腸の定め縛られた悲運な少女の一覧から外されました。それゆえ今ようやく、初めてお会いした時に書き留めて頂いた十の詩題の即興詩、不幸な運命についての悲しい詩を、あなたにお返しできる時が参りました²²⁰。私の妹。あなたには、これから幸せな日々が長く残されることになりました。そして、これまでの大いなる徳は、これからの有り余るほどの幸せを保証してくれるでしょう」

遠くから彼女の戒名のチャック・トゥエン（濯泉）と呼び掛けられたように思いましたが、キョウはまだ幻の女性ダム・ティエンの言葉に混乱していました。梅林の夢²²¹に移ってようやく目覚めましたが、朦朧として何を見ているのかも分かりませんでした。ダム・ティエンは小舟のどこにも見あたらず、ただ尼僧ザック・ズエンが彼女の横に座っているだけでした。

再会は二人にとって限りない喜びでした。尼僧ザック・ズエンは小舟を進ませ、友人のキョウを自分の庵に招きました。

それ以来、二人は同じ屋根の下で同じ食事をとって暮らしました。月明かりの中でそよ風を楽しみ、清い心を保つため菜食の習慣を守りました。二人の周囲には、限りない自然の広がりしかありませんでした。夕方は満ち来る潮を、朝には湧き立つ雲を眺めて過ごしました。

²¹⁹ 脚注 163 参照。

²²⁰ かつて夢の中で、幻の女性ダム・ティエンがキョウに作るように頼んだ詩。

²²¹ 脚注 164 参照。



Nàng còn thiêm thiếp giấc nồng chưa phai.

キョウは美しい黄粱の夢にまだ深く静かに浸っていました。

不運は全て洗い流されました。しかし彼女には、かつて愛を誓った人と再び会える日が来るのでしょうか。キム・チョンはこの場所を探し出すことができるのでしょうか。

第26章 キム・チョンの帰還 (2739行～2966行)

キョウは人生の不運の極みを味わいましたが、キムが経験した別離の後の人生もまた、辛く同情に値するものでした。叔父の葬儀に参列するために長旅に出てから、半年に及ぶリャオヤン（遼陽）での滞在を終えて、キムは家に帰ってきました。彼はまず、愛する人の様子を知るため、すぐに昔のラム・トゥイ（覽翠）の庭²²²に出かけました。

目の前の様子はすっかり変わっていました。庭は一面の雑草で葎がまばらに混ざっていました。かつて昇る月を眺めていた窓には愛する人の姿は見当たらず、雨は外壁の塗装を洗い落していました。家の周りに人影はなく、前年の桃の木の花枝²²³だけは、東の風に微笑みかけるように揺れていました。荒れ果てた屋内では燕が飛び回り、地面は雑草に覆われ、住んでいた人の足跡は緑の苔の下に消えていました。彼が愛する人に会おうと通った塀の隅の通路には、棘の藪がはびこっていました。

今、辺りを支配しているのは、冷たい静けさ。この経緯を明らかにして彼の不安を晴らすには、今誰に問いかければ良いのでしょうか。

隣家からこちらに向かってくる人がいました。キム・チョンがその人に近づき慎重に尋ねると、その人は彼に事の顛末、つまりいかにしてヴウン（王）氏が訴訟沙汰に巻き込まれたのか、父親を救うためいかにしてトゥイ・キョウが自らを売

²²² 脚注 44 参照。

²²³ キム・チョンがキョウの金のかんざしを見つけた桃の木（第 5 章参照）。

ったのかを説明した上で言いました。

「事件の後、一家はここから遠く離れた別の地方に移って行きました。ヴウン夫人、息子のヴウン・クエンそして次女のトゥイ・ヴァンは貧困に落ち、針仕事や写経をして細々と暮らしているようです」

何という胸の潰れるような知らせ。空のただ中で轟く雷鳴のようで、言いようのない恐怖が若者を打ちのめしました。彼は愛する人の家族が居を構えている場所を聞き、その場所に向かいました。

キムはそこで、粗末な竹の柵で囲われ、土塀が崩れた茅葺きの庵を見つけました。軒先にはすり切れた葦の簾が下がり、庭先は雨で濡れたままの雑草に覆われていました。

この落ちぶれた光景を目にした若者の落胆を、どのように言い表すことができるでしょう。見れば見るほど、言葉にならないほどの驚きを感じるのです。

キムは勇気を奮い起こし、壁の外から声を掛けました。ヴウン・クエンが飛び出してきて、友人の手を取り家の中に招きました。老人とその妻はすぐに奥の間から顔を出し、キム・チョンを見て苦渋の涙を流しました。

老人は憂いに沈んで嘆きました。

「おお、お若い方よ。私たちがいかに落ちぶれてしまったかお分かりですか。とりわけ私たちの小さなキョウは、最も残酷な運命に身を任せています。彼女はあなたの妻になるという約束を破らざるを得ませんでした。家族を襲った予期せぬ災難のために、父親を救おうと自らを売ったからです。おお、旅立つ時の彼女のためらいを、どのように言い表せましょう。無数の悩みを抱えながら、それでもあなたとの約束を

三度も四度も強調していました。彼女はあなたへの借りを返すため、妹のトゥイ・ヴァンに、代わりに誓いを守るよう託しました。ああ、幾度生まれ変わろうとも、尽きることのない悲しみが彼女の心から消え去ることはないでしょう。現世ではあなたの愛情を騙してしまい、夜の宮殿²²⁴に入った後の来世ではあなたに借りを返すことができるだろうかと気にしていました。旅立つ前に言い残したその事を、私たちは注意深く聴き、今でも心深くに留めています」

おお 運命はなぜ
それほどまでに残酷なのか
お前の愛した人は帰ってきたのに
可哀想な娘よ
お前は今どこにいるのだろう

老人とその妻は、話すほどに悲しみが深くなるようでした。キム・チョンは、青菜に塩をまぶしたように生気をなくし、床に身を投げすすり泣きながら、拳で床を叩きつけました。真珠のような涙が頬を流れ落ち、杏の花²²⁵のような虚ろな悲しみに溢れて見えませんでした。何度も悲しみを吐き出しては息を詰まらせ、我に返り気を取り直してはまた悲しみに涙するのです。やがて彼は疲れ果て、泣き止みました。

苦惱に満ちた若者を前にして、老人は自分の悲しみを抑え、彼を慰めようと穏やかに言いました。

「厚板は別の船を造るために使われたのです。残酷な運命に

²²⁴ 脚注 95 参照。

²²⁵ 杏の花は儂い美しさを意味する。

身を任せている今の娘には、あなたの誠実な愛に応えることはできないのです。あなたは娘との愛に捕らわれ過ぎています。おお、お若い方よ。金より千倍も貴重なあなたの人生を、娘のために無駄にはしてはいけません」

彼は気の毒な恋人を説得し慰めようと百通りの方法を試し続けました。しかし、悲しみは抑えようとすればするほど、より深くなっていきます。

最後に、ヴウン氏はキムが婚約のしるしとしてキオウに贈った金の腕輪一組、そして二人が誓ったあの時の、思い出の胡琴と香の残りを彼に見せました。若者は思い出の品を見て、不幸な彼女に対しより深い憐れみを感じました。無念の思いが湧き上がり、悲しみがまた彼を苦しめるようでした。

彼は嘆きました。
「ああ、彼女が今、波に翻弄され漂う花か青浮き草のような不運な生活を送らなければならないのは、私があの時に旅立ったからなのです。私たちが何度も何度も誓い合い、金と石に刻み込んだ言葉に価値がないとお考えですか。毛布と枕を共にすることはありませんでしたが、私はいつも彼女のことを妻と見なしてきました。私たちが心に抱きあっている炎をどうして消すことができるでしょう。いかに費用が嵩もうが、いかに長い旅になろうが、生きていく限りは彼女と再会するまで、私は彼女を捜し続けることでしょう」

愛する人への思いを何度も何度も繰り返し、悲しげにすすり泣きながら、キムはヴウン家を後にして立ち去って行きました。

キムは急いで家に戻り、庭の中に別棟を建てさせると、そこで一緒に暮らすようヴウン一家を招きました。朝に夕に、

かつてキオウがしていたように彼らのお世話をすることで、彼は子の勤めを果たすようになりました。彼は涙で薄まった墨で何通もの手紙を辛抱強く書き続けました。愛する人を求めて各地に人を遣わすとともに、彼女の消息を確かめるといいう希望をもって様々な連絡を試みました。

キムはどれほど散財したことか。リンチン（臨清）²²⁶への長い旅を何度したことか。可哀想な青年。この広大な国のどこか別の地域にいる人を、どうしたら捜し出すことができるのでしょうか。肝は熱い鉄で焼かれ心臓は何かに刺し貫かれたように、キムの悲しみと焦燥は極みに達していました。絹糸を吐き尽くす蚕のように日に日に青ざめ、彼の身体は露や雪のように惨めに痩せ細ってゆきました。

キムは絶えず物思いに捕らわれて、夢を見ているのか覚めているのかさえない定かではなく、泣き悲しむ涙には血が混じり、魂は身を離れて漂うかのようでした。

ヴウン夫妻はどんなに心配したことでしょう。このような状況が続けば、青年に何らかの災難が訪れるに違いありません。彼らは急いで必要な用意を済ませ、トゥイ・ヴァンとの結婚式の日取りを選びました。薔薇色の縁結びの糸は、このようにして上品な佳人と才長けた学生を、青春真っ盛りの理想的な夫婦として結び付けました。

キムはこの結婚を喜びながらも、心を悩ます深い悲しみを忘れることができずしてました。

結ばれ暮らす二人の情が深まるにつれて、一旦は枯れたよ

²²⁶ 脚注 80 及び 107 参照。マー・ザム・シンはキオウをリンチン（臨清）に連れていくと明言した。このためヴウン一家は、本当はキオウがリンツォ（臨淄）に連れて行かれたのだということを知らなかった。

うに見えたキョウへの愛が、時と共に再び溢れ出してくるのが分かりました。やはりキムは、キョウのことを思い出す度に苦い涙を流し、腸が百度も捻れたかのような痛ましい様子になるのです。彼は一人書斎で香を焚き、幸せだった日の胡琴を取り出しては弦に指を踊らせ、絹擦れのような寂しい音色に聴き入るのです。沈香の煙が軽やかに巻き上がり、窓掛けはそよ風に優しく波打ちました。彼のために歌うキョウの声が、どこか縁側辺りから流れ、彼女の姿が夢のように目の前に現れそうでした。

キムの心は金と石に刻まれたキョウとの誓いに余りにも誠実だったので、彼女の夢を見る時はいつも必ず彼女がそこに本当に戻ってきたかのように思え、悲しみと憂鬱はキムの心を日夜蝕みましました。

春と秋が何度も過ぎてゆきました。春の日に首都で開催された官吏登用試験で、ヴウン・クァンとキム・チョンは共に進士の資格を授与されました。それは、彼らを雲の高みにも届くような栄光へと導く、天の扉が開かれたようなものでした。朝廷の庭に咲く巴旦杏の花は彼らの通過を歓迎し²²⁷、彼らの名声は故郷の楡の木にまで轟きました。

ヴウン・クァンは過去の恩を忘れはしませんでした。彼は年老いた書記のチュン(終)氏に会いに行き、彼の家族を救ってくれたことに感謝し恩に報いるため、老人の娘と結婚しました。チョウチャン(朱陳)村のチョウ(朱)とチャン(陳)

²²⁷ 唐の時代のこと、官吏登用試験(制科)合格者たちは巴旦杏(アーモンド)の木が植えられた庭で皇帝との謁見が許された。

²²⁸ のような完璧な結婚は、両家の友情の絆を結びました。

キム・チョンは、栄光の青雲²²⁹に到達してからも、キョウのことを思い続けました。

彼は悲しげに呟きました。

「おお、愛する人よ。私が翡翠の約束と金の誓いを交わしたのはあなたでした。金の馬車と翡翠の寺院²³⁰を私は誰と分かち合えばいいのか」

今 あなたは
遠く故郷から離されて
一人波に漂う青浮き草

成功をつかみ栄誉を授かっても
波乱に満ちたあなたの人生に
憐れみを感じない日はないのだ

やがて、キムはトゥー・バー(秀婆)の青楼があるリンツウ(臨淄)に赴任するよう命じられました²³¹。彼は一家全員を伴い、幾多の山々や都市の門を通り千里の道を行いました。彼は、朝な夕な鶴の鳴き声と自分が弾く胡琴の音色を聞きながら、琴堂²³²とも呼ばれる公邸で平和な月日を過ごしました。

ある夜、キムの妻トウイ・ヴァンが桃花模様の窓掛けを引い

²²⁸ 脚注 144 参照。

²²⁹ 社会的に高い地位にある人を指す表現。

²³⁰ 高等官吏だけに約束された幸福を指す表現。

²³¹ キムが再びキョウの足取りを掴めるよう天が与えた好機。リンツウ(臨淄)は、我々の記憶にあるように、トゥー・バーの青楼があった町。

²³² 官吏の公邸を指す表現。自分の管轄地域チャンフー(單父)を胡琴を弾いて治めたピ・ツェ・ピエン(密子賤)という名の官吏に由来する。

た寢室で眠っていると、夢の中に姉のキョウが現れました。ヴァンは目を覚ますとすぐに、夫にそのことを話しました。

それを聞いたキムは半信半疑で言いました。

「冷静に考えてみよう。リンチン（臨清）とリンツォ（臨淄）の違いは一音節のみ。取り違えはまさにあり得る話だ。因縁のある地では、双方の思いが音や魂を通して互いに捜し合うことがある。とにかくこれは吉兆のようだ」

翌日役所が開くのを待って、キムはキョウについて部下に尋ねました。

ドー（都）という名の老書記が丁寧に答えました。

「閣下、その件は十年以上も前に起こったことで、関係した人々の名前も良く存じております。ある時ペキン（北京）²³³から、トゥー・パー（秀婆）という名の老婆とその情夫マー・ザム・シン（馬監生）によって、比類ない美貌と才能を持つ少女が買われてきました。琴の演奏に秀でただけでなく、文学や詩にも精通していました。その少女トウイ・キョウは、操を守るために企てた自殺に失敗した後、幾度か騙され風塵にまみれ、恥辱に苦しまねばなりませんでした。

²³³ ヴウン家の住まいに関するもっとも正確な指摘。抜け目のないトゥー・パーは、マー・ザム・シンが自分の行き先を、リンツォ（臨淄）ではなくリンチン（臨清）と偽ったように、キョウの出身地について嘘をつくことができたであろう。一方、キョウは青楼の様々な遊客に自分の出身について話をしたのかも知れない。さらに、この町からリンツォ（臨淄）まで馬車で一ヶ月（リンツォ（臨淄）からウーシー（無錫）までに相当する距離）を要した。もしその町がリンツォ（臨淄）の南に位置していたなら、ウーシー（無錫）とリンツォ（臨淄）を含む地域の絶対的支配者であるトゥー・ハイの領土内にキョウがいたことになり、ヴウン一家と接触することができずに嘆くこともなかったであろう。もし彼女の故郷がリンツォ（臨淄）の西にあったとすれば、馬車だけで山岳地帯を横切る長旅をするという矛盾が生じる。従って、彼女は北京からそう遠くない北方にいたのであろう。さらに、キョウはザック・ズエンに対し北京生まれであると自己紹介している。

やがてトゥック・キ・タム（東其心）という名の若者に身請けされました。しかし、彼の正妻に誘拐され、ウーシー（無錫）に連れて行かれました。正妻の意地の悪さに絶望してその家から逃げ出したトウイ・キョウは、不運なことにバック（薄）一味の手中に落ち、再び青楼に売り飛ばされました。彼女は漂う雲か青浮き草のように、町から町へと流れて行きました。

そんなある日、トウイ・キョウは、幾千もの兵士たちを引き連れてリンツォ（臨淄）の至る所を占領する、賢く勇敢な天をも揺るがす力強い男性と巡り会いました。彼女はその英雄に、自分が辿った苦難の道を話し、彼の庇護の下に、この町で自分を虐げた者に復讐し、自分を守ってくれた者にはその恩に報いる公正で見事な審判を下して、名声を博しました。このようにして果たしたそれまでの人生の清算に、彼女を賞賛する人々の声が至る所で聞かれたものです。しかし、その勇敢な武将の名前は存じておりません。閣下、この件はトゥック氏に尋ねてみて下さい」

キムはドー書記の明確な説明を聞くとすぐ、トゥック・キ・タム²³⁴を迎えに部下を遣わしました。

キムは、キョウとその夫について詳しく尋ねました。

トゥックは答えました。

「領民が避難所を求めるような動乱の時期でした。私は何人かの兵士から、その武将についての話を聞き出しました。その武将の名前はトゥー・ハイ。百戦を戦い抜き、その強さは一万の兵をも凌ぐものでした。彼はタイチョウ（台州）でキ

²³⁴ 著者は、ウーシー（無錫）にいたトゥックが今なぜリンツォ（臨淄）にいるのかを明らかにしなかった。恐らく彼は父親の店を営むために戻ったのであろう。

オウと出会いました。妃のような佳人が天与の資質を持つ人と結ばれるのは何ら不思議ではありません。トゥー・ハイ公は何年にも渡り自由を謳歌し、武勲によって天地を揺るがしました。彼の本営は東部地域に設けられたとのことですが、それ以後彼に何が起こったのかは分かりません」

この話を聞いて、キム・チョンは動揺し悲しみを新たにしました。

彷徨える哀れな木の葉
流れに翻弄され漂う可哀想な花
この風塵にまみれた世の中から
抜け出せるのはいつだろう

波乱に満ちたあなたの人生
二人の誓いは幾度も破られたけれど
未だここに仕舞われている
香の残り 胡琴の駒も

彼は悲しげに呟きました。
「愛する人よ。この弦が再び鳴り響く日まで、どれほど長く待たねばならぬのか。香の炎が再び灯されることはあるのか。消えたままなのか。あなたの彷徨える人生が続く限り、私の人生はあなた無しで、富と栄誉だけで、どうして幸せに暮らせよう」

キムは、官吏の役職を辞して愛する人を捜しに山河を渡ることを心に描きました。彼女を見つけ出すためならば、彼は戦場のただ中に身を置き、命を危険に曝して死と向き合うこ

とさえ厭わないでしょう。

「この広い空のどこで、どうしたら一羽の鳥の手がかりを見つけ、底知れぬ深淵のどこで、どうしたら一匹の魚の行方を知り得るのだろう」

それからキムは、キョウからの知らせを期待しながら待ち続けました。その間、晴れの日と雨の日が幾度、交互に繰り返されたことでしょう。

ある日、キムは五色の雲で飾られた書簡、つまり朝廷からの勅令を受け取りました。勅令は彼をナンピン（南平）に、ヴウン・クエンをフーヤン（富陽）に異動させるという内容の辞令でした。彼らは直ちに馬車を用意して、それぞれの家族を伴い新任地への道を辿りました。

彼らは、逆賊トゥー・ハイによる争乱が収束したこと、フーキエン（福建）では再び平和が訪れ、チェキアン（浙江）でも戦火が完全に収まったことを知りました。キム・チョンはこの情報を得るとすぐにヴウン・クエンに提案しました。

「この赴任を利用して、彼女が辿った足取りと彼女の消息を尋ねることにしましょう」

彼らがハンチョウ（杭州）²³⁵に着くと、キョウについての正確で詳しい情報が入りました。

ある人は言いました。

「数日前に戦が繰り広げられました。人民に平和な暮らしを与えようと望まれたキョウ夫人の立派な判断が仇となって、トゥー・ハイ公は計略に掛かり、戦場のただ中で戦死してしまいました。その後、朝廷軍の將軍の命によって、夫人は地元の

²³⁵ 浙江省の町。

かんり けっこん
官吏と結婚することになりました。しかし、ふじん しんじゆ ひすい
夫人は真珠か翡翠
のように美しい身を河に投げ、おぼ
溺れてしまいました。そうで
す。あのチエンタン河（銭塘江）こそ、くれない ほお きず
紅の頬を授かった佳人
が眠るところなのです」

ああ、彼らがここに来たのは再び巡り会うためではなく、
えいえん わか
永遠の別れのためだったのです。かのじよ いっか みな えいよ けい
彼女の一家は皆、栄誉と敬意
に包まれているのに、彼女だけは不当にも打ちのめされたま
まなのです。

第27章 キムとキオウの縁 (2967行～3220行)

ふうしゆう したが
風習に従って、故人の霊²³⁶を祀るため位牌が飾られました。
キオウの不当な運命に終止符を打ち、彼女の魂が静かに休め
るようと河岸に祭壇が設けられました。かいしやう はくぎん やま
海嘯は白銀の山並
みのように際限なく走りゆきました。すると、遠くに浮かん
でいた一羽の白鳥が、つい先日キオウがそうしたように、ひるがえ
ってチエンタン河（銭塘江）の水中に潜りました。

この限りない海のような悲しみの最中に現れた血の絆は、
なん ふ し ぎ
何と不思議なことでしょう。伝説の鳥ティン・ヴェー（精衛）
²³⁷に生まれ変わったに違いないキオウの魂は、今どこに向けて
と
飛んでいるのか、とキムが考えていたその時です。

うんめい みちび
運命に導かれたのでしょうか、にそう
尼僧ザック・ズエン（覚縁）
が一团の前を通りかかり、位牌の文字を読もうと祭壇に近づ
きました。

にそう とつぜん い だ
尼僧は突然言い出しました。

「あなた方はどちらからお出でですか。この女性のご親戚で
すか。かのじよ
彼女はまだ生きているのに。どうして死んでしまった
かのように葬式を挙げて涙を流すのですか」

みな はなし き
皆、その話を聞いて大変驚き動揺しました。かれらにそう
周りに集まり、自己紹介した上で彼女を質問責めにしました。
まわ あつ じ こしやうかい じやう かのじよ しつもん ぜ
「私は彼女の夫で、こちらは彼女の両親、彼女の弟と妹、
わたし かのじよ おつと かのじよ りやうしん かのじよ おとうと いもうと

²³⁶ 故人の魂。

²³⁷ 海で溺れ死んだ炎帝の娘の伝説。彼女の魂はこの名前を冠した鳥に生まれ変わった。その鳥は、毎日山に行つて木や石を拾い、まるで海を埋め立てるかのように海にその石を投げ入れた。（和訳者注：山海経・第三・北山経「精衛填海」。炎帝は伝説時代の三皇の一人である炎帝神農氏のこと、娘は末娘の女娃）

彼女の義理の妹です。私たちは彼女は死んだものと考えて
いました。尊師様、あなたが教えて下さったことは何と驚く
べきお話でしょう」

尼僧ザック・ズエンは説明しました。

「私たちは、初めはリンツー（臨淄）で、そして次はチェン
タン河（錢塘江）でと、果物とその仁のように互いに結ばれ
ました。彼女が河に身を投げ入れた時、すでに予言を受けて
いた私は、流れ着く彼女を救い出して、私の住まいに連れて
行きました。ここから遠くない葦葦きの寺で、御仏の庇護の下、
私たちは銀のように晴朗な平和な日々を過ごしています。そ
れでも、いつもご家族を想う彼女の悲しみを紛らせることは
できません」

この新しい事実に皆の顔はほころびました。この喜びに勝
るものなどありません。葉っぱが森の木から引きちぎられて
以来、水の中も遙か雲の彼方までも、彼らは手当たり次第に捜
し続けてきたのです。

誰しもが、落ちてしまった花は香りを消し、もうこの世に
はなく、暗黒の帳によって彼女から隔てられたと信じ、誰し
もが、来世こそは再び彼女に巡り会うという新たな希望を心
に抱き始めたところでした。それなのに今、すでに九泉²³⁸の底
と信じられていた人が、この世界で再び見いだされたのです。

彼らは皆、尼僧の前に額ずきました。それから直ぐに彼女の
後に従って、葦や背の高い雑草をかき分けて進み、曲がりく
ねった河岸に沿って歩きましたが、まだ彼らは半信半疑でし
た。一行はようやく葦原を抜け、寺の庭先に出ました。

尼僧が声を掛けると、金の蓮の花のような足をしたキオウ
が出てきました。彼女は一目で自分の家族であることが分か
りました。老いた父親はまだ健康そう。老いた母親もまだ元気
な様子。立派に成人した様子の弟と妹。そしてキム、過ぎし
日に心から愛した人。キオウはどれほどの間家族から離れて
生きてきたのかしらと思いました。目を見開いたまま彼らの
前に立ちすくみ、まだ自分は夢を見ているのだろうかと思
っていました。

キオウの目には涙が溢れ、真珠のように衣に落ちました。
嬉しいのか、恥ずかしいのか。ああ、この時の彼女の感情を
どのように言い表すことができるでしょう。キオウは崩れ落
ちて母親の膝を抱きました。

彼女は泣きながら自らに起こったことを全て話しました。

「お母様。あなたの娘は、波に翻弄されて漂う青浮き草のよ
うに異郷の地に流れて十五年の間、河の水底か不潔な砂の下
で永久に迷い続けるものと考えていました。あなたの娘は、
この場所で再びあなたに会う機会に恵まれるなどとは考え
もしませんでした」

老人とその妻は娘の手を取り彼女を見つめました。彼女は
旅立ちの日から何も変わってはいませんでした。何度も何度
も踏みにじられたのに、その美しきの輝きはほとんど失われ
てはいませんでした。彼らの幸せの大きさは何をもって量
ることができるでしょう。この再会の感動を言い表す言葉はあ
りません。これまで経験してきた様々な事柄が互いに話され
ました。ヴウン・クァンとトウイ・ヴァンは彼女を質問攻めに
して、そばに佇んでいたキムは、今までの悲しみが氷解し皆と
一緒の幸福感に包まれました。

²³⁸ 死後の世界。

かれ 彼らはキョウを 蘇らせた 御仏の慈悲に感謝し、仏壇の前に
すすぬか 進み額ずきました。それからかれは花で飾られた御輿を呼び、
しぜんいん ぜんいんは全員で家に戻るようにと言いました。

そこでキョウは言いました。

「私は落ちてしまった花でしかありません。私の人生全てが
はらん 波乱と流浪の定めであり、すでに人生の半分が辛酸に費やさ
れたことを考えれば、再び皆様とお会いできた今日のことな
ど、どうして期待できたでしょう。この予期せぬ蘇りと再会。
この幸せだけで、私が長らく心に抱いていた願いは、すでに
じゅうぶん 十分に満たされました。ですから、草木の中で隠居するに相応
しい頃合いと思い、私は残りの人生をこの静かな寺の暮らし
に捧げることにしています。今では私は修行僧のように米と
しおつ 塩漬け野菜を頂き、暗褐色に染められた衣をまとっています。
じんせい 人生のあらゆる雑念は、すでに私の心の中から消え去りまし
た。それなのに、どうして私をこの赤茶けた埃の世界に再び
ひた 浸そうとなさるのですか。流落のうちに半生を失ってしまった
わたし この私が、今さら普通の暮らしをして何の役に立つでしょ
う。私は御仏に帰依する女性として、命尽きるまでここに留
まりたく思います。それに、私の命を救って下さった方のご
おん おんは、大空や海よりも大きなものです。私の恩人から離れて
とおい 遠くに行ってしまうなどどうしてできましよう」

ろうじん 老人は答えました。

「この状況は、後にも先にも例のない特殊なものだ。宗教の
き 決まりも時には状況に応じるべきものだろう。お前が残りの
じんせい 人生を御仏と仙人に祈りを捧げて過ごすと言うのなら、お前

むかしめ が昔示してくれた愛や捨て身の孝行に対して、私たちはどの
ように報いることができるだろう。もしお前が崇高な御仏の
ひご 庇護の下で人々の救済に一生を捧げたいと言うのなら、我々
は寺を建てて尊師様をお招きし、お前と一緒に住めるように
取り計らおう」

この言葉を聞いて、キョウは父の願いに従うべきであると思
いました。彼らは尼僧に別れを告げて寺を去りました。

官舎に着くとすぐ、この度の皆の再会を祝う宴が催されま
した。菊酒の祝杯で彼らに少し酔いが広がり始めた時、妹の
トゥイ・ヴァンが立ち上がって言いました。

「天によって家族の再会が恵まれるよりもずっと前に、二人
は出会い、一つの言葉が二人を結び付けました。けれど、突如
へいち 平地を襲う津波のように不運が降りかかり、姉に結ばれるは
ずだった縁結びの糸は私に結ばれました。黒辛子の種と琥珀
の間の、あるいは鉄と磁石の間の、互いに引き合う力²³⁹が
宿命のように働いて、この度の再会に至ったに違いありません。
元々私たちは姉妹。血と身は同じもの。私はいつも、姉
たちの愛の糸が結ばれることを望んで生きてきました。
じゅうごねん 十五年の間、姉は会えなかった婚約者への思いを、どれほど
むねい 胸に抱いていたことでしょう。今、割れてしまった鏡がもう
いちど 一度合わさりました²⁴⁰。この幸せを仕組んだのは誰でしょ
うか。天がこれを仕組み、二人を選んだのです。何と素晴らし

²³⁹ 脚注 97 参照。

²⁴⁰ 南北朝時代のこと、スー・テー・エン（徐徳言）という名の男が妻のロッチャン（樂昌）と離れ離れになる前に、自分の鏡を割って片方をその若い妻に渡し、もう片方を自分が持っていた。後に彼らは再会し、割れた鏡を合わせることでお互いを確認した。（和訳者注：破鏡重円）

いことでしょう。愛の繋がりは断ち切れはせず、姉は今ここにいます。過ぎし日の誓いの証人、銀色の月もそこに見えます。梅の木は三年目あるいは七年目に繊細な味のする実を結ぶのです²⁴¹。桃がまだ新鮮なうちに、急いで縁結びの糸を撚り合わせましょう」

キョウはすぐに異議を唱えました。

「それは遠い遠い昔のこと。どうして蒸し返すのですか。私たちが誓いを交わしたのは確かですが、風に打ちのめされ、人生の嵐に汚れてしまった今、昔の純真な愛が口にされる時、私はとても恥ずかしい思いをします。時の引き潮がそれらの想い出を全てさらっていきますように」

キムは言いました。

「何と意外な言葉だろう。たとえそれがあなたの望みであるとしても、かつてあなた自身が確かに口にした誓いの言葉のことは、どう考えるのですか。私たちの婚約は、この天地が見守る中で厳かに結ばれたものなのです。たとえ物ごとが移り変わり、星々がその座を動こうとも、私たちの生や死にも拘わらず、交わした永遠の誓いとは重んじられるべきものではないですか。私たちのこの結婚は、かつての純真な愛をなぞった偽りのものということにはなりません。誓いの重荷をどうして引き裂こうとするのですか」

「もちろん、あなたとの結婚は幸せなものでしょう。愛は私たち二人にとって共通の感情ですから。けれど、私は結婚す

る女性とは、完全な花粉を持つ花のような、まん丸な月の鏡のような、清らかで曇りのない女性であらねばならないという思いがあります。だからこそ、その女性の貞淑に千金の価値があるのです。私の旦那様、花模様のがかり火の前で、過ぎし日に愛した人の前で、私に哀しい思いをさせないで下さい。不運が降りかかって以来、蜂や蝶が幾度訪れ、激しい風雨が幾度の襲来したことか。どのような月ならばまん丸な鏡を保ち、どのような花ならば萎れずにいられるのでしょうか。今の私に、紅の頬を授かった少女の美で残っているものなどあるでしょうか。私の人生はすでに終わったもの。あなた方はまだ私に、どのようなことを耐え忍ばせたいのですか。私が自分のことを考える時、屈辱を感じないとお考えですか。埃にまみれてしまっているが、麻の裾着をはき荊のかんざし²⁴²を挿す階級の仲間入りをなど、どうしてできるでしょう。旦那様、あなたが私を愛して下さるのは分かります。けれど、華燭の炎の前で私は違和感を持たずには済まないのです。これからは、私は秋の部屋の扉を閉じることと致します。私は尼僧ではありませんが、尼僧のように暮らしたいのです。旦那様、もし過ぎし日の二人の愛をお考えなら、どうか婚姻のしるしの琴と瑟を、友情のしるしの象棋指し²⁴³に代えて下さい。愛や結婚の言葉を口にして、私の悲しみを甦らせ、あなたの一生を壊してしまう必要がありますか」

「自分だけを弁護するという点ならば、あなたの言うことは確かに賢く正しいでしょう。けれども、こういった話をす

²⁴¹ 「婚約者は、彼女の年齢にも拘わらず、とても新鮮にそして美しく見える」

²⁴² 脚注 68 参照。

²⁴³ 友情の象徴。

るときには、私たち以外にも、実は私たちと同じような運命の人たちがまだいるのだということを、忘れてはいけません。いつの世も貞節は女性の務めですが、その守り方は様々です。平時か緊急時かで、状況に合わせる方法を知らねばなりません。あなたがご両親への恩返しを果たすために、自分の純潔を犠牲にせざるを得なかったように、人には伝統的な原則を厳守することができないこともあります。そのような場合、生きるための埃が、守るべき純粋さを汚したことはありません。天は今日の私たちの再会を許したのですから、外の霧が消え去り、空の雲が晴れる様子を眺めることにしましょう。萎れたと言った花は私には生き生きと見えるし、欠け始めた月も満月の時より十倍も明るく見えます。まだ頭から離れない心配事がありますか。あなたは私のことを、妻を守り切れなかったと軽蔑された可哀想な夫のソウ（蕭）²⁴⁴のように、あなたを守り切れなかったと責めて、単なる通りすがりの人のように冷淡に考えたいのですか」

キム²⁴⁴の主張を聞いて、ヴァン夫妻も同じ意見を述べることにしました。キョウはその申し出を辞退するための言葉を見つけることができませんでした。彼女は素直にお辞儀をして溜め息をつきました。

この結婚を祝う盛大な宴が執り行われました。至る所にかざされたかがり火の炎が、美しい薔薇の刺繍をした絹の窓掛けを透かして、咲き乱れる花のように揺れていました。キム

²⁴⁴ ソウ・ラン（蕭郎）の妻ロウ・チェオウ（ルク・チャウ）は、ある日コ・ツェ・イー（カク・ツー・ギ）に誘拐された。それ以来、彼女は夫を軽蔑し彼を「単なる通りすがりの人（蕭郎是路人）」と見なした。

とキョウは、一家全員の前で婚礼の挨拶を交わしました。このようにして婚儀は済まされ、理想的な二人の縁は再び結ばれました。

今彼らは二人の部屋で、亀の甲羅の小さな器に注がれた美酒を勧め合い、新婚の甘い雰囲気の中にあっても、過ぎし日の愛の味わいに哀惜の念を感じずにはいられませんでした。ああ、柔らかい桃のそばで美しい薔薇色の蓮の花が咲きつづあった青春の日々を、二人はどうして忘れることができるでしょう。それから十五年の歳月が過ぎ、二人が強く願っていたこの時がついに訪れたのです。何と多くの出来事が起こったことでしょう。初めは運命的な二人の愛の出会い、そして婚約と別れ。けれど、実は幾多の深い悲しみこそが、今のこの幸せをもたらしたとも言えるのです。夜はゆっくりと過ぎ、外では月が空高く昇りました。

時間は流れ夜も更けました。房飾りがついた錦の窓掛けのそばで、かつて紅の頬を持つ少女だった女性は、今燭の灯りに照らされてその魅力を増し、愛し合う二人に再び見つめ合える時が訪れました。かつての花を前にして、かつての蜂の心に愛の炎が燃え立ったようでした。

キョウは夫に言いました。

「運命はすでに定められてしまいました。犠牲となったこの身をどうお考えですか。かつての愛があなたのお心にまだ刻まれていることは知っています。ですから、妻の務めとして、あなたの意志に従いました。でも心の中では自分自身を恥じています。そして私が恥じ入る顔を見せる時、きっと人はそれに我慢できないでしょう。確かに、あなたは愛情溢れる接し

方をして下さるでしょう。でも私の方では、恥知らずにもあなたに寄り添うことなど、どうしてできるでしょう。あなたは地面に落ちた線香を集めたり、季節が移ろいゆく時に花を摘んだり、人が嫌がることを好んでする人の真似をしたいのですか。いつか、私の恥が公衆に曝される時が来るとすれば、何と恐ろしいことでしょう。そうなれば、それは私にとって、あなたの愛の証ではなく、紛れもない敵意による仕業の証となってしまう。その時まだあなたが私を愛しているなら、私の存在はあなたを辱める存在となってしまうでしょう。愛し合うことは、騙し合うことよりも何倍も価値のあることです。あなたが家の将来をお考えなら、妹がいます。どうして姉の方に言葉を向けるのでしょうか。これは私の心の中でまだ僅かに残っていた誠実な気持ちです。それをあなたの足で踏み付けるのではなく、代わりに尊重して頂けませんか。旦那様、あなたの心を満たす愛はここそこに満ち溢れています。この萎れた花を愛撫して時を費やすことが、何の役に立つでしょう」

「私たちを結びつけたのは、たった一言の誓いの言葉でした。突然鳥と魚のように引き離されて、あなたが流落の人生を歩んでいると知った時から、私はどれほど苦しんできたことか。あんなに真剣な誓いを交わしてしまった後だから、その誓いを破らざるを得なかったあなたは非常に苦しんでいるに違いない、と考えたからです。あの時私たちは、何があっても永遠に愛し合い続けられると信じて誓いを決心したのです。そして、私たちは再会し、互いに抱いていた愛が今も損なわれていないことを確認しました。柔らかな柳はかつての青春の

日々と同じように緑濃く見えます。いいえ、愛の絆は私たちをまだ放してはいません。私の澄んだ鏡。あなたにはこの世のほんの僅かな曇りも付かず、あなたへの尊敬の気持ちは高まるばかりです。私は何年もの間、海の底で一本の針を手探りで探す人のように、手当たり次第にあなたを探し続けました。それは仮初めの恋愛のためにではなく、真実の愛に一生を捧げると誓ったからこそ、したことなのです。私たちに、同じ屋根の下で過ごすこの幸せな日が残っていたなどと、誰が想像できたでしょう。ですから、私たちは毛布と枕を分かち合わずとも、琴と瑟²⁴⁵のように仲睦まじく暮らすことができますと思います」

このキム²⁴⁵の言葉を聞いて、キョウは衣装を整え髪にかんざしを挿し直してから、感謝を表そうと額づいて言いました。「もし私の汚れた暮らしの泥から真水を取り出せるものなら、それは旦那様、二つとはない寛大なお心を持つあなたのお陰です。あなたのお言葉は真実で、そこまで深く分かり合えることはまさに本当の理解です。おお、私をお守り下さる方。これ以上望むものはありません。私の一生は、この夜のお陰で再び名誉と徳に包まれました」

彼らは黙って手を取り合い、互いの賢明さを認めてさらに夢中になるのです。キムは新たな蠟燭に火を灯して香炉に香をくべ、自分たちの幸せを祝ってまた乾杯しました。

²⁴⁵ 琴と瑟は夫婦間の意志疎通を意味する（和訳者注：琴瑟相和）。この文の意味するところは、「私たちは夫と妻として仲良く暮らす、肉関係は伴わない」



Xót người lưu lạc bấy lâu.

あなたが流落^{りゅうらく}の人生^{じんせい}を歩^{あゆ}んでいると知^しった時^{とき}から、私^{わたし}はどれ
ほど苦^{くる}しんできたことか。

二人は、心に甦って来た過ぎし日の愛を抑えることができませんでした。キムは、かつて一度聞いたことがある曲をもう一度弾いて欲しいとキオウに頼みました。

キオウは答えました。

「私たちが皆この日までの長い間、不幸な思いに囚われてしまったのは、私が好んで弾いた琴の、あの絹の弦が醸し出す不思議に寂しい調子のせいだったのでしょう²⁴⁶。不運を呼びこむような、あのように寂しい音色なら弾くべきではなかったのに、今となっては悔やんでも遅過ぎます。けれど、かつての親愛なる友であるあなたの望みなら、もう一度だけ弾いてみましょう」

キオウは音階に従って、胡琴の弦を交互に繰り返して弾きながら曲に入りました。

何という調べでしょう。演奏するキオウの妖精のような指が弦の上を柔らかく踊り始めると、香の煙も楽器の奏でる旋律に合わせて棚引いているようでした。春の風のように温かい、何と美しい作品。それは胡蝶でしょうか、それとも蝶に変身した若いチュアン・シン（莊生）²⁴⁷でしょうか。

そして、春の愛のように甘く聞こえる二番目の曲。それは空に舞い上がる杜鵑の鳴き声でしょうか、それとも杜鵑に生まれ変わったチョウ（蜀）の皇帝の魂でしょうか²⁴⁸。温かく

²⁴⁶ この物語の初めから終わりまで、実は音楽がキオウの運命に何らかの影響を及ぼしていることが分かる。作品「薄命」は、彼女の人生の各々の局面で繰り返し演奏された。

²⁴⁷ チュアン・シン（莊生）という名の男についての唐の時代の詩。彼は就寝中、蝶に変身した夢を見た。目覚めた時、彼は自分が人間なのかそれとも蝶なのか判然としなかった。（和訳者注：唐詩「錦瑟」李商隱作。その元は、莊子・齊物論第二「莊周夢に胡蝶と為る」）

²⁴⁸ この皇帝は帝位を追われ、失意のうちに死んだ。その後、彼の魂は杜鵑に生まれ変わった。（和訳者注：唐詩「錦瑟」李商隱作。望帝杜宇）

澄んだ旋律は、月光を浴びた水たまりに落ちる真珠のように、ランティエン（藍田）山²⁴⁹で生まれたばかりの雫のように流れました。

キムは五音階の演奏に聴き入りました。何れの調べも彼の琴線に触れるものでした。彼は賞賛の声を上げました。

「でも、これらの曲は、かつてあなたが弾いてくれた曲と同じなのですね。同じ弾き手なのに、かつてはあんなに物悲しく聞こえ、今日はこんなに陽気に聞こえるのはなぜでしょう。音色が物悲しいか陽気かは、あなたのその日の気分の違いから来るのでしょうか。それとも幾多の不運の後、ようやく幸せな日々を迎えて得た、心の安らぎからでしょうか」

キオウは答えました。

「陰気な雰囲気というものは、人生に不運をもたらします。私たちに数多くの不運をもたらされたのは、それは私の才能が至らない未熟な技量で、迂闊にも陰気な雰囲気を醸し出してしまったからだと思います。今私たちは多くの不幸な経験を経てそのことが良く分かったのですから、私は弦を巻き上げて二度とこれには触れないことにしたいと思います」

外で日の出を告げる鶏の鳴き声が上がった時でさえ、二人の胸の中の気持ちやこれまで歩んできた人生を全て話し尽すには至りませんでした。

キムは、昨夜二人で決めたことを一家全員に話しました。誰しもがその話を聞いて驚き、そのような物事を弁えた徳のある気高い女性を、ただ賞賛せずにはられませんでした。確か

²⁴⁹ 陝西省にある山の名前。唐の時代の詩では、日の出にこの山を覆う霧と小さな輝く真珠を比べている。（和訳者注：唐詩「錦瑟」李商隱作。）

にキョウのような人を、朝に桃を夕べに李を²⁵⁰と好むような、
軽薄な女性と同じに考えることはできません。

エピローグ (3221行～3252行)

愛と友情、この二つの感情がまた二人を結びました。彼らは毛布と枕を分かち合うのではなく、友達のように胡琴を弾いたり詩を詠んで過ごしました。時には酒盃を空けて、あるいは象棋指しをして、そして咲き誇る花を眺めて、あるいは並んで座り月の出の美しい光景を楽しみながら、二人の時間を過ごしました。今は二人とも、三生の始まりに交わした十の誓いをことごとく果たしました。このように、彼らは結婚の絆だけではなく友情の絆によっても固く結ばれました。

彼らは約束の通り、閑静な場所に寺を建て、尼僧ザック・ズエン(覚縁)に、ここに来て一緒に住むよう使いの者を送りました。しかし、使いの者がその場所に着くと、扉は閉まり錠は下ろされていました。壁の隙間は苔で覆われ、雑草は庵の屋根の高さにまで伸びていました。尼僧は薬草を集めに遙か遠く旅に出てしまったのです。流れる雲、彷徨う鶴を捜す術はありません。キョウは、尼僧との長い友情を思い、朝な夕な寺の香と油の世話を欠かすことはありませんでした。

それ以来、この一家は幸福に包まれました。幸せな年月を重ね、キム²⁵¹の位もますます高まりました。トゥイ・ヴァンは、桂樹や槐²⁵¹に取り巻かれた曲がり木²⁵²のように、家事に専念

²⁵⁰ キムとキョウほどには真剣でない愛の変わり易さや軽薄さを示すのに用いられる慣用表現。

²⁵¹ 漢の時代のこと、イエンスンという地にダウ・ヴァンという名の男に五人の息子がいた。息子たちは全員聡明でイエンスンの五本の桂樹と呼ばれた。北宋の時代のこと、ヴァン・イオウ(王佑)という名の男に三人の息子がいた。彼は庭に三本の槐を植え、息子たちがその三本の槐と同じくらい高い地位に就くと予言した。実際、息子たちは皆大臣になり、ヴァン家の三本の槐と呼ばれた。

²⁵² ある漢詩の中で、身分の低い者に親切なことで知られる趙の王女タイ・ツェを、植物が這い上がるのを支えるために枝を伸ばす曲がり木に喩えている。

しました。彼らほど満たされ、裕福で尊敬される人たちは稀でした。明るく幸福なこの一家の名声は、後々の世に語り継がれました。

良く考えてみれば、元々人間に生命を与え、人間の運命を定めてきたのは天なのです。つまり、あらゆる事は天に由来します。ですから、もし私たちが波乱に満ちた人生を送るようになりません。もし私たちが清らかで気高い人生を授かったならば、私たちは清らかで気高く生きなければなりません。天は誰に対しても不公平なことはありません。けれど、非常に優れた才能と恵まれた運命を共に授かれれば、それは過ぎたるものと考えべきです。もしあなたが才能に恵まれたとしても、この作品の主人公キョウのように、できるからと言って、その才能に全てを任せ過ぎてはいけません。「才」という字は「災」という字と同じ韻を踏んでいるではありませんか。

私たち誰もが各々背負うべき荷を持っているのですから、それを素直に背負いましょう。そして何が起ころうとも、誰のせいなのか、なぜなのか、などと天を非難するものではありません。幸運は私たちの心の持ちようから生じます。善き心はいかなる才能よりも価値があるのです。

「キム・ヴァン・キョウ(金雲翹 *Kim Vân Kiều*)」、この作品は、シェークスピアの戯曲やラシーヌの悲劇、ボシュエの弔辞、ヘンリー・ワッズワース・ロングフェローあるいはロバート・フロストの詩と並び参照されるような完璧な作品と言えます。そして、私たちの魂や微妙な心情をベトナム語で表現する際に用いられる、最も美しい宝石とされています。

「キム・ヴァン・キョウ」は、6音節と8音節の詩句がベトナム韻律を踏みながら交互に続く3,252行(和訳者注:作者の最後の一言の2行を加えると3,254行)の長編詩です。これは、ギルヘム・デ・カストロ作のスペイン戯曲をフランス人詩人であるコルネーユが翻案した「ル・シッド」と同じように、中国のある通俗小説からの翻案作品です。作者グエン・ズー(阮攸 *Nguyễn Du*)は、原作にはなかった質感を彼の作品に盛り込む術を知っており、通俗小説から詩の傑作へ変換することに成功しました。

「キム・ヴァン・キョウ」は、ベトナム人が日々の会話の中で自分たちを表現するのに用いる美しいベトナム語彙の宝庫とされています。

グエン・ズーは、ベトナム中部のハーティン省ギースアン郡ティエンディエン村で、1765年、高等官吏の家に生まれました。彼は、優れた知性を授かり、知識階級としての将来が約束される官吏登用試験・科挙に19歳で合格しました。

しかし、この将来のベトナムの大詩人、より正確には将来のベトナム詩の創作者は、青春時代に起こった政変から、彼の人生を生涯に渡り左右するような衝撃を受けたのでした。夕

イソン（西山）一派の蜂起による王の退位を目の当たりにして、彼の青春は内戦の恐怖のさなか悲劇的に終わってしまったのです。それ以来、彼は人知れぬ悲しみと共に生きました。忠義を誇りとする家系に生まれた人々、名誉だけでは満たされない人々、19世紀初頭にあつて名誉ある地位に就くことを強いられ、そのことがかつて奉職した体制に対する背信行為であるかのように、それを苦にしていた人々、彼はそうした人々の内の一人でした。彼の家族は歴代に渡りレ（黎）朝に仕えてきました。彼は、レ朝に忠義を果たす末裔の務めとして、まずレ朝復興運動の指導に彼の知性と心身を全て捧げたのですが、結局は失敗に終わりました。そして人生の表舞台を降り、ホン・リン山地で獵と魚釣りを楽しみながら、気の向くままの隠遁生活を送りました。

しかし、暫くして1802年にグエン（阮）朝初代ジャロン（嘉隆）帝が即位すると、彼は高等官吏の地位に就くことを強いられました。彼は、隠棲の場所から二度と離れまいと心に決めていたため、しぶしぶの任官だったのですが、任官後は職務を誠実に果たしました。彼は、ハードウン省、フエ、続いてクアンビン省にて要職を歴任しました。そして1813年には堅実な行政手腕を評価され「皇帝のコラム」と称されるまでに昇進しました。

グエン・ズーは、北京の朝廷への正使（使節団長）を三度任命されました（和訳者注：1804年の初回の任務は、清朝からの使節を中越国境のナムカン（南関）峠で迎えたもので、グエン・ズー自らが北京を訪れた訳ではない由）。初回派遣時、後に彼がベトナム詩に翻案することになる中国の小説「金雲翹伝」と出会いました。彼は、悪漢ものでかなりくどいこの中国

小説を、これまでベトナム語で書かれた詩の中で最も美しいものと見なされている、生き生きとした長編詩に翻案したのです。物語の主人公は、上品で魅力的な精神と容姿を授かったうら若い女性です。彼女は、恋愛と両親への孝行の狭間に置かれ、考え抜いた末、より困難な道を選択しました。彼女は、不当な災難の犠牲者として、父親を救うために自らを売ったのです。それ以来、彼女は最も惨めな奈落の底に身を沈めるまで次々と不運に見舞われました。しかし、泥沼のただ中に咲く蓮の花のように、彼女は生まれつきの高潔さからくる純粋な香りを失いませんでした。

グエン・ズーは、トー・ニュー（素如）という字を持ち、雅名をティン・ヒエン（清軒）と号していました。

グエン・ズーは、即位したばかりのグエン朝第2代ミンマン（明命）帝から、北京の朝廷への三度目の正使を命じられた直後に、彼自身が治療を拒むほどの重病にかかり、1820年8月10日、55歳の生涯を閉じました。臨終間際、彼は周りの者に脈を取るよう頼みました。彼の身体が次第に冷たくなってきていることを告げられた時、彼の唇からは安堵のため息が漏れました。「よろしい」と呟き、そしていかなる言葉も残さずに逝ってしまいました。

グエン・ズーは、儒教だけではなく仏教や道教にも精通していました。彼は東アジアの文化人が好む四つのたしなみ、つまり音楽、絵画、象棋、そして詩に秀でていました。

「キム・ヴァン・キョウ（金雲翹 Kim Vân Kiều）」（1813年）に加え、彼は中国詩の詩選三編、34行の短編詩「若い帽子屋の言葉」、そして182行のベトナム詩「チュウホン（降霊）」（1792年）を著しました。最後の作品は、仏教の万霊節に当

たり書かれたもので、亡くなった方々に捧げられた感動的な
ことば
詞です。

「キム・ヴァン・キョウ」は、その文学的価値に加え、著者の
人間性を映した精神的な価値も兼ね備えています。このグエン・ズーの代表作の中に、彼の精神の気高さが余すところなく
表現されています。最もきわどい箇所であっても、直接的な
表現は用いられていません。彼の音楽的作品が品位を落すこ
とはありません。上品な表現が低俗な内容を覆い隠していて、
とても巧みな描写なので読者の感情を害することはありません。
喩えや言い換えを選ぶ時も品位を落すことなく、読者に対
する変わらぬ気遣いと敬意が感じられます。

グエン・ズーは目的を果たしました。「キム・ヴァン・キョウ」
の影響を深く受けないベトナム人はいません。その響きは、愛
する心と呼び覚ます、深い感情の波が流れるかのようです。
そして、その愛する心がとても強いので、彼の熱烈なファン
となるのです。ある人々、特に女性にとっては、これらの詩行
が知識の宝庫に、あるいは彼女らの将来を読みとることがで
きる本となりました。彼女たちはこの本を思いつくままに開
き、目に飛び込んだ詩節を読みます。その詩節は彼女たちの
占いとなるのです。

一編の詩で国民の魂を揺り動かすことができたこの作者
は何と幸せなのでしょう。

私が愛してやまないベトナム人の屋根屋根の下では、白髪
の老紳士や夢見る少女が夜の静寂にランプを灯しながら、ト
ウイ・キョウの波瀾万丈の物語を読み続けるのでしょう。

Lê Xuân Thủy (レ・スアン・トウイ)

「誓い」の世界

ある日突然、佐藤清二さん翻訳「トゥイ・キョウの物語」の
ゲラが、何の説明もなく私の手元に届けられ、何かと読み出
したのが、この作品に「はまる」きっかけでした。

グエン・ズーの原作が詩物語であるためか、内容は漠然とし
て読みやすいとは言えませんでした。それでも、いつの間
にか引き込まれ、読み直すこと数回になってしまいました。

さて、日本の社会は、進むべき方向を見失って右往左往し
ていると言われて久しくなります。それは多くの日本人が、
自分たちの判断がどんな原理原則に基づいてなされているの
かを、よく理解できなくなったために起きてきた現象ではな
いかと、私などは感じています。日本の生活には、伝統の仏教
や儒教の教えが未だに少なからず残り、その影響を受けて生
きているのにも拘わらず、その教えを正しく教わった経験
を持つ人はほとんどいません。

その状態を「一本の大樹」に喩えると、幹から伸びた細い
枝先にしがみつき、それを生きる精神的な拠り所にしようと
しているけれど、実はその幹がどこにあるのか見たこともな
い、といったところでしょうか。

ところが、この「トゥイ・キョウの物語」では、その見失
った幹を物語の中に隠してあり、読者に「探してご覧、考
えてご覧」と言ってくるのです。

そこで私は、ここに提起されているテーマの一つ「誓い」
を取り上げ、その幹になるものを探し、考えてみることにし
ました。

「誓い」とは何と古めかしく厳しい響きの言葉でしょう。それは「誓い」が単に人と人との約束ではなく、今の日本人が忘れかけている「天の神様」との「約束」だからでしょう。天と交わした約束を破るなんて怖ろしいことです。しかし、いくら誠実な人でも、一生の間には守り切れないことはいくらでも起こり得ます。だからと言って、現実の状況変化に日々変えているのでは、それは誓いになりません。物語ではこの課題を詳しく追っています。

作品の粗筋は一言で言うと「転落した一人の佳人の人生物語」と言えますが、その人生には、純愛の相手キム、熱烈な恋愛相手のトゥック、成熟した人間同士としてのトゥー・ハイ、と三人の男性との愛の出会いが設定されています。女主角キョウは、キムと固く愛と結婚を誓ったのに、人生の激変の前に誓いを守れませんでした。「天の裁き」の存在を信じるキョウは、降りかかる人生の悲惨さに苦しみ、さらに「破約」の罪の重さに苦しみ続けます。

一方、「どのような苦難があろうとも」と固く愛を誓った青年キムは、その誓いどおり行方不明のキョウを求め、この世でだめなら来世までもと、決して諦めません。「あれほど固く誓ってしまった誓いの破約に、一生苦しみ続けるに違いないキョウ」を思うと忘れることができないのです。

不幸な人生の最中に巡り会い愛し合った心暖かな青年トゥックは、キョウを「正式な妾」として、「何があっても必ず愛し守ります」と固い誓いを立てます。けれど、彼にはすでに誠実を誓い合ったはずの正妻がいて、結局はその正妻の承諾なしには誓いを守れないと覚ったトゥックは、後悔に苦しみながらも愛の誓いの「破約」を宣言して、キョウを誓い

の縛りから解き放ちます。

重く尊く「言葉」が人々を支配している中、誓いに忠実であるその厳正さに苦しむ善人たちがいる一方、嘘の誓いを立て平気で人を騙す悪人たちもいる。誓いを尊重し苦しんだキョウだからこそ、一旦悪人どもを審判できる立場になれば容赦しません。彼らが人を騙すに当たり軽々しく誓ってみせた言葉どおりの残酷な懲罰を下すことで、彼らに「口に出した言葉」の重さをしっかりと理解させて、天の裁きの存在を世に証明しています。

長い年月の後にキョウと再開したキムは、今さらと困惑するキョウを説いて結婚に至り、かつて守れなかった誓いを改めてキョウに守らせ、その上で二人の現実に沿う人生を選ぶことで、幸せな後半の人生を送りました。

「誓い」に焦点を当てて作品を読めば、浮き上がってくるのは、原則を厳正に追求しながら生きる人々の姿です。一方で、原則をしっかりと承知していれば、健全な応用はいくらでも可能という考えも示されています。

思想、宗教、時代、個人、社会に関係なく、迷ったら原理原則に戻って考え直しなさいと、この物語は説いているようです。そして、「戻って考え直す」にはどうすれば良いのか、その方法を教えてくれているように思えました。

この作品に私が惹き付けられたもう一つが、物語世界の前提となっている「前世」の思想です。「前世」とは古くさく、しかも謎めいた言葉です。その言葉を知らない人はいないで

しょうが、それがどんなものなのか正確に説明できる人も少ないでしょう。

私たちはこの世に生まれたその時を始まりと考えていますが、キオウの人生を見る限り、それはとんでもない間違いのようです。三世という考え方からすれば、今の世は中間地点。マラソンで言えば、スタート地点から三分の一を過ぎたところがこの世の誕生時。だから、すでにトップもビリもいる。途中で怪我人を助けてビリになったのかも知れないし、途中で狡くも車を使ってトップに立ったのかも知れない。

この経緯を知らされないままに、私たちは不平等に生まれ、人生を出発しなければなりません。断然のトップで現世に滑り込んで以後、必死にそのトップの維持に頑張り続ける人を、前世の経過から判断する天は、「その場で努力することさえ罪」と、厳しく咎めてくるかも知れない。

美貌や才能と共に、善良な性格も生まれつき授けられてきた主人公キオウですが、苦難を通して、さらにその性格を磨き続けていきます。それなのに、どれほど努力しても、天が咎めてくるのはなぜなのか。並はずれて恵まれた条件でこの世に生まれてくるには、前世の行いが物凄く善かったのか、余程の良からぬ経緯があったのか。キオウは常に、この疑問に苦しみ続けますが、その答えが人間に与えられることは永久にありません。

という訳で、キオウのように「なぜ、どうして」と天に疑いや問いを持つことなく、「人は恵まれているなら恵まれているなりに、悲惨であれば悲惨なりに、現状を是認して頑張るべきです」ということになります。この物語と共にキオウの人生を読み進めていくことで、読者は実感をもって、それを

理解していくことになるでしょう。

このように書くこと小難しい作品と思われるかも知れませんが、登場人物たちの描写は善人も悪人も生き生きとしていて、何度もの翻訳を経ても消えずに、なおも蘇ってくる力強い作品です。

「トウイ・キオウの物語」は、一人の不運な女性の悲しみに読者も一緒に泣きたくなるような生々しく人間臭い面も、人間の一生を無限の闇にポッカリ漂うカプセルのように感じさせる宇宙感も備えた物語です。

2004年11月30日 黒田佳子

和訳を終えて

チャンナム チョンコイグイター

チュウタイチュウメイ ケオラーゲッツニャウ

.....

六声を持つベトナム語で朗唱すると、哀愁を帯びた子守歌のようです。

2002年頃ベトナムを訪れる機会がありました。通算8ヶ月の滞在中、ハノイ（河内）とホン（紅）河流域の四季を経験しました。その時出会ったのが「トウイ・キオウの物語」です。

（注：日本では主に金雲翹として紹介されている）

和訳版も是非読みたいと思い東京で探しましたが、簡単には入手できないことを知りました。やむなく意を決し、辞典片手に英訳版を細かく読み進めたところ、「トウイ・キオウの物語」は何か生きる力を与えてくれる作品であることに気がつきました。そして、この美しい作品を平易な日本語に訳し、ベトナムに関心を持つ人たちが生き方を模索している人たち、特に若い友に読んでもらいたいと考えるようになりました。

そこで、「トウイ・キオウの物語」への扉を開くことにしました。

翻訳作業に取りかかるにあたって、底本出版元に翻訳出版の許可を求める私信を送付しました。2003年10月、底本出版元 Nhà Xuất Bản Văn Học（文学出版社）の所長 Mr. Nguyễn Văn Lư（グエン・ヴァン・ルー氏）から返事が届きました。文学面での日越友好関係発展を考慮し、翻訳権の供与のみならず、私の和訳版をベトナム人読者に紹介して頂けるとのことで、その文面を読み、自分が取り組もうとしていることの

無謀さに思い至るとともに、これは天命かも知れないと緊張しました。

私が「トウイ・キオウの物語」を知ることになったきっかけは、「物語ヴェトナムの歴史」（小倉貞男著、1997年、中公新書、pp205-225）です。「金雲翹。一人のうら若い女性の波瀾万丈の悲しいストーリーに盛られた教訓は小学校から教科書に取り入れられ、ヴェトナム人はしばしばこの物語の文章を日常会話の中に交える」と書かれてありました。

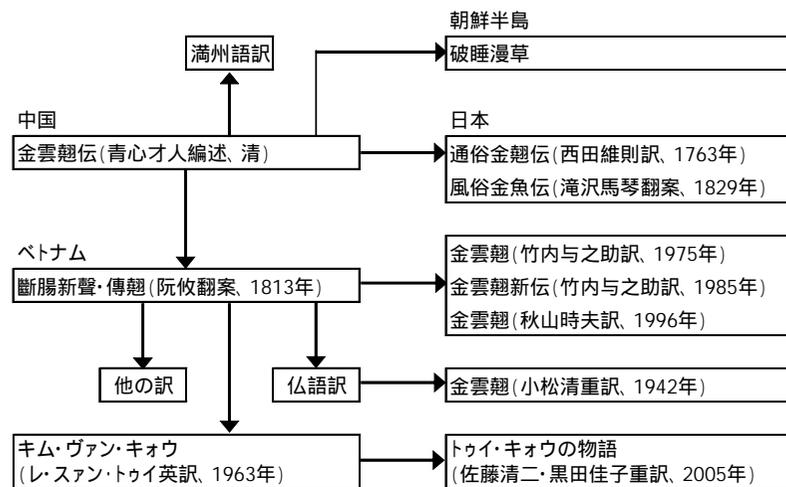
ウェブサイト検索の結果、これまでグエン・ズー（阮攸 Nguyễn Du）作「トウイ・キオウの物語（斷腸新聲・傳翹 Truyện Kiều）」の和訳版として、竹内与之助先生（1922-1999）が「金雲翹」（講談社、1975年）と「金雲翹新伝」（大学書林、1985年、約三分の一に圧縮）を、秋山時夫氏（1917-1999）が「金雲翹」（講談社出版サービスセンター、1996年、200部個人出版）を出されていたことを知りました。また、東京外国語大学の川口健一教授によると、この他に小松清（1900-1962）による仏語版からの重訳（東宝書院、1942年）もある由です。

さらに、「中国才子佳人小説の影響—馬琴の場合—」（磯部祐子、2003年3月、高岡短期大学紀要第18巻）によると、すでに江戸時代の日本で、清の青心才人編述による「金雲翹伝」をもとに、西田維則が翻訳小説「通俗金翹伝」（1763年）を、滝沢馬琴（1767-1848）が翻案小説「風俗金魚伝」（1829年）を出版していたことを知りました。磯部教授によると、朝鮮半島でも「破睡漫草」という形で、また満州語にも訳書（未見）があり、アジア圏への広い伝搬が分かる由です。

ベトナムでは、「トウイ・キオウの物語」の本が何種類も出版されていますが、それらをよく見比べてみると、細部の表現で

相当数の違いがあることに気がつきます。原典は、かつて使われていた越式漢文チューノムで書かれています。チューノムでは、書き出しの「チャンナム（百年）」の場合、「百」は百と林を上下（冠と脚）に組み合わせた一字、「年」は南と年を左右（偏と傍）に組み合わせた一字、という具合です。

このように、歴史的、地理的、学術的に奥が深く興味の尽きない作品です。上述の「トゥイ・キオウの物語への扉を開く」とはそういう意味です。



「金雲翹伝」の伝播状況

本書の底本は越（現代越文クオックグー）－英併記版で、
 題名：Kim Vân Kiều、作者：Nguyễn Du、越英訳・脚注：Lê Xuân Thủy、発行：Nhà Xuất Bản Văn Học です。なお、人名や地名などの漢字については、越（越式漢文チューノム）－越（現代越文クオックグー）併記版（題名：斷腸新聲 Đoạn Trường Tân Thanh,

Truyện Kiều, Đôi Chiếu Nôm - Quốc Ngữ、作者：Nguyễn Du、発行：Nhà Xuất Bản Văn Học) を参照しました。

日本語を学ぶベトナム人のために、全ての漢字にルビを振りました。物語の解釈と日本語の表現については、詩人黒田佳子さんのご指導を賜りました。

翻訳出版に当たり、ベトナムと日本の友人からご支援を賜りました。Mr. Nguyễn Văn Lưu、Ms. Trịnh Thị Diệu、Ms. Nguyễn Mai Phương、Mr. Nguyễn Đức Minh、Ms. Nguyễn Thị Loan、広坂武昌さん、畠平泰彦さん、阿曾亮子さん、小川敬子さん、武田友祥さん、そして愛する家族に対し、心から感謝を申し上げます。

何か生きる力を与えてくれる作品、この美しい作品をベトナムに関心を持つ人たちや生き方を模索している人たち、特に若い友に読んでもらいたい。そしてベトナムと日本の心の架け橋の一助になればと願っています。

2005年2月12日 佐藤清二

ていほん きんこうしりょう
底本・参考資料

1. 底本

「Kim Vân Kiều」、作者 Nguyễn Du、越英訳・脚注 Lê Xuân Thủy、1963年、発行 Nhà Xuất Bản Văn Học、1999年刊

2. 参考資料

- (1) 「断腸新聲 Đoạn Trường Tân Thanh, Truyện Kiều, Đối Chiêu Nôm - Quốc Ngữ」、作者 Nguyễn Du、1999年刊、発行 Nhà Xuất Bản Văn Học
- (2) 「金雲翹伝 (中国古典小説名著百部)」、清・青心才人編次、1995年刊、ホア夏出版社
- (3) 「金雲翹」、阮攸作、竹内与之助訳、1975年、講談社
- (4) 「金雲翹新伝」、阮攸作、竹内与之助訳、1985年、大学書林
- (5) 「Kim Vân Kiều」、作者 Nguyễn Du、越漢韻文訳 Trương Cam Vũ、1961年、発行 Nhà Xuất Bản Văn Nghệ、1994年刊
- (6) 「Kiều」、作者 Nguyễn Du、越英韻文訳 Michael Counsell、1994年刊、発行 Nhà Xuất Bản Thế Giới
- (7) 「物語ヴェトナムの歴史」、小倉貞男著、1997年、中公新書
- (8) 「Vietnam - A Long History (Fifth edition - revised)」、著者 Nguyễn Khắc Viện、2002年、発行 Nhà Xuất Bản Thế Giới
- (9) 「入門・中国の歴史 (中国中学校歴史教科書)」、小島晋治ら監訳、2001年、明石書店
- (10) 「中国才子佳人小説の影響－馬琴の場合－」、磯部祐子、2003年3月、高岡短期大学紀要第18巻
- (11) 「女子十二楽坊の素顔」、2004年、日中通信社
- (12) 「詩経 (新書漢文体系15)」、2002年、明治書院

- (13) 「莊子 (新書漢文体系12)」、2002年、明治書院
- (14) 「楚辞 (新書漢文体系23)」、2004年、明治書院
- (15) 「早わかり三国志」、原遙平、2003年、日本実業出版社
- (16) 「文選・賦篇 (新書漢文体系20)」、2003年、明治書院
- (17) 「文選・賦篇二 (新書漢文体系26)」、2004年、明治書院
- (18) 「文選・詩篇 (新書漢文体系19)」、2003年、明治書院
- (19) 「唐代伝奇・新版 (新書漢文体系10)」、2002年、明治書院
- (20) 「十八史略・新版 (新書漢文体系4)」、2002年、明治書院
- (21) 「唐詩選・新版 (新書漢文体系6)」、2002年、明治書院
- (22) 「詩与画・唐詩三百首」、1997年、上海辞書出版社
- (23) 「聴く唐詩三十首」、2003年、日中通信社
- (24) 「中国の古典名著」、2001年、自由国民社
- (25) 「必携・明説漢文・修訂六版」、2004年、尚文出版
- (26) 「新版・漢語林・第2版」、2003年、大修館書店
- (27) 「分省中国地図集」、2003年、中国地図出版社
- (28) 「中国史稿地図帳 (上) 第2版」、1996年、中国地図出版社
- (29) 「中国史稿地図帳 (下)」、1990年、中国地図出版社

「トウイ・キョウの物語」現代越文サンプル
(1行～132行)

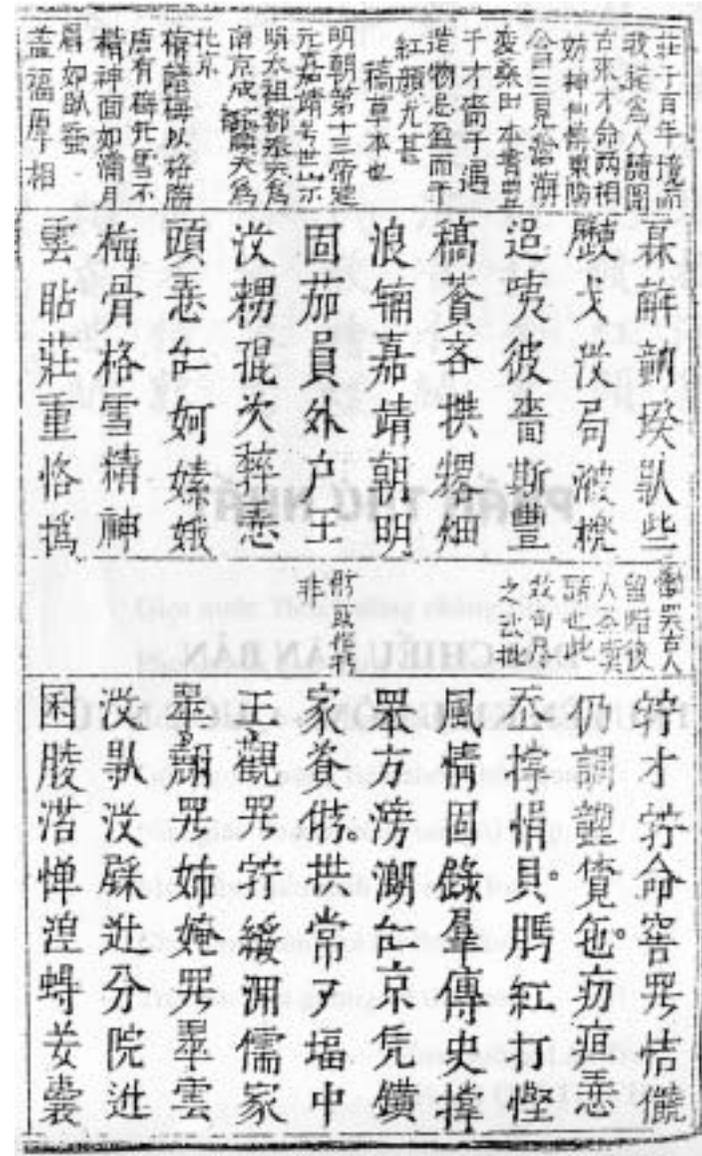
Truyện Kiều
Nguyễn Du

Trăm năm, trong cõi người ta, Chữ tài, chữ mệnh, khéo là ghét nhau.
 Trái qua một cuộc bể dâu, Những điều trông thấy mà đau đớn lòng;
 Lạ gì bỉ sắc, tư phong, Trời xanh quen thói má hồng đánh ghen.
 Cáo thơm lần giờ trước đèn, "Phong tình cổ lục" còn truyền sử xanh.
 Rằng: Năm Gia tinh triều Minh, Bốn phương phẳng lặng, hai Kinh vững vàng. 10
 Có nhà viên ngoại họ Vương, Gia tư nghĩ cũng thường thường bậc trung.
 Một trai con thứ rất lòng, Vương Quan là chữ, nói dòng nho gia.
 Đầu lòng hai ả tố nga, Thúy Kiều là chị, em là Thúy Vân.
 Mai cốt cách, tuyết tinh thần: Một người một vẻ, mười phân vẹn mười.
 Vân xem trang trọng khác vời, Khuôn trăng đầy đặn, nét ngài nở nang. 20
 Hoa cười, ngọc thốt, đoan trang, Mây thua nước tóc, tuyết nhường màu da.
 Kiều càng sắc sảo mặn mà, So bề tài sắc, lại là phần hơn.
 Làn thu thủy, nét xuân sơn, Hoa ghen thua thắm, liễu hờn kém xanh.
 Một hai nghiêng nước nghiêng thành, Sắc đành đòi một, tài đành họa hai.
 Thông minh vốn sẵn tính trời, Pha nghề thi họa, đủ mùi ca ngâm. 30
 Cung, thương, lầu bạc ngũ âm, Nghề riêng ăn đứt hồ cầm một trương.
 Khúc nhà tay lựa nên chương, Một thiên bạc mệnh lại càng não nhân.
 Phong lưu rất mực hồng quần, Xuân xanh xấp xỉ tới tuần cập kê.
 Êm đềm trướng rủ màn che, Tường đông ong bướm đi về mặc ai.
 Ngày xuân con én đưa thoi, Thiều quang chín chục đã ngoài sáu mươi. 40
 Cỏ non xanh tận chân trời, Cành lê trắng điểm một vài bông hoa.

Thanh minh trong tiết tháng ba, Lễ là Tào mộ, hội là Đạp thanh.
 Gần xa nô nức yến anh, Chị em sắm sửa bộ hành chơi xuân.
 Đập dìu tài tử giai nhân, Ngựa xe như nước áo quần như nêm.
 Ngổn ngang gò đống kéo lên, Thoi vàng vó rắc, tro tiền giấy bay. 50
 Tà tà bóng ngả về tây, Chị em thơ thẩn dan tay ra về.
 Bước lán theo ngon tiểu khê, Làn xem phong cảnh có bề thanh thanh.
 Nao nao dòng nước uốn quanh, Dịp cầu nho nhỏ cuối ghềnh bắc ngang.
 Sè sè nấm đất bên đờng, Dầu dầu ngọn cỏ, nửa vàng nửa xanh.
 Rằng: "Sao trong tiết Thanh minh, "Mà đây hương khói vắng tanh thế mà?" 60
 Vương Quan mới dẫn gần xa: "Đạm Tiên nàng ấy xưa là ca nhi.
 "Nổi danh tài sắc một thì, "Xôn xao ngoài cửa, hiếm gì yến anh.
 "Phận hồng nhan có mong manh, "Nửa chừng xuân, thoát gãy cành thiên hương.
 "Có người khách ở viễn phương, "Xa nghe cũng nức tiếng nàng tìm chơi.
 "Thuyền tình vừa ghé đến nơi, "Thì đà trâm gãy bình rơi bao giờ! 70
 "Buồng không lặng ngắt như tờ, "Dấu xe ngựa đã rêu lờ mờ xanh.
 "Khóc than khôn xiết sự tình, "Khéo vô duyên bấy là mình với ta!
 "Đã không duyên trước chẳng mà, "Thì chi chút ước gọi là duyên sau.
 "Sấm sanh nếp tử, xe châu, "Vùi nông một nắm, mặc dầu có hoa.
 "Trái bao thỏ lặn, ác tà, "Áy mò vô chủ, ai mà viếng thăm! 80
 Lòng đau sẵn món thương tâm, Thoạt nghe Kiều đã dầm dẫm châu sa:
 "Đau đớn thay, phận đàn bà!
 "Phũ phàng chi bấy Hóa công!
 "Sống làm vợ khắp người ta, "Hại thay! thác xuống làm ma không chồng!
 "Nào người phượng chạ, loan chung, "Nào người tích lục, tham hồng là ai? 90
 "Đã không kẻ đoái, người hoài,
 "Gọi là gặp gỡ giữa đờng,
 Lâm râm khấn khứa nhỏ to, Sụp ngồi, đặt cổ trước mỏ, bước ra.

Một vùng cỏ áy, bóng tà,	Gió hiu hiu thổi một và bông lau.	
Rút trâm sẵn giắt mái đầu,	Vạch da cây, vịnh bốn câu ba vắn.	100
Lại càng mê mẩn tâm thần,	Lại càng đứng lặng tần ngần chẳng ra.	
Lại càng ủ dột nét hoa,	Sầu tuôn đứt nối, châu sa vẫn dài!	
Vân rằng: "Chị cũng mực cười,	"Khéo dư nước mắt, khóc người đời xưa!"	
Rằng: "Hồng nhan tự nghìn xưa,	"Cái điều bạc mệnh có chừa ai đâu.	
"Nỗi niềm trông đến mà đau,	"Thấy người nằm đó, biết sau thế nào?"	110
Quan rằng: "Chị nói hay sao,	"Một lời là một vắn vào khó nghe!	
"Ở đây âm khí nặng nề,	"Bóng chiều đã ngả, dậm về còn xa."	
Kiều rằng: "Những đáng tài hoa,	"Thác là thế phách, còn là tinh anh,	
"Dễ hay tình lại gặp tình,	"Chờ xem, ắt thấy hiển linh bây giờ."	
Một lời nói chưa kịp thưa,	Phút đầu trận gió cuốn cờ đến ngay.	120
Ào ào đổ lộc, rung cây,	Ở trong đường có hương bay ít nhiều.	
Đè chừng ngọn gió lẩn theo,	Dấu giày từng bước in rêu rành rành.	
Mặt nhìn, ai nấy đều kinh,	Nàng rằng: "Này thực tinh thành chẳng xa.	
"Hữu tình ta lại gặp ta,	"Chớ nề u hiển, mới là chị em."	
Đã lòng hiển hiện cho xem,	Tạ lòng, nàng lại nổi thêm vài lời.	130
Lòng thơ lai láng bởi hồi,	Gốc cây, lại vạch một bài cổ thi.	
.....	

「トウイ・キョウの物語」越式漢文サンプル
(1行~20行)



わやくしゃちゆう げんだいえつぶん とうぶん かん けいさい
(和訳者注：現代越文を当分の間 <http://homepage3.nifty.com/daovaquat/> に掲載。)

トウイ・キョウの即興詩

トウイ・キョウが、^{まぼろし}幻の女性^{じよせい}ダム・ティエン（淡仙）^{もと}の求め
に^{おう}応じ、^{ひとふで}一筆で^か書いたという^{じゆう}十の^{そっきょう}即興の詩（本文脚注33参照）
は、^{つぎ}次のようなものでした。

- 一 惜多才、鴛箋不忍裁。合歡年年為人譜、自身只把相思捱。相思捱、惜多才。
- 二 憐薄命、夜夜成孤另。金屋常開貯阿嬌、偏咱一面難僥倖。難僥幸、憐薄命。
- 三 悲岐路、羊腸苦難度。路艱未若奴心艱、一折差時千折誤。千折誤、悲岐路。
- 四 憶故人、眼見白頭新。何曾昔宿雲霄上、認得平生車笠真。車笠真、憶故人。
- 五 念怒嬌、对鏡頓魂消。我見猶然頻嘆息、怎教紅粉不相嘲。不相嘲、念怒嬌。
- 六 哀青春、嬌花似美人。正是上林春色好、願祈風雨潤花神。潤花神、哀青春。
- 七 嗟蹇遇、好夢都醒去。非是逢人便乞憐、只因不識朱門路。朱門路、嗟蹇遇。
- 八 苦零落、一身無処着。落花辞樹自東西、孤燕失巢繞帘幕。繞帘幕、苦零落。
- 九 夢故園、帰魂誰肯援。松菊旧廬都不識、白雲芳草默無言。默無言、夢故園。
- 十 哭相思、硬哽已多時。心痛有声吞不住、情深放吐忽傷悲。忽傷悲、哭相思。

しゅうでん きんうんぎょうでん ちゆうごくこてんしやうせつめいちよひやくぶ しん せいしんさいじんへんじ ねんかん
出典：「金雲翹伝（中国古典小説名著百部）」、清・青心才人編次、1995年刊、
ホアシャしゅうばんしや
華夏出版社

「日本の読者の皆さまへ」の原文

Bạn Đọc Nhật Bản Thân Mến !

Tôi rất vinh dự viết vài lời giới thiệu cho quyển *Truyện Kiều* của đại thi hào Nguyễn Du do ông Seiji Sato đã bỏ nhiều công sức dịch sang tiếng Nhật.

Truyện Kiều là tác phẩm vĩ đại của kho tàng Văn học Việt Nam. Nó ra đời đã hơn hai trăm năm nay nhưng vẫn đang làm say đắm, rung động trái tim hàng triệu hàng triệu bạn đọc Việt Nam. Ở Việt Nam, việc tìm hiểu, nghiên cứu *Truyện Kiều* là niềm say mê của mọi người yêu văn học. Thường thức *Truyện Kiều* là một thú vui cao sang trong cuộc sống. Nhiều người Việt Nam yêu *Truyện Kiều* đến mức thuộc lòng, có thể đọc xuôi, đọc ngược hoặc đọc bất cứ một câu, một đoạn, một trang nào trong *Truyện Kiều*. Ở Việt Nam, người ta tâm sự với nhau, chào hỏi, chúc mừng, thử tài thử sức nhau qua sự vận dụng *Truyện Kiều*. Người bình dân Việt Nam thuộc *Truyện Kiều* ở mọi nơi. Những bà mẹ Việt Nam ru con bằng *Truyện Kiều*. Nam nữ yêu nhau, mượn câu Kiều tâm sự, thề bồi:

"Vàng trắng vàng vạc giữa trời,
Đình ninh hai miệng, một lời song song."

Trong thế kỷ XX, *Truyện Kiều* được nghiên cứu và giới thiệu rộng rãi, được dịch ra nhiều thứ tiếng. Trước ông Sato cũng đã có một số dịch giả Nhật Bản dịch *Truyện Kiều*. Song, *Truyện Kiều* là một tác phẩm lớn mà nhiều người có thể cảm nhận, khám phá từ nhiều phía khác nhau. Điều này không có gì khó hiểu. Vì nhà nghệ sĩ lớn bao giờ cũng kết tinh

trong tác phẩm của mình những ý nghĩa nhân sinh rất sâu sắc. Và vì vậy chúng ta cần biết sơ qua quan điểm nhân văn của tác giả *Truyện Kiều*.

Nguyễn Du là con người rất tài hoa. Ông sinh trưởng trong một gia đình có truyền thống văn học. Anh ruột Nguyễn Du làm đến chức tể tướng trong triều đình nhà Nguyễn. Nguyễn Du được thừa hưởng tinh hoa văn hoá từ khắp mọi miền của đất nước Việt Nam. Bởi quê cha Nguyễn Du ở Hà Tĩnh, miền Trung Việt Nam, một vùng đất hiếu học, nhiều nhân tài. Quê mẹ ở Bắc Ninh, trung tâm miền Bắc Việt Nam, vùng đất có truyền thống văn hoá lâu đời, đặc biệt là nghệ thuật hát quan họ, mẹ ông vốn là một bậc tài hoa nổi tiếng. Nguyễn Du sống trong thời loạn, ông bôn ba khắp nơi, vinh nhục đã từng. Ông đã làm quan trong triều đình Huế và hai lần được cử làm chánh sứ sang tiếp kiến triều đình Bắc Kinh (Lần sau chưa kịp đi thì ông bị bệnh, qua đời khi mới ngoài 50 tuổi).

Nguyễn Du là người có trái tim vĩ đại, cảm thông thương yêu con người đến tận cùng. Trong *Văn tế thập loại chúng sinh*, ông thương xót cho mọi kiếp người, từ kẻ hài nhi "lỗi giờ sinh lìa mẹ lìa cha", đến những văn quan võ tướng, những bậc đế vương: "Đãi thầy trăm họ làm công một nhà", những người dân nghèo lao động vất vả. Nhưng Nguyễn Du thương nhất là những người phụ nữ, ông đã viết:

"Đau đớn thay phận đàn bà,
Lời rằng bạc mệnh cũng là lời chung"

Truyện Kiều là tác phẩm vĩ đại thể hiện sâu sắc nhất trái tim nghệ sỹ của Nguyễn Du và tài năng nghệ thuật cự phách của ông. Các bạn hãy đọc *Truyện Kiều*, theo mỗi bước chân của nàng Kiều trong cuộc đời lưu

lạc 15 năm, mỗi bước đi một đón đau, lệ tràn máu ứa. Nỗi đón đau của nàng Kiều là đón đau của nhà thơ Nguyễn Du trước thân phận con người. Trong các thời đại phong kiến Á - Đông, thân phận người phụ nữ hết sức đau khổ cực nhục, bị phân biệt đối xử v.v... *Truyện Kiều* là tình thương của Nguyễn Du đối với thân phận người phụ nữ và nói chung thân phận của những người bần hàn, nghèo khổ. Và Nguyễn Du đã nói lên tiếng nói của lương tri con người, không chỉ ở Việt Nam, mà ở bất cứ nơi đâu có con người, có cuộc đời, có những thân phận đau thương, có cái đẹp - mà người phụ nữ là tiêu biểu nhất - bị chà đạp.

Đọc *Truyện Kiều*, bạn sẽ hiểu Nguyễn Du, hiểu văn hoá Việt Nam mà đặc trưng là yêu thương con người, quý trọng con người và dám đứng lên bảo vệ quyền sống của từng con người, của cả quốc gia, dân tộc, như trước Nguyễn Du hàng trăm năm, Nguyễn Trãi, nhà thơ lỗi lạc của Việt Nam, danh nhân văn hoá thế giới, đã viết,

"Việc nhân nghĩa cốt ở yên dân..."

(Bình Ngô Đại Cáo)

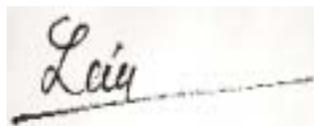
Và sau Nguyễn Du gần hai trăm năm, nhân dân Việt Nam vẫn kiên trì đấu tranh để tự giải phóng mình khỏi những khổ đau bất công, nghèo khổ hướng tới một nền dân chủ chân chính.

Truyện Kiều và Nguyễn Du là niềm tự hào của người Việt Nam chúng tôi. Năm 1966, Nguyễn Du đã được UNESCO công nhận là Danh nhân văn hoá thế giới. Các bạn đến với *Truyện Kiều* là đến ngay với một đỉnh Fuji trong văn hoá Việt Nam. Cuộc tiếp xúc ban đầu với một đỉnh cao như vậy chắc chắn có nhiều khó khăn. Nhưng càng nhiều khó khăn, chúng ta sẽ khám phá ra nhiều điều thú vị. Và chúng tôi cũng tin tưởng

rằng, văn hoá Nhật Bản và văn hoá Việt Nam cùng nằm trong vùng văn hoá Á - Đông cũng có quan hệ và chịu ảnh hưởng văn hoá Trung Hoa nên chúng ta dễ đồng cảm, dễ hiểu được nhau. Bởi vì, một trong những khó khăn của bạn đọc *Truyện Kiều* là gặp rất nhiều điển tích cổ của Trung Hoa, nhưng hiểu rồi, các bạn sẽ rất thú vị khi Nguyễn Du diễn tả cái phức tạp của tình cảm bằng một hình ảnh giản dị của điển tích. Và con đường tìm hiểu điển tích Trung Hoa thì tôi tin rằng bạn đọc Nhật Bản cũng sẽ đi cùng con đường với bạn đọc Việt Nam, hơn nữa chúng ta có nhiều từ điển hỗ trợ như *Điển cố văn học*, các loại từ điển văn liệu khác, chúng ta sẽ hiểu *Truyện Kiều* và Nguyễn Du. Khi đã hiểu rồi, chúng ta sẽ đến với nhau trong niềm vui, trong sự hiểu biết, trong tình hữu nghị. Chúng tôi tin tưởng rằng, đồng bào của những người Nhật Bản đã đến Việt Nam từ thế kỷ 16, đã để lại những dấu ấn văn hoá ở đô thị cổ Hội An - một di sản quý mà ở Việt Nam chúng tôi yêu quý và bảo vệ - cũng sẽ hiểu và yêu mến *Truyện Kiều* và Nguyễn Du.

Xin cảm ơn việc làm cao quý của ngài Sato. Xin chúc các bạn thành công trên con đường đến với *Truyện Kiều* và Nguyễn Du.

Hà Nội 07-05-2004, Ngày kỷ niệm
50 năm chiến thắng Điện Biên Phủ



Nhà văn Chu Giang Nguyễn Văn Lư
Giám đốc Nhà Xuất Bản Văn Học
Hà Nội - Việt Nam

「和訳を終えて」の英訳

Translator's Note

*Trăm năm, trong cõi người ta,
Chữ tài, chữ mệnh, khéo là ghét nhau.*

.....

It sounds like lullaby when one recites *Kieu's Story* in Vietnamese language which has six tones.

I had a chance of making trips to Vietnam around the year 2002 for 8 months in total, and I experienced four seasons of Hanoi and the Red River Delta. *Kieu's Story* is the book I encountered there on one of such occasions.

When I searched its Japanese version, it was not easy. So I decided to read its English version carefully referring to a dictionary. In the course of it, I realized that *Kieu's Story* gives us a kind of power to live. Then I started to hope that this precious and beautiful Vietnamese literature would be read by those who are interested in Vietnam and/or grope for how to live, young friends in particular, and in modern and plain Japanese.

Therefore, I decided to open the door to *Kieu's Story* in Japan.

Before starting the translation work, I sent a letter to the publishing house of the original book asking for a permission to translate and publish it. In October 2003, I received a letter from Mr. Nguyễn Văn Lư, director of Nhà Xuất Bản Văn Học publishing house. He wrote that they would be willing to provide

me the copyright for translating the book, and to introduce my translated version to Vietnamese readers, in order to establish a bridge of friendship between Japanese and Vietnamese literature. While reading this letter, I realized my recklessness, and I felt that it might have been the order of Heaven.

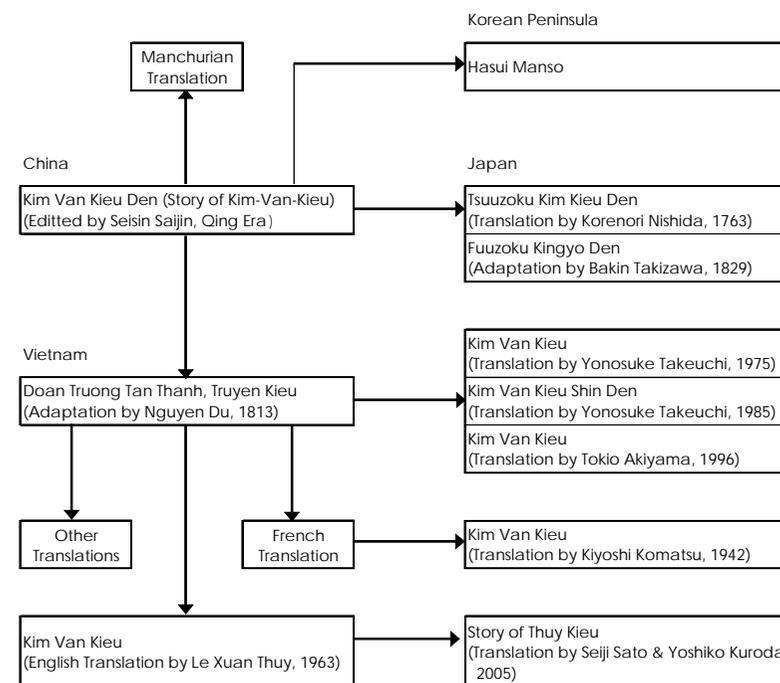
I came to know about *Kieu's Story* through "The Story of Vietnamese History" written by Mr. Sadao Ogura. He wrote: "the moral of the adventurous and sorrowful story on a young lady is adopted in Vietnamese schoolbooks, and the Vietnamese people often quote the passages of the story in their daily conversation."

By checking websites, I also came to know that, so far, Prof. Yonosuke Takeuchi (1922-1999) and Mr. Tokio Akiyama (1917-1999) had published a Japanese version of *Kieu's Story* in 1975 and in 1996 respectively. In addition, Prof. Kenichi Kawaguchi of Tokyo University of Foreign Studies informed me that Mr. Kiyoshi Komatsu (1900-1962) also published another Japanese version in 1942 by translating a French version.

On the other hand, an academic paper written in 2003 by Prof. Yuko Isobe of Takaoka National College explains that Korenori Nishida had published in 1763 a translation of a popular Chinese novel named "Story of Kim-Van-Kieu" edited by Seishin Saijin, and that Bakin Takizawa (1767-1848) an adaptation in 1829. Furthermore, she informed me that the existence of another translated versions in the Korean Peninsula and so on proves the extensive diffusion of "Story of Kim-Van-Kieu" to Asian countries.

While several versions of *Kieu's Story* are published in Vietnam, there are some differences in details among these

versions. The original book by Nguyễn Du had been written in Nôm characters, something that have been completely replaced by Quốc Ngữ characters in contemporary Vietnam.



Diffusion of "Story of Kim-Van-Kieu"

As mentioned above, *Kieu's Story* is a literature of unfailing interest with deep backgrounds in historical, geological and academic terms. This is why I wrote in the above that I would like "to open the door to *Kieu's Story*".

The basis of this Japanese version is "Kim Van Kieu, English Translation, Footnotes and Commentaries by Lê Xuân

Thủy" published by Nhà Xuất Bản Văn Học. In addition, I relied on "Đoạn Trường Tân Thanh, Truyện Kiều, Đối Chiếu Nôm - Quốc Ngữ" from the same publishing house for Japanese Kanji characters of the names of persons and places.

Kana characters are printed alongside Kanji characters to show their reading for Vietnamese readers. Poet Ms. Yoshiko Kuroda kindly advised me on an understanding of the story as well as on Japanese expression.

This project has been warmly supported by many Vietnamese and Japanese friends. I would like to extend my sincere gratitude to Mr. Nguyễn Văn Lưu, Ms. Trịnh Thị Diệu, Ms. Nguyễn Mai Phương, Mr. Nguyễn Đức Minh, Ms. Nguyễn Thị Loan, Mr. Takemasa Hirosaka, Mr. Yasuhiko Hatahira, Ms. Ryoko Aso, Ms. Takako Ogawa, Mr. Tomoyoshi Takeda and finally to my dear family.

I hope that this precious and beautiful Vietnamese literature which would give readers a kind of power to live would be read by those who are interested in Vietnam and/or grope for how to live, young friends in particular. It would be an almost undeserved happiness for me if this Japanese version could contribute to establish a bridge of friendship between Vietnam and Japan.

February 12th, 2005 *Seiji Sato*

目次

	ページ 頁
日本の読者の皆様へ.....	2
「トウイ・キオウの物語」の舞台となった地域.....	7
「トウイ・キオウの物語」の登場人物.....	9
「トウイ・キオウの物語（斷腸新聲・傳翹 <i>Truyện Kiều</i> ）」.....	11
第1章 ヴウン家.....	12
第2章 ダム・ティエンの墓.....	14
第3章 キム・チョンとトウイ・キオウの出会い.....	21
第4章 トウイ・キオウへの予言.....	25
第5章 キム・チョンとトウイ・キオウの秘密の約束.....	30
第6章 キムの旅立ち.....	49
第7章 トウイ・キオウの犠牲.....	52
第8章 流落.....	73
第9章 スー・カイン.....	83
第10章 転落.....	90
第11章 キオウとトゥック.....	95
第12章 善良な役人.....	101
第13章 トウックの旅立ち.....	108
第14章 意地悪な妻.....	111
第15章 誘拐.....	117
第16章 奴婢の仕事.....	122
第17章 対面.....	127
第18章 キオウの出家.....	135
第19章 ザック・ズエン.....	145

第20章	新たな不運.....	147
第21章	キオウとトゥー・ハイ.....	153
第22章	キオウの審判.....	163
第23章	トゥー・ハイの死.....	171
第24章	自殺.....	179
第25章	救出.....	184
第26章	キム・チョンの帰還.....	192
第27章	キムとキオウの縁.....	204
エピソード.....		220
英訳者による解説.....		222
「誓い」の世界.....		226
和訳を終えて.....		231
底本・参考資料.....		235
「トウイ・キオウの物語」現代越文サンプル.....		237
「トウイ・キオウの物語」越式漢文サンプル.....		240
トウイ・キオウの即興詩.....		241
「日本の読者の皆様へ」の原文.....		242
「和訳を終えて」の英訳.....		246
目次.....		250

佐藤 清二 さとう せいじ

1959年山形県長井市生まれ。1983年北海道大学大学院工学研究科修士課程修了、運輸省入省。(財)国際臨海開発研究センター研究主幹時代の2002年前後、ベトナムに滞在。2003年より岡山県庁勤務。

黒田 佳子 くろだ よしこ

1945年京都市生まれ。詩人。横浜市在住。1968年立教大学文学部日本文学科卒業。詩誌『焔』同人。著書は『父・井上靖の一期一会』。現在、井上靖記念文化財団発行誌『伝書鳩』を編集。

トウイ・キオウの物語 (斷腸新聲・傳翹 *Truyện Kiều*)

2005年3月9日 第1刷発行

原作 ゲエン・ズー (阮攸、*Nguyễn Du*)

越英訳・脚注 レ・スアン・トウイ (*Lê Xuân Thủy*)

英和訳 佐藤清二 (*Seiji Sato*)、黒田佳子 (*Yoshiko Kuroda*)

発行者 佐藤清二

発売所 株式会社 吉備人 (吉備人出版)

〒700-0823 岡山市丸の内 2-11-22

電話 086-235-3456

印刷・製本 サンコー印刷 株式会社

©Seiji Sato & Yoshiko Kuroda 2005 Printed in Japan

ISBN4-86069-089-3 C0097

定価はカバーに表示してあります。